

日本質的心理学会 第15回大会 in

沖縄



今帰仁城の緋寒桜



名護のピンブンガジマル



名護ビーチで
サバニの操船訓練



大会テーマ

わかちあう

— 沖縄を知る・知らせる・語り継ぐ —

日時

2018年

11月24日(土) ~ 25日(日)

会場

名桜大学 (沖縄県名護市字為又1220-1)

開催のご挨拶

日本質的心理学会第15回大会は、沖縄県名護市にある名桜大学で開催いたします。開催日程は、2018年11月24日（土）、25日（日）です。例年の開催時期である秋を避けて、台風の心配がない11月末にいたしました。めんそーれ沖縄です。

初めて日本質的心理学会の大会を沖縄で開催できることは非常に光栄なことであり、うれしいことです。名桜大学の看護学科の教員を中心に、準備を進めています。

沖縄県北部を山原（やんばる）と呼びます。中南部と違って、多くの森とサンゴ礁やジュゴンも生息している大浦湾もあり、生物多様性の自然が広がっています。そのやんばるの山や海が戦後73年間も米軍基地として使われ、今また広範な海が埋められ、森が破壊されようとしています。そこに住む人々の生活は如何なるものか想像できるでしょうか。名護市はまさにそういう所です。それでも1月末に緋寒桜が咲き、4月の海ひらき後、海ではハーリーやサバニが見られ、6月の慰霊の行事が各地域で執り行われます。夏から秋にかけては、旧盆のエイサーや各地の豊年祭が競ってあります。人々は唄って踊って抵抗しているのです。

第15回大会のテーマは、「わかちあう」です。上で述べたような沖縄のもつ異文化、植民地の物語を参加者の皆様とともに、学際領域を超え、過去に、未来に、海外に、国内に、紡ぎなおし、わかちあう場となれと願っております。果たしてわかちあえるのかということも含めてです。

過去から現在、未来に共有できるような沖縄の歴史や文化、生活に関連するシンポジウムや講演を大会企画としていくつか考えております。また、大会や懇親会では伝統文化に触れる、体験するコーナーなども準備したいと思っています。「沖縄を知る・知らせる・語り継ぐ」というサブテーマにちなんだフィールドワークや映像も提供し、参加者の皆さんと充実した時間を共有できるよう、準備を進めたいと思っています。

皆様方の日頃の研究成果をぜひ、沖縄で名護で発表し、未知の沖縄に触れるためにお越しく下さい。準備委員会、実行委員会一同、多くの皆様に歓迎するためにお待ちしております。

日本質的心理学会第15回大会準備委員長

稲垣絹代

目次

1. 大会参加者へのご案内	1
2. 大会企画概要	3
3. 交通アクセス	5
4. 会場案内	6
5. 大会スケジュール	11
6. 大会プログラム	
(1) 大会企画シンポジウム	13
(2) 大会企画市民公開講演	15
(3) 大会企画教育講演	16
(4) 大会企画特別講演	17
(5) 委員会・会員企画シンポジウム	18
(6) ポスター発表	65

1. 大会参加者へのご案内

1) 大会概要

大会テーマ：「わかちあう」 ― 沖縄を知る・知らせる・語り継ぐ ―

第 15 回大会 HP: <http://www.shitsushin15.jp/index.html>

日本質的心理学会 HP: <http://www.jaqp.jp/>

第 15 回大会メールアドレス：shitu15meio@gmail.com

会期：2018 年 11 月 24 日（土）、25 日（日）

場所：名桜大学（沖縄県名護市）

大会初日の 11 月 24 日(土)は名桜大学において、他の学会が学生会館(サクラウム)において開催されています。16 時ごろ終了予定ですので、それまでは、学生会館(サクラウム)には、出入りしないでください。

なお、講義棟 2 階も両日とも中国語検定試験の会場となっており、出入りは禁止となっておりますので、ご注意ください。

2) 大会参加について

受付場所：多目的ホール 1F 入り口ホール

受付時間：両日とも 8:00～17:00

①大会参加事前申し込みの方

入金済みの方には、事前に大会抄録、参加証と領収書が発送されています。受付でネームホルダーを受け取り、各会場へお越しください。事前登録をされていても未入金のかたは、当日受付のところで、お支払いください。

②大会当日参加申し込みの方

当日参加の方は、受付でご記名後、参加費をお支払いください。参加費、懇親会費は下記の通りです。

大会参加費（当日） 一般会員・非会員 6000 円 学生会員 3000 円

懇親会費（当日） 一般会員・非会員 5000 円 学生会員 3000 円

*学生会員の方は学生証をご提示ください。聴講生、研究生も学生に含まれます。

*大会初日の開始時刻前後は受付が混雑することが予想されます。時間に余裕を持ってお越しください。

*大会期間中のお知らせや変更は、受付の掲示板にてお知らせいたします。

*期間中、日本質的心理学会デスクが設置されます。入会などの各種問い合わせはこちらにお願いいたします。

3) クローク

大会期間中、多目的ホールの 1 階にクロークを設け、皆様のお荷物をお預かりいたします。ご利用の際には、係員より番号札をお受け取り下さい。なお、貴重品についてはお預かりできませんので、個人で管理してください。11 月 24 日は 8 時～18 時、25 日は 8 時～17 時です。

4) 学内無線 LAN 使用について

大学内の無線 LAN はご自由に使用できます。設定方法は受付等に記載しておりますので、お問い合わせ下さい。

5) 懇親会について

大会 1 日目の 18 時から名桜大学学生会館（サクラウム）の 6 階 B ホールにて懇親会を開催いたします。参加者との自由な交流の場となります。お一人での参加も大丈夫です。沖縄の夜を十分満喫していただけると幸いです。当日参加も可能ですので、奮ってご参加ください。

6) 昼食について

名桜大学のキャンパス内には大会期間中に使用できる食堂、売店はありません。

事前参加登録で 24 日の昼食を申し込まれ、入金をされた方には、抄録集と一緒に弁当申し込みの、☐チェックが印字された名札を同封しております。同様に 25 日（日）の総会参加者で昼弁当も事前申し込みされた方の名札には、☒チェックが印字されております。お弁当受け取り時に提示してください。24 日の弁当は多目的ホール 1 階の受付の横にてお配りします。

7) 飲食・喫煙に関する注意

1 日目の休憩室、お食事場所は、講義棟 109、110、301 をご使用ください。2 日目の休憩室、お食事場所は学生会館（サクラウム）1 階、2 階をご使用ください。

学内はすべて禁煙ですので、よろしくお願いいたします。

8) 会員控室について

本大会については、1 日目は講義棟 109 と 110 を 15 時まで、302 を 18 時まで、2 日目は学生会館（サクラウム）1 階、2 階を休憩室としてご自由にご利用ください。シンポジウムの打ち合わせなどにもご使用ください。

9) 書籍の販売

書籍販売のコーナーがあります。1 日目は講義棟のピロティです。2 日目は学生会館（サクラウム）の 1 階です。

10) 沖縄伝統文化の体験コーナー

2 日目の学生会館（サクラウム）の 1 階に、沖縄の伝統文化を体験するコーナーを設置します。三線を弾く、ウチナーグチを習う、伝統茶のぶくぶく茶を味わう（11 時～14 時）などです。気軽にお立ちよりください。

2. 大会企画概要

第15回大会の大会企画は以下の予定です。

【シンポジウム】

11月24日(土)10時～12時に多目的ホールにおいて、やまだようこ氏と南博文氏の企画で「場所の力とスピリットー沖縄で語り合おう」が開催されます。

【市民公開講演】

11月24日(土)13時30分～15時に多目的ホールで、東江平之氏の講演「沖縄を語る」が開催されます。市民に無料で開催されますのでお誘いあわせの上お越しください。

【教育講演】

11月25日(日)9時～10時30分に多目的ホールで、やまだようこ氏の「視覚イメージで語るービジュアル・ナラティブ」の教育講演が開催されます。

【特別講演】

11月25日(日)10:45～12:15に多目的ホールで、山里勝己氏の「文学、環境、人間 ― 場所学の可能性」の講演が開催されます。

【委員会・会員企画シンポジウム】

委員会企画は3企画、会員企画は20企画を開催いたします。それぞれのテーマ、開催日時、場所につきましては、大会プログラムと抄録をご参照ください。会場には、パソコン、プロジェクター、スクリーン、マイクが準備されています。

【ポスター発表】

ポスター発表は、初日の11月24日(土)に体育館で開催いたします。発表者は、9時～10時の間に会場入り口の受付を済ませて、自分の演題番号のところに貼付してください。発表時間は、12時～13時半ですので、その時間帯には在席して、見学者とご自由に意見交換をして下さい。なお、その時間帯に不在の場合は、在席時間をポスター横に明記して対応してください。

なお、17時45分までは貼付可能ですが、最終、その時間までに各自で撤去回収して下さい。撤去されていない時は、大会事務局で撤去させていただきます。なお、撮影は発表者の許可がない限り禁止とさせていただきます。

ポスターを貼れる範囲は、縦160cm横90cm(A3版横の用紙なら10枚程度貼付できます)です。貼付方法は、大会事務局で準備したテープをご使用ください。演題番号は抄録を参照してください。事前に事務局で貼付しておきます。

優秀ポスター賞を2名選出して、24日(土)18時からの懇親会で表彰式を行います。

【プレ企画】

プレ企画に申し込みしていただいた方は、11月23日（金）12時に那覇空港国内線1階 到着口 A 側水槽前に集合してください。担当者がお待ちしております。

A コース

那覇空港～普天間飛行場周辺（嘉数高台 佐喜真美術館）昼食～嘉手納基地周辺～辺野古キャンプシュワブ・大浦湾周辺～名護市内（18時ごろ解散予定）

B コース

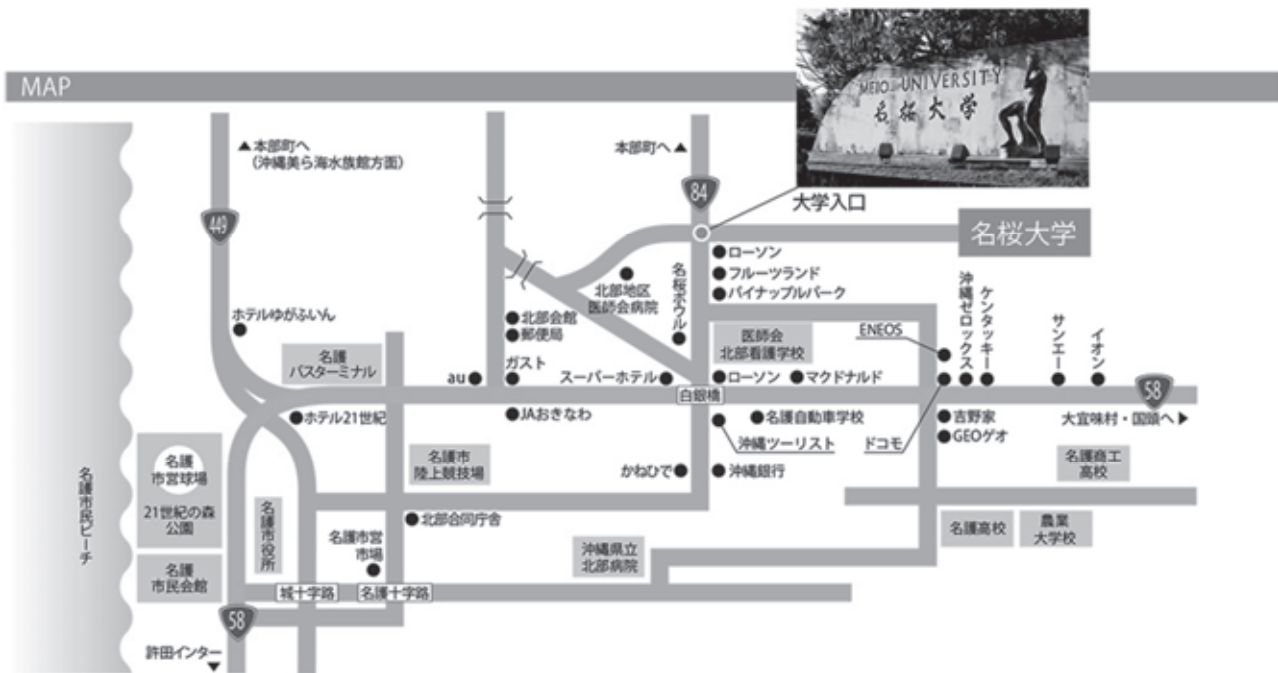
那覇空港～糸満道の駅（弁当購入）～ ひめゆりの塔～ 魂魄の塔～昼食（大度海岸）～ 平和祈念公園（平和祈念資料館 健児の塔 韓国人慰霊の塔 平和の礎）～ 第一野戦病院壕跡（八重瀬岳）～ 那覇空港道（南風原南インターから）～ 中城休憩所～ 名護市内（19時ごろ解散予定）

A コース、B コースとも専門の平和ガイドが案内します。両コースとも専用バスで移動しますが、歩く所も多いので、それにふさわしい服装や靴をお願いします。

【ポスト企画】

11月26日 9:30～16:30 に名桜大学北部生涯学習推進センター研修室1で山浦晴男による「質的統合法」紹介セミナーが開催されます。申し込みされた方は、受付で受講料をお支払いください。

3. 交通アクセス



高速バス

那覇空港到着ロビーを出て、左手のバス乗り場から

①高速バス（111番・117番）

終点の名護バスターミナルまで所要時間：約 1 時間 45 分、乗車料金：2190 円

②やんばる高速バス

名護市役所前まで所要時間：約 1 時間 50 分、バス乗車料金 1600 円

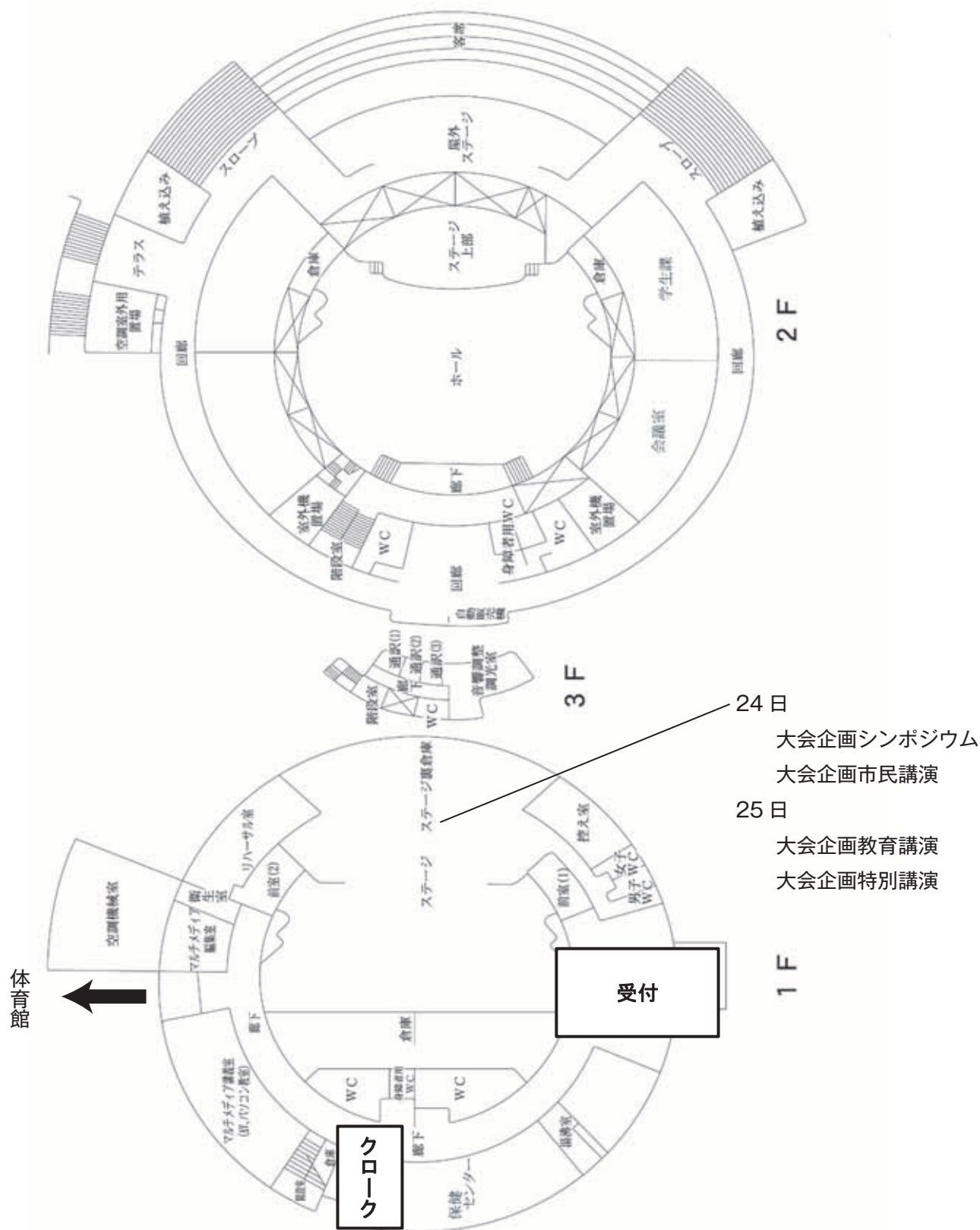
名護バスターミナル、名護市役所前から名桜大学まで、タクシーに乗車下さい。所要時間：約 10 分～15 分。 料金約 1000 円。

4. 会場案内

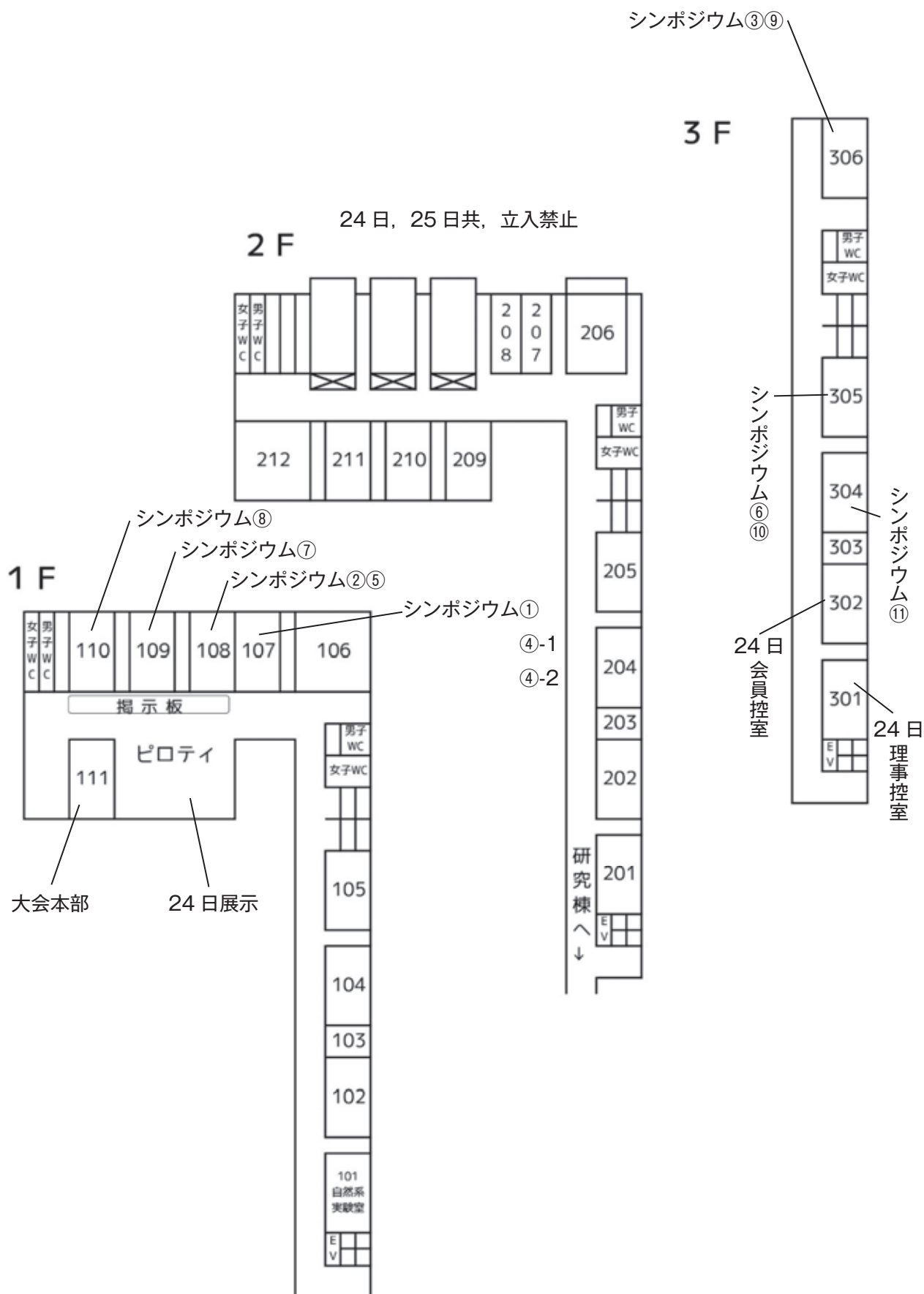
名桜大学建物配置図



多目的ホール

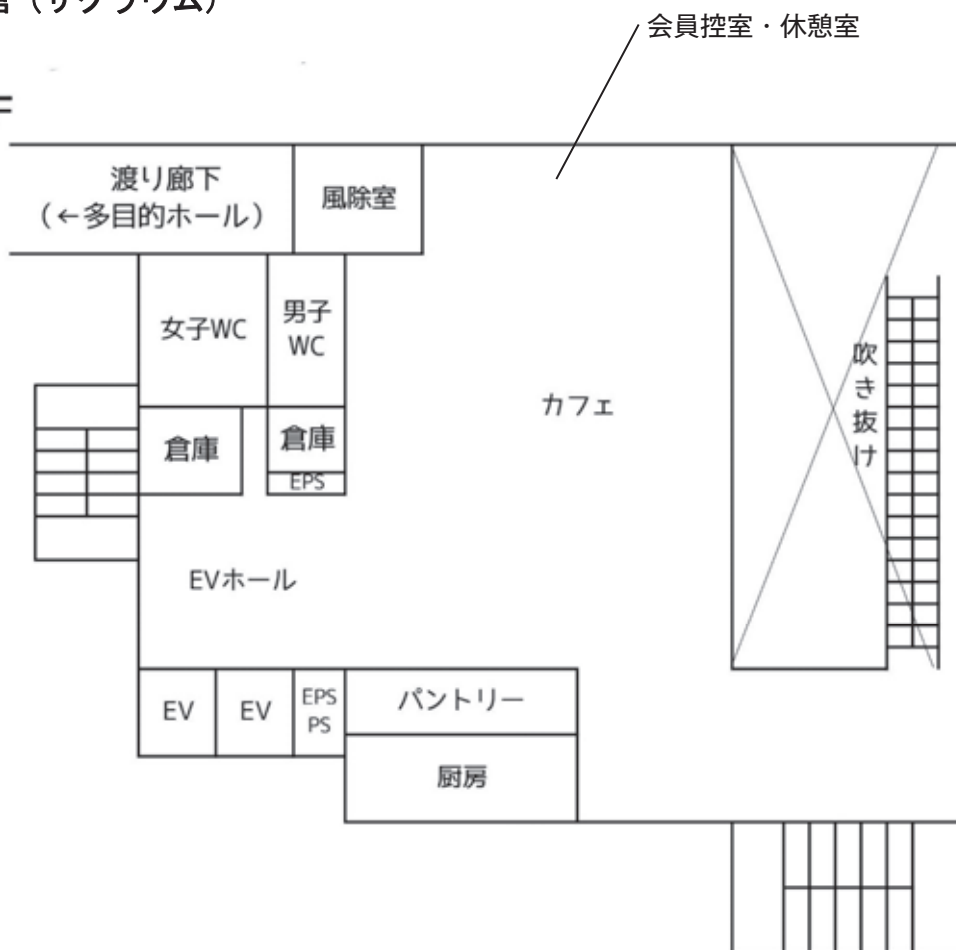


講義棟

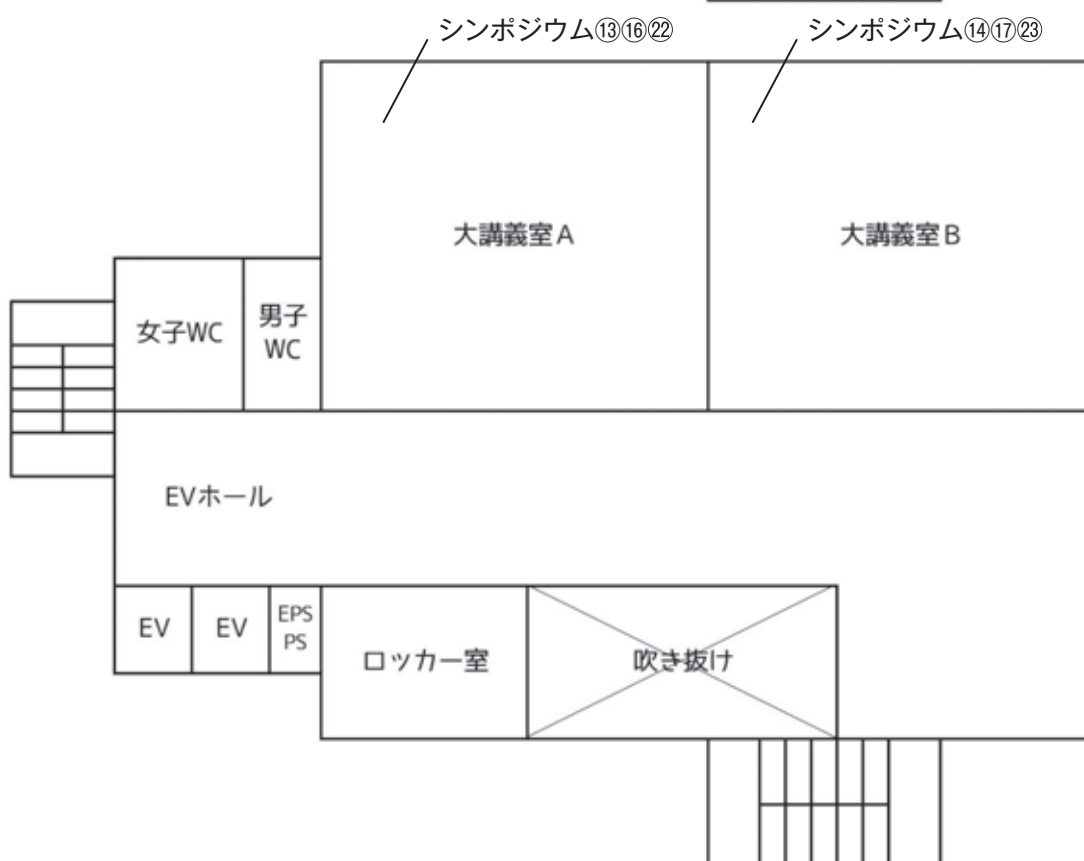


学生会館（サクラウム）

2 F

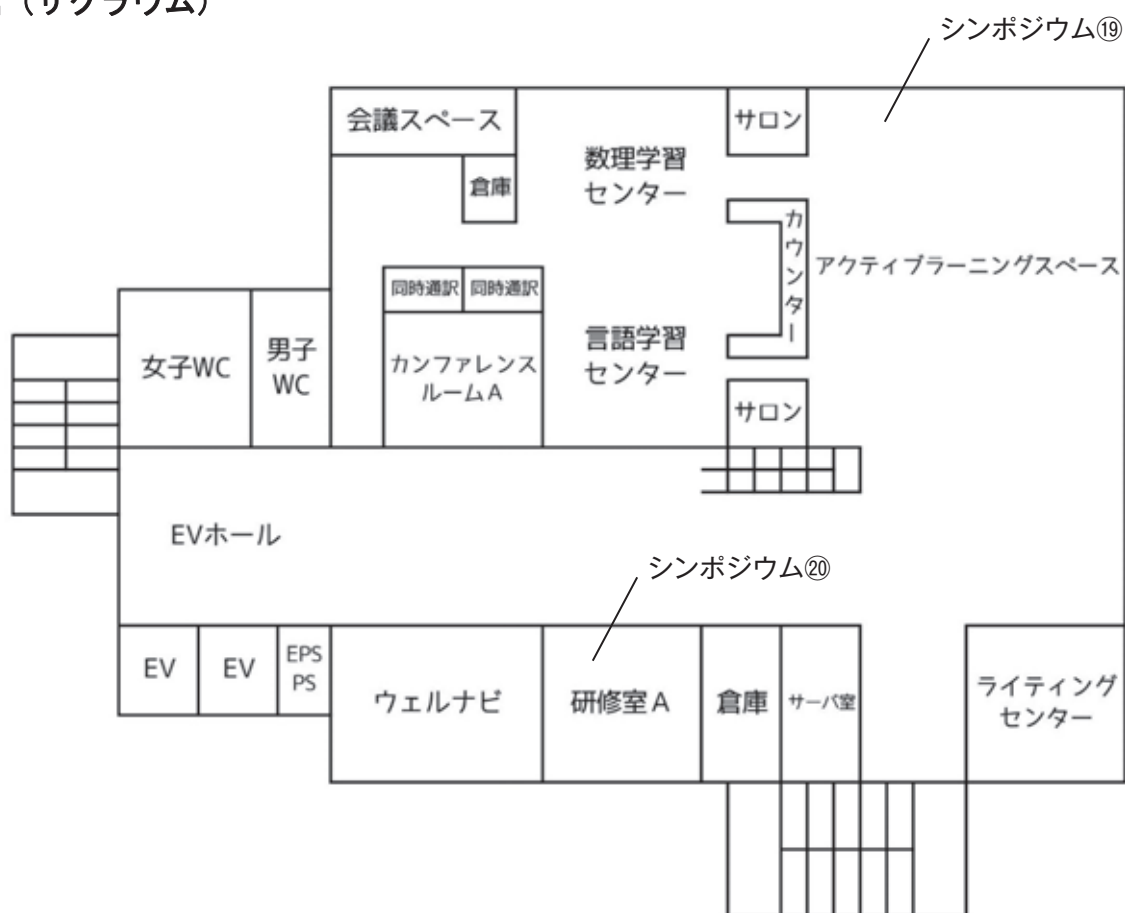


3 F

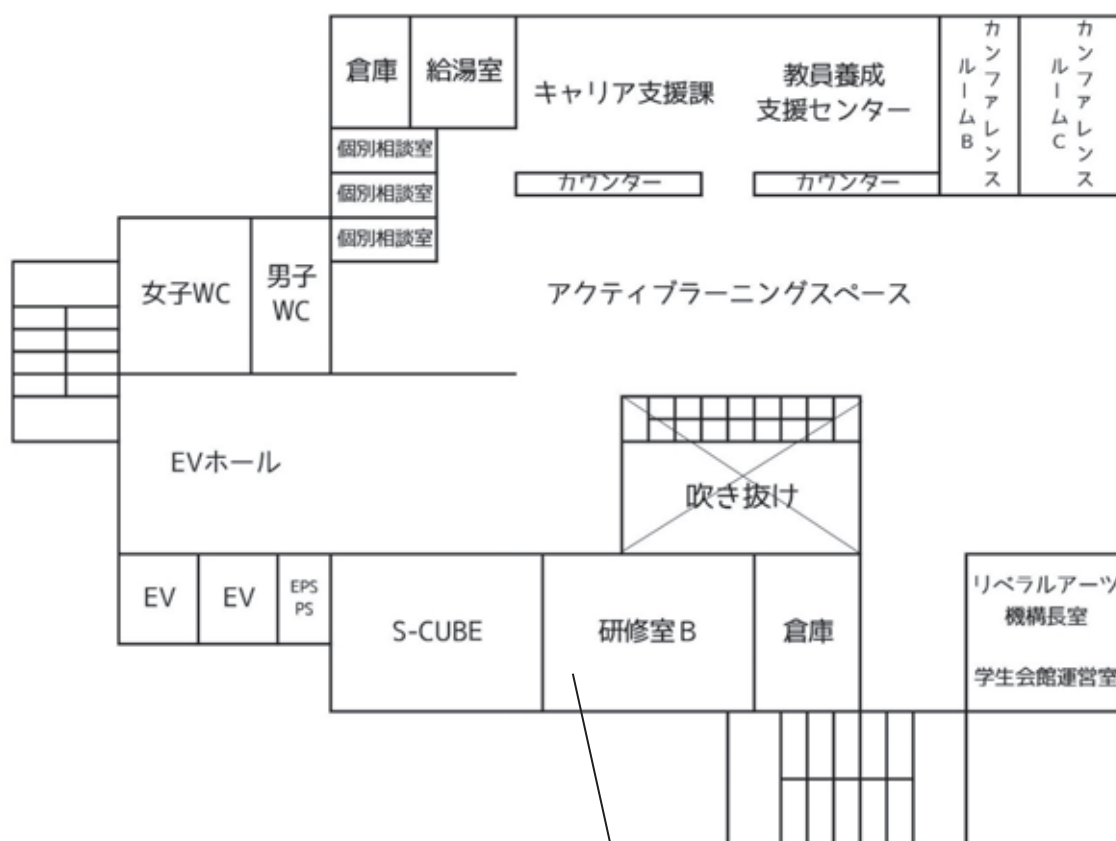


学生会館（サクラウム）

4 F



5 F



6 F B シンポジウム⑫⑱, 総会

シンポジウム⑮⑳

5. 大会スケジュール

1日目 11月24日 (土) プログラム

多目的ホール	講義棟							体育館	学生会館 サクラウム 6FB
	107	108	109	110	306	305	304		
9:45 開会式									
10:00~12:00 大会主催シンポジウム 場所の力とスピリット ー沖繩で語りあおうー (企画 やまだようこ・ 南 博文)	①10:00~12:00 性暴力の被害者と共に質的研究 をつくるための方法論ー深い傷 つきの体験をわちあうためにー (企画 大竹モルナ-裕子)	②10:00~12:00 委員会企画 質的心理学と意味、質的 心理学の意味 (企画 浦田悠)						ポスター会場 9:00~10:00 貼付 12:00~13:30 発表	
13:30~15:00 市民公開講演 沖繩を語る (東江平之)	④-1 13:30~15:30 委員会企画 プロフェッショ ナルの拡大、拡張、変容/第一 部 「学校教育と看護学の立場 から」 (企画 近田真美子)	⑤13:30~15:30 海外のフィールドに日本 人の質的研究者として長 くじっくり関わるという こと (企画 伊藤 哲司)			③13:30~15:30 立場の異なる者と共生す る: Brunerの意味の行為 の展開可能性 (企画 横山章介)	⑥13:30~15:30 生の希望をふたたびー認 知症高齢者への音楽療法 とアルコール依存症者の 回復についての語りか らー (企画 山本玲葉)			
	④-2 15:45~17:45 委員会企画 プロフェッショナ ルの拡大、拡張、変容/第二部 てつがくカフェー「プロフェッ ショナル」とは何か?ー (企画 近田真美子)		⑦15:45~17:45 「深い経験付け」(deep experiencing)とキャリ アの分岐点 (企画 土元哲平)	⑧15:45~17:45 精神医学と現象学的心理 学から死と他者の形而上 学へ(第2報): 「人文 死生学宣言」の誕生 (企画 渡辺恒夫)	⑨15:45~17:45 沖繩「体験」を語る-ナ ラティブなグループワー クを通して語り合う「わ が内なる沖繩」 (企画 田代順)	⑩15:45~17:45 社会詩学(social poetics)の読み (企画 森岡正芳)	⑪15:45~17:45 社会的危機状況から創造 される「未来のコミュニ ティ」の萌芽: ポスト社 会構成主義に向けた対話 型セッション (企画 香川秀太)	17:45までに 撤去	
									懇親会 18:00~20:00

2日目 11月25日（日）プログラム

学生会館（サクラウム）							
多目的ホール	6 F B	4Fアクティブ スペース	4 F 研修室A	5F 研修室 B	3 F大講義室A	3 F大講義室B	
9:00～10:30 大会企画教育講演 視覚イメージで語るービジュアル・ナラティヴ（やまだようこ）	⑫ 8:30～ 10:30 若者にとって沖縄の平和学習はどう生き方に影響しているのか（企画 稲垣絹代）				⑬ 8:30～ 10:30 「質的統合法（KJ法）」の質的研究の可能性を考えるー科学的質的研究に向けて（企画 山浦晴男）	⑭ 8:30～ 10:30 発話・身体動作の時間構造を記述する：コレクションに基づく質的分析の可能性（企画 細馬 宏通）	
10:45～12:15 大会企画特別講演 「文学、環境、人間ー場所学の可能性」（山里勝己）				⑮ 10:45～12:45 ナラティヴのうまれるところ、そしてその向こう：ナラティヴ研究の可能性を探る（企画 保坂裕子）	⑯ 10:45～12:45 委員会企画 質的研究の多次元領域マップを創る（企画 荒川歩）	⑰ 10:45～12:45 ナラティヴを通じた他者理解ー聞き手の視点と感性に注目しながら（企画 植田嘉好子）	
	総会13：00～14：00						
	⑱ 14:15～16：15 巨大地震後の内発的復興を促すために：アクションリサーチにおける共同当事者性を考える（企画 永田素彦）	⑲ 14:15～16：15 沖縄戦体験者の精神保健と戦争トラウマ（企画 田嶋真由美）	⑳ 14:15～16：15 集合的な場の「温度感」を記述する（企画 岡部 大介）	㉑ 14:15～16：15 相互行為研究における「教養」の復権：歴史・地理・文学・生物編（企画 阿部廣二）	㉒ 14:15～16：15 農と子どもと心理学（企画 菅野幸恵）	㉓ 14:15～16：15 「土地の力」と災害復興ー被災地のエスノグラフィーを通じて（企画 村本邦子）	

6. 大会プログラム・抄録

大会企画シンポジウム 11月24日(土)10時～12時 多目的ホール

場所の力とスピリット ―沖縄で語りあおう

企画：やまだようこ（立命館大学）・南 博文（九州大学）

司会：南 博文（九州大学）

話題提供：やまだようこ（立命館大学）

石井宏典（茨城大学）

大城凌子（名桜大学）

指定討論：南 博文（九州大学）

企画趣旨

沖縄は多くの美しい南の島々からなり、海洋文化が重奏する場所であり、民衆の共同体が息づく場所であり、ふしぎな「気（スピリット）」がただよう場所である。それは、内の者にとってはもちろん、外からやって来る者にとっても、こころ魅かれ、こころ満たされ、こころ開かれる特別な力を持つところである。

場所がもつ力は、ゲニウス・ロキと呼ばれる。沖縄という土地（loci）に宿る、たましい、精霊、原初的なもの（Genius）の声に耳を澄ましてみよう。「心」が、個人の単位に孤立して考えられがちなものに対して、ガイスト（Geist）は、第一義的には、共同的な働きである。たましいは、故郷を持ち、そこに帰って行くという観念が、宗教と呼ばれる以前に人々が抱いた共同体意識の原型のひとつであったろう。

人のこころは、もともと共同体の中に生まれ、育まれ、いくつもの世代を超えて引きつがれてきた大きな次元の「こころ」の働きに属するものであった。そして、それは場所に根ざしたもの、ローカルなものである。そして、ローカルなものこそ、多様な声を発する源になる。沖縄という場所に宿るスピリットとは、何だろうか。それは人々が生きる息づかいであり、人と人が行き交う市場にただよう気配であり、人々の骨格をつくっている精神であり、この世とあの世をむすぶたましいの動きであり、新鮮な新しい空気を吸い込んでいのちをつないでいく営みである。

沖縄は、そこにひそむ「スピリット」にふれあえる、何かに出会える期待をかき立てる場所である。本シンポジウムでは、ローカリティ（場所に根ざした）とダイバーシティ（多様性）を大切に、沖縄について語ってみたい。さまざまな観点から、さまざまに多声的な響きを奏でて、沖縄という「場所」で、聴衆のみなさんと共に語りあう場ができればと願っている。

【話題提供1 死と再生のライフサイクルーこの世とあの世を巡る祭祀】 やまだようこ

「人の一生は誕生から死まで」「人は一人で生まれて一人で死んでいく」といわれる。しかし、本当にそのような人生観で私たちは日々の生活を送っているのだろうか。あるいは、そのような人生観で仕合わせだろうか。それは人間を「個人（文脈から切り離されたもの）」とみなし、人生を「ライフスパン」として直線的に前進する時間軸でとらえてきた近代西欧的なものの見方の産物ではないだろうか。沖縄、宮古島の「ユークイ」は、村の神女たちが「聖なる場所（ウタキ）」に夜通しこもり、生者の「たましい」と死者である祖先の霊が交流し、祖霊の姿になった神女がウタキを巡りながら村人のために祈願する祭祀である。「ユークイ」は豊穡を乞うという意味である。京都、下鴨神社の「御蔭祭（みあれ

（神生れ）神事）」は、川を遡って水源となる山の「聖なる場所」から神社に「あらみたま」を移し、春の若葉とともに冬に衰えた「たましい」が復活する祭祀である。草木が枯れ果てた「ふゆ」は、これから豊穡なものが生まれる「増ゆ」という意味をもつ。

これら古くから伝わる祭祀を例にして、人生をスパン（幅）やステージ（段階）ではなく、ライフサイクル（人生循環）としてみる見方のゆたかさと現代的意義について考えてみたい。特に、二つの祭祀に共通する「死で終わる」のではなく「死から再生へ」向かうイメージと、その媒介表象としての「たましい」概念の意味、「ジェネラティビティ（世代継承と生成）」と「レジリエンス（復活力）」との関連について考察してみたい。

【話題提供2 再生の井戸—根の場所をまもる神人たち】 石井宏典

この10年、沖縄島北部の海辺に形成されたムラの祭祀の場に通うことを重ねている。ムラでは古くから、自然の恵みとムラ人の無事を祈願し感謝する祭祀が年間の節目を刻んできた。神行事（かみぎょうじ）と呼ばれるこれらの年中祭祀は、神々や先祖とつながる場所において神人（かみんちゅ）と敬われる女性たちが司る。ただ、かつてムラ内の関心を広く集めたこれらの行事は、生活環境が変化するなかで求心力を失い、供物の準備を担う輪番制も崩れていった。さらに近年は、急速な観光地化が進行する。

今回の報告では、水にまつわる祭祀と儀礼をとりあげる。旧暦元旦に井戸の若水を供えての拝み、5月5日にムラ内の主要な井戸を巡る拝みに参加し、ムラ人たちの水場の記憶について聞きとりを重ねた。山から来る湧水は、飲み水や洗い水として使われただけではなく、生命の更新をうながす聖なる水として扱われてきた。しかし、水道が敷設され、自給的暮らしから賃労働にもとづく消費生活へと移行するなかで、人びとは自然の循環から離れ、井戸への関心を失っていった。それでも神人たちは、祭祀のたびに神々を感じる場所で拝みつけ、カミ（自然）と先祖（死者）と生者の秩序と調和を懸命にまもろうとしている。そこには、自然の循環と再生のなかに人間を位置づけようとする姿勢がある。ムラ人たちはそれらの場所に包まれて、他のどこでもないこの土地に生きる者としての日常を送ることができている。

【話題提供3 やんばるの(場)と看取りの文化に生かされて・・・】 大城凌子

やんばる（山原）とは、豊かな自然と共同体のつながりが残された沖縄県北部地域を指す。多死の時代を迎え、誰もが安心して老い、安らかな最期を迎えられる地域づくりへの関心から、やんばる（場）の看取りの現象に焦点をあて、共同体とのつながりについて述べる。沖縄で、死が語られる時、73年前の沖縄戦は今なお影を落とす。しかし、戦後を生き抜いた人々が、自身の最期について語ることは、力強く、温かいエネルギーにあふれている。「戦争でようやく生き残ってきたから・・・」と、感謝の気持ちを忘れずに、地域のために働き、最期まで世の中の動きを見届けたいと語ったA氏は、「そういう生き方をすることが、人の道、生きる道」だと教えてくれた。大地に眠るたましいに呼応することは、自身の生きる意味を問うことにつながる。人は死ぬことの体験を語ることはできない。しかし、看取りの体験が共同体の中で共有されることで、看取りの文化が生成される。かつて沖縄では、葬儀を共同体での相互扶助として執り行う、りんす（隣組）という概念が共有されていた。葬送儀礼の変化に伴い失われつつあるが、やんばるでは、共同体のつながりを象徴する言葉として『りんすしんかー（近隣互助仲間）』は意味を持つ。このような場で共有される身体感覚や情緒的つながりは、暗黙知として内在化される。「私はこの地で生きてきた。最期もここで死ぬ。そして、祖霊となって子や孫を見守りたい」と語った高齢者らの声には共通する思いがある。沖縄にただよう『気（スピリット）』とは、沖縄（場）に宿るたましいの存在感に共鳴する体験なのだろうか。

(2) 大会企画市民公開講演

11月24日(土) 13時30分～15時 多目的ホール

『沖縄を語る』

東江平之（琉球大学名誉教授 元名桜大学学長）

座長 稲垣絹代（名桜大学名誉教授）

設定されたテーマは私にとって大きなチャレンジである。沖縄の自然、文化、歴史、人々の経験には極めて豊富な多様性と固有性があり、その全体像を的確に描き出すことは、私には手に負えない挑戦である。しかし沖縄で生まれ育ち、80年余にわたり、沖縄と運命を共有してきた自分にとって、避けては通れない課題であり、社会に対する責任でもあると自覚している。

本課題への取り組みに以下の3つの切り口を設定した。

第一の「私の中の沖縄」では、私の生い立ちや、共同体における暮らしや遊び、行事や祭りなど、私の中に「沖縄らしさ」をしっかりと根付かせたものについて、あと一つは、嵐のごとく襲いかかり、私のアイデンティティを揺さぶった近代化日本の戦争の歴史と郷土を破壊し多くの同胞を犠牲にした沖縄戦の実体験について触れたい。第二の「私の環境、私の世界」では、沖縄の地理や自然の個性や多様性について、第三の「沖縄理解への視点」では、沖縄を見る目に、歴史的展望の重要性と、現在のおきなわを取り巻く状況を理解することが不可欠であることを指摘する。

- 1) ここでは私の生い立ちと、やや長い成長の過程を振り返る。農家の9人兄弟の8番目に生まれ、無自覚の内に家族や共同体の影響を受けて成長する過程で、人間関係の評価や原初的宗教観が形成されていくが、それこそが私の中の沖縄の核に他ならない。また、日本の戦争の歴史が、良かれ悪しかれ、私の自己概念に大きな影響を与えたことは否めない。しかし私の価値観に決定的な影響を与えたのは、沖縄戦の体験と、それにつづく抑圧的な現実であった。沖縄が私の中にどっしりと居座るようになったと言っても過言ではない。
- 2) 沖縄の自然と地理は「沖縄らしさ」の形成に深く関わっている。温暖な気候は独自の植生や生活様式を選択的に定着させ、地理的配置構造は遠隔圏の影響を阻み、人間を含む生物の個性や固有性の形成や温存に寄与している。沖縄文化における世界観、自然観、死生観にも沖縄の自然条件の影響が色濃く反映されている。このような自然環境における私の生活誌が私の世界観を形成しているものと観ている。
- 3) ここでは主に沖縄に対する先入観や認知的バイアスの修正に役立つと思われる二つの視点を取り上げる。「昨日があって今日がある」という認識が第一である。近代化の中で何が失われ、代わりに何が強要されてきたのか。1609年の薩摩の侵入、1879年の明治政府による吸収合併、1945年の政体護持のための捨て石作戦とも評される沖縄戦の歴史的背景の中で、今日の政策や事件が受け止められているのである。歴史的展望を欠いたまま今日の沖縄のを見ると、いかにも感情的で不合理に見えるかも知れない。第二の認識は「今があって今日がある」であり、沖縄の人々は今なお過剰な基地に起因する危険や有害刺激の曝されていて、“自己決定権”が否定されている状況は明白である。日本国憲法の下に復帰を果たして既に46年、沖縄県民は今なお日本国民とは認められていないという批判もある。

(3) 大会企画教育講演

11月25日(日) 9:00~10:30 多目的ホール

視覚イメージで語るービジュアル・ナラティヴ

やまだようこ (京都大学名誉教授・立命館大学 OIC 総合研究機構)
座長 鹿嶋達哉 (広島国際大学)

ナラティヴ (narrative, もの語り) とは、ことばによって語る行為と語られたものをさす。ビジュアル・ナラティヴは、視覚イメージによって、あるいは視覚イメージとことばによって語ることである。ビジュアル・ナラティヴでは、視覚イメージとことばが連動して働く。それによって、抽象的なことばはわかりやすい身体的なイメージを呼び起こし、自分の経験とむすびついた多様な生きたイメージとなり、新たなものの語りを生みやすくなる。

ビジュアル・ナラティヴは感性や直感によって伝える形式であり、異文化コミュニケーションや臨床コミュニケーションに力を発揮する。狭義の言語は論理的な概念や構造にしばられてきた。ビジュアルでは、数十巻の哲学書におさめられるような内容を曼荼羅のように1枚の絵にして全体的・直感的に把握できる

今までナラティヴのテキストを「小説」「言説」「会話」などに求めてきたのは狭すぎたといえよう。歴史的にみても文化的にみても、ことばだけで伝達するほうが特殊だからである。壁画、建築、衣装、化粧、装飾、絵巻物、絵解き、浮世絵など、古くから私たちはビジュアル・ナラティヴを使ってコミュニケーションしてきた。さらに現代では、バーチャル・リアリティやミックス・メディアなど、拡張された現実世界に生きている。

ビジュアル・ナラティヴは最先端の質的研究の理論や方法論を切りひらく可能性をもっている。本講演では、ビジュアル・ナラティヴの基礎理論とともに、豊富な事例を見ながら、医療や支援や教育に役立つ実践について具体的に考えてみたい。

(4) 大会企画特別講演

11 月 25 日（日）10:45～12:15 多目的ホール

「文学、環境、人間 — 場所学の可能性」

山里勝己（名桜大学学長）
座長 鈴木啓子（名桜大学）

20 世紀後半の人文学研究における大きな変化のひとつは、研究の中に「環境」という視点を導入したことであった。地球環境の危機的な状況がはっきりと可視化されるようになってくると、当然のことながら、そのような世界のありようは私たちの思考に大きな衝撃をもたらした。自然科学の研究の範疇だと考えられていた「環境」が、さまざまな人文学の分野で重要な概念として認識されるようになったのである。

文学研究においては、「環境文学」（Environmental Literature）という研究分野が確立されている。そして、アメリカ環境文学会（Association for the Study of Literature and Environment and Literature）の学会誌 ISLE はいまオックスフォード出版局から刊行され、文学研究の新しい方向性を示すものとして多くの研究者に影響を与えている。

このような研究が進展する中で、当然のことながら、文学に表象される環境（自然）、人間、社会の見方が変わってきた。新しい人間像、新しい世界像、新しい「場所」像を求めて文学が読み直され、人間の住む「場所」の意味が問い直されるようになった。

本講演では、アメリカ文学を中心に、過去半世紀の間に文学に表象された人間や環境（自然）に関する変遷をたどりながら、「場所学」の可能性について聴衆の皆さまと一緒に考えてみたい。

(5) 委員会・会員企画シンポジウム

会員企画シンポジウム① 11月24日(土)10:00~12:00 講義棟 107

性暴力の被害者と共に質的研究をつくるための方法論

深い傷つきの体験をわかちあうために

企画・司会・話題提供者：大竹モルナー裕子（オックスフォード大学）

話題提供者：小野章子（東京大学）

話題提供者：齋藤梓（目白大学）

話題提供者：岡本かおり（清泉女学院大学）

性暴力は身近にある重要な課題であり、うつ病、自殺・自傷を引き起こす要因としても知られる。内閣府調査によれば、13人に一人の女性が異性から無理やり性交された経験をもつ。しかし被害体験の語りづらさや、社会の偏見と二次被害、性のタブー視等のために多くの被害者が沈黙してしまう。沈黙する被害者の声を社会に届け、適切な対応と予防政策を計画するためには、性暴力の実態を捉える質的研究が不可欠である。しかし、繊細な課題ゆえの扱いづらさと未確立な方法論、課題のもつ「重み」のために、日本では性暴力の質的研究がほぼされてこなかった。そこで昨年、性暴力被害当事者団体 Spring からの依頼を受け、心理・医療領域の研究者を中心に被害当事者団体との共同研究チームが組織され『性暴力の被害経験に関する質的研究』が開始された。WHO 世界保健機関のガイドラインに準じつつ、日本の土壌にあった方法論を模索してきた。この研究実践を事例に、性と暴力を扱う研究の方法論、実施・公表計画と倫理、インタビュー方法、研究参加者の二次被害予防、研究者の二次受傷予防、省察等について議論する。話題提供では、小野が本研究の背景である性暴力の法的課題について解説した後、大竹がコミュニティと対話・協働しながら進める質的研究の方法論を議論する。齋藤と岡本は調査協力者に二次被害を与えないインタビュー方法、及びトラウマを扱う研究者自身の二次受傷を防ぐ方法について検討する。

日本の刑法性犯罪の現状と課題 小野 章子

我が国の刑法性犯罪は、昨年6月に明治40年の制定以来110年ぶりに大幅な改正がなされた。性犯罪は被害者の人格や尊厳を著しく侵害する犯罪であるという認識のもと、「性犯罪の非親告罪化」「公訴時効の撤廃又は停止」「配偶者間における強姦罪の成立」「暴行・脅迫要件の緩和」「地位・関係性を利用した性的行為に関する規定の創設」「性交同意年齢の引上げ」等を含む10項目が検討された。結果、性犯罪は非親告罪化され、強姦罪は「強制性交等罪」となった。また肛門性交や口淫性交も性行為として含めたことで、男性の被害も同罪で処罰できることになった。さらに、監護者が支配的地位を利用して行った性行為は暴行・脅迫がなくても処罰することとされ、性犯罪の法定刑の下限も引き下げられた。従前から問題視されていた多くの事項が是正され、大きな意義のある改正となった。しかし、「公訴時効の撤廃又は停止」「配偶者間における強姦罪の成立」「暴行・脅迫要件の緩和」など、改正が見送りとなった事項もあった。また、雇用者や指導者などが地位・関係性を利用して行う性行為は処罰対象から外された。多くの課題が残され、3年後を目処に再検討がなされることとなっている。この背景をもとに、被害者の声を法改正や政策に反映させるために、今後どのような研究が必要か議論する。

コミュニティと対話・協働する研究計画と倫理 大竹モルナー裕子

上述（小野）の背景に照らし、本研究は「当事者の視点から性暴力被害経験を描き出し、それを立法学者や司法関係者に伝え、もって刑法改正に当事者の声を反映させる」ことを目的に計画された。当事者の声と経験に基づき、「どのような性交を性暴力とすべきか」を、被害発生の社会的プロセス、被害認識の形成プロセス、被害後の心理社会的影響の3つの観点から探索する。様々な被害当事者の声を広く調査結果に反映させ、且つ一般社会を巻き込みながら調査を進めるために、我々は被害当事者団体と協働しながら研究計画を立て、研究チームのトレーニングを行い、さらに専用ウェブサイトを立てて一般社会から自由な書き込みを募っている。データ分析の内容が当事者の実感に沿っているかどうかを確認するために、当事者からの「メンバーチェック」を受け、分析結果をウェブサイト上にも公開し意見を募る工夫をしている。「参加型アクションリサーチ」「コ・プロダクション」とも呼ばれるこうした方法論を用いて、性暴力被害を扱う際の利点や注意点、倫理的配慮について考察する。

インタビューでの二次被害を予防するための方法 齋藤 梓

性暴力被害では、被害後に受ける社会からの反応がその後の精神的後遺症に影響を及ぼすことが分かっている。そのため調査を行う際にも被害者に二次被害を与えないことが非常に重要である。本研究を実施するにあたり、我々はインタビュー担当者全員に対して、WHO 性暴力対応ガイドラインに準じた性暴力被害に関するトレーニングを実施した。具体的には、集団でのトレーニングを三日間実施し、さらに必要に応じて個別でのトレーニングを2～3回実施した。集団トレーニングでは、WHO ガイドラインの読み合わせ、性暴力被害とジェンダーに関する知識の確認、インタビューガイドを使用しての傾聴トレーニング、省察および省察に関するディスカッション、二次受傷予防を行い、さらにそれらに対し性暴力被害当事者からのフィードバックを得た。個別トレーニングでは、インタビューの陪席やロールプレイを行った。こうしたトレーニングを経て、インタビュアーは、性暴力被害への理解、当事者への対応について学んだ。性暴力被害には「レイプ神話」と呼ばれる社会の偏見や先入観が存在する。また、性に関する問題であるがために、個人の性や性暴力に対する価値観も、インタビュアーの言動に表れかねない。それらが二次被害を引き起こすことは、厳に避けなければならない。しかし同時に、しっかりとトレーニングを積んだならば、当事者を傷つけることなくインタビュー調査を行うことが可能である。

研究者の二次受傷を予防するための方法 岡本 かおり

二次受傷は代理トラウマとも呼ばれ、トラウマ・サバイバーと共感的に関わろうとする者であれば誰にでも生じる可能性があり、トラウマ・サバイバーを調査対象にする研究者もその例外ではない。二次受傷を受けると、安心や安全に関する感覚、自己や他者への信頼が変化し、研究者としてのアイデンティティが揺らぐだけでなく、自らのジェンダーについての認識や、同僚やパートナー・子どもとの関わりに影響が出るなど、メンタルヘルスの問題としても看過できない。同時に、データとの対話が苦痛になり、客観的態度が保てず省察が不十分になるなどの危険性もあり、研究の進捗や分析の深みといった面においても、二次受傷予防と適切な対処法を講じておくことが肝要である。本研究では、性暴力被害後、誰からも支援を受けられず過酷な状況を生き延びてきた被害者や、適切な支援を受け回復の道を歩んでいる被害者であっても被害内容そのものが惨酷で痛ましい犯罪であることなどから、研究者の受ける二次受傷は少なくないことが想定された。そこで、その予防と対処のため、インタビュアーと分析者を対象にしたワークショップが計画された。ワークショップは、性暴力被害者支援等のトラウマ臨床を専門にする臨床心理士が担当した。内容は、調査研究によって生じた影響（感情・思考・行動の変化）に関する報告と分かち合い、感情表出のワーク、各人が持つ可能性や潜在的能力に気づくためのワークを行ったので、その様子を報告する。

質的心理学と意味、質的心理学の意味

【企画代表者】浦田 悠（大阪大学）

【企画者】浦田悠（大阪大学）・山本美智代（首都大学東京）・
金馬国晴（横浜国立大学）

【話題提供者】横山草介（東京都市大学）・川島大輔（中京大学）・
浦田 悠（大阪大学）

【指定討論者】能智正博（東京大学）

【企画趣旨】本企画では、「意味」をキーワードとして、『質的心理学フォーラム』第10号の特集「質的心理学と意味、質的心理学の意味」を更に深める場を提供することを目的とする。質的心理学における最重要・再頻出キーワードの1つが「意味」であることに異論はないであろう。これまでの多くの質的心理学研究では、研究者自身も含む様々な日常を生きる人々が、意味をどのように（再）構築しているのかをリアルに掬い取ることが目指されてきた。しかし、各研究で用いられる「意味」という語がそもそもどのような意味で用いられているのかということについて、まとまった形で取り上げられることは少なかった。そこで、第10号の特集では、質的心理学における意味、およびそのような質的心理学をすることの意味について豊かな論考を執筆していただいた。今回のシンポジウムでは、まず企画趣旨と特集の背景を確認した後、特集論文の執筆者2名から話題提供をしていただき、それを受けた討論で挙げた論点を確認し、指定討論をしていただく。その後、それを踏まえ、「『意味』のある質的心理学」について参加者全員で議論を深めたい。

【話題提供 1 横山草介】「心理学はその説明の体系において『意味を用いないで』おこうとする努力をやめるべきである」（Bruner, 1990, p. 20）。このように訴えた心理学者の一人がBrunerであった。彼は、1970年代の中頃から人文学における解釈の技法を取り入れつつ展開を進めていた人類学や歴史学、社会学といった諸学の動向に注意を向けていた。そして、これらの諸学の知見を積極的に取り入れ、心理学の探求をより学際的なものにするとともに、当の探求に「意味」と「解釈」という概念を取り入れるべきことを主張した（Bruner, 1986, 1990, 1996）。この主張の背景には、20世紀の心理学研究の主要な方法論が長らく実証主義自然科学の方法論にのみ依拠してきたことに対する疑念があった。この疑念を起点として、彼は心理学の探求の中心に「意味」という概念を位置づけるべきことを主張するとともに、人間が「意味をつくり出すプロセス」についての探求を進めるべきことを訴えた。

本報告では企画シンポジウムの趣旨に照らして Bruner 心理学における意味概念の検討をおこなう。この際、検討のための道具立てとして「意味の行為（acts of meaning）」と「行為の意味（meaning of acts）」という2つの概念を導入する。「意味の行為」という概念はブルーナー（1990）の議論に基づくものであり、「行為の意味」という概念は研究の道具として独自に設定したものである（横山, 2018）。2つの概念を要約しておくならば、「意味の行為」という概念は、諸個人が生活の中で出会った出来事や体験を解釈し、理解可能にしようとする行為過程を指示する。これに対し、「行為の意味」という概念は諸個人が生活の中で出会った体験や出来事を、当人がどのように解釈し、理解しているか、という先立つ行為過程の結果を指示する。「意味の行為」と「行為の意味」という概念が Bruner 心理学においてそれぞれ何を意味し、また、双方はどのような関係にあるのか。Bruner の仕事を頼りに考えていきたい。

【話題提供 2 川島大輔】人生を通じて私たちは様々な苦難に直面する。仏教用語に愛別離苦という言葉があるように、大切な人との別れは大きな苦痛をもたらし、中でも死別はその最たるものである。こうした死別 (bereavement) やその後のグリーフ (grief) に関する研究・実践の現場では、死別者がその喪失をどのように意味づけながら、一変した世界の中でその後の人生を生きていくのかに多くの関心が寄せられている。本話題提供では、「死別における意味」に関する理論の中でもとくに、メンフィス大学のロバート・A・ニーマイアー (Robert A. Neimeyer) によって提唱され、その後多くの研究、実践の蓄積を得てきている意味再構成理論 (Meaning Reconstruction Theory) に着目する。具体的にはまず、「死別における意味」についてこれまでの歴史的変遷を概観した上で、意味再構成理論の位置づけと概要、とくに意味探求を経て構成された意味 (meaning made) と、プロセスとしての意味 (meaning making) という二つの側面があることを確認する。そして意味の認知的側面を強調することの限界から生じてきた、認知モデルからナラティブモデルへの統合に伴い生じた理論的枠組みの変化についても触れる。自己物語 (self-narrative) への焦点のシフトに伴う理論の拡張は、例えば、認知のみならず情動や行為にわたる包括的なシステムを含むようになった点、死別という出来事に対する意味のみならず、故人との関係性に対する意味構成も包含するようになった点、そしてパーソナル、対人関係、社会という3つの次元での意味再構成プロセスに迫ることが可能になった点である。最後に、今後のさらなる展開で期待される「意味」の射程について、とくに探求と了解、能動と受動、そして非一意味という観点を提示し、それぞれのあいだに迫ることの重要性を指摘する。ここから、意味 (了解) と非一意味のあいだをともにたゆたうことの、実践現場における重要性を検討したい。

【話題提供 3 浦田 悠】今回の特集では、質的研究の各研究において、「意味」がどのように扱われてきたかを確認し、そこから質的研究をする意味を考えることを企図していた。特集論文では、今回話題提供をいただく2名に加え、さらに2つの論文が寄せられたが、各執筆者の意味をめぐる観点には、その立場の違いとともに、質的研究を考える上での重要な共通点をいくつか見出すことができた。

1つ目は、「意味の構成と再構成」をめぐる視点である。我々の意味の行為には、1) 既に慣れ親しんだ意味のシステムを再確認・再参照する、という側面と、2) その意味システムでは立ちゆかなくなった時に、新たな意味を模索し、再構成する、という2つがあり、後者の再構成の様相を詳細に検討することにこそ、質的研究の意味がある、という観点である。ここには、意味は流動的でダイナミックなものであるというとらえ方が背景にあると言える。

2つ目は、質的研究は意味の「探究と了解プロセス」を検討する、という視点である。これまでの量的研究においても、この2側面は検討されてきたものの、そのプロセスの詳細は検討されていなかった。特に近年の質的研究では、意味の喪失から再構築に至る単線的な回復のみならず、「問題を生きる人」の多様なアクチュアリティを理解しようとすべく、そのプロセスの詳細や背景まで捉えることが目指されている。

3つ目は、「意味づけられないもの」をどう捉えるかという問題である。これまでの質的研究においては、「意味は構成されるべきであり、かつナラティブという様式で表象されるべきである」という暗黙の前提が置かれることもあった。しかし、今回の特集論文でも指摘されているように、意味の生成そのものを脅かすような体験や、自ら意味や無意味を脱しようとする志向性をくみ上げようとするまなざしも、質的研究をさらに豊かなものにするであろう。

特集論文の著者らの言葉を借りてまとめるとすれば、質的研究とは「意味の行為や行為の意味を探究し、了解しようとする意味の行為」であると言える。ここに質的研究が意味を各とすることの意義と難しさがあるだろう。丁寧な意味の行為を重ねた質的研究は、当事者や当事者と異なる現実を生きる人々にとっても「意味」のある研究となるだろう。

当日のシンポジウムでは以上のような論点を超えて、さらなる議論の深まりを期待したい。

立場の異なる者と共生する：Bruner の意味の行為の展開可能性

【企画者】横山 草介（東京都市大学）

【話題提供者】横山 草介（東京都市大学） 阿部 廣二（早稲田大学）

小泉 千尋（青山学院大学）

【企画趣旨】

これまで企画者は Bruner の「意味の行為」論に着目し、人々が抱くフォークサイコロジーの破綻として定義されるトラブルとその修復過程について、質的研究の方法に依拠した実証的な研究の可能性を模索してきた。本シンポジウムもこうした探求の一環である。今回の企画では、立場を異にする者同士が参与するコミュニケーション場面に焦点を当てる。具体的には2名の論者に話題提供を依頼し、それぞれ(1)進路状況の異なる若者同士のやりとり、(2)サイエンスカフェにおける専門家と非-専門家のやりとり、に関わるデータ及びその分析を報告して頂く。いずれのケースにおいても、参与者たちはやりとりの過程でお互いの立場の違いを顕在化していく。同時に、違いの顕在化は、お互いの考え方の違いから派生するトラブル状況を想定させる。こうしたトラブル状況は、引き続きやりとりの中で、参与者たちにどのように受け止められ、平静を取り戻していくのであろうか。これらの事例分析を通して Bruner の意味の行為論の展開可能性について議論を深めたい。

【話題提供 1】 Bruner の「意味の行為」の展開可能性

横山草介（東京都市大学）

Bruner (1990) の「意味の行為 (acts of meaning)」は、前提の破壊に対する精神が、当の不測の事態を理解可能にし、平静を取り戻すことを可能にする意味の脈絡を探索する行為として定義することができる(横山, 2016, 2018)。この定義に立脚するとき「意味 (meaning)」という概念は、当の行為の先に不確定性に基礎づけられたものとして展望されるものとなる。本報告が焦点を当てるのは、対象についての何らかの「意味」が到着する手前で進行する「意味の行為」のプロセスである。Bruner の議論に従うならば「意味の行為」は、前提や常識、通例性の破壊として定義されるトラブルの発生を契機として展開する。従って、我々が「意味の行為」のプロセスを検討しようとするならば、何らかのトラブルの発生に注意を向けることになる。今回の報告では Bruner のトラブル概念を敷衍し、特定の事象について異なる理解を示す人々の出会いの中にトラブルを位置づける。特定の事象をめぐる理解のズレは、ときとして関わりをもつ主体相互に驚きをもたらす。理解のズレを契機として引き起こされる驚きを伴った前提の破壊を、本報告ではトラブルとして位置づける。個々の主体は、特定の事象についての他者の理解、および、他者との理解のズレを、どのように解釈し、調整を図っていくのであろうか。この論題に関わって、我々は理論上二つの両極を想定することができる。一つ目の極は、一方が自らの主張を維持することを諦め、他方の主張に迎合することによって調整を図る場合である。言わば、従属による解決である。二つ目の極は、双方が互いに相手の主張を引き受けつつ、新たに共有可能な理解の地平を生成することによって調整を図る場合である。言わば、和合による解決である。「従属による解決」においては、一方の主張は維持されるが、他方の主張は相手の主張に沿うように調整することを余儀なくされる。「和合による解決」においては、双方の主張を互いに共有可能な新たな理解の地平に適うように調整していくことが求められる。

【話題提供 2】「先輩／後輩であること」「社会人／学生であること」の相互行為的調整

阿部 廣二（早稲田大学）

3年生／4年生が参与する会話データの分析事例を提供する。この会話データは、2017年9月のゼミ合宿中に収録されたものであり、同じ大学の、同じゼミに所属する学生が参与している。この会話において、参与者たちは、どのような立場で会話に参与するのだろうか。また、そうした立場は、実際の相互行為のなかで、どのように調整されるのだろうか。このことを検討することが、本分析の目的である。以下、本データの特徴を示す。同じゼミの3年生／4年生という制約上、彼らはまず、ゼミにおける「先輩／後輩」という立場でこの会話に参与することになるだろう。これらは、彼らの日常的な実践のなかで自明な前提となっているものだが、それでも参与者たちは、こうした立場を相互行為のなかで示し合い、こうした示しあいを通して、以上の前提を再生産し続けているといえる。

一方、興味深いことに、このデータを収録する際、「就職活動について話し合ってください」という指示が行われていた。さらに、ゼミ合宿の時期は、1) 4年生の多くが就職活動を終了させ、2) 3年生の多くが就職活動本番を開始していない時期であった。そのため、参与者らは、同じゼミの「先輩／後輩」という立場で参与するだけではなく、「就活経験済み／就活未経験」という立場でも会話に参与することになる。参与者たちは、こうした立場を、実際の相互行為のなかで、どのように示し合うのだろうか。以上の立場の調整について、意味の行為論の立場からも論点が指摘できる。まず、ここで起こるトラブルは、おおよそ「3年生」という下の立場の者の経験不足から引き起こされる。こうした経験不足によって生じるトラブルが修復される過程は、私達の日常的実践における学習と呼ばれる現象と深いつながりがあるだろう。意味の行為論と、日常的実践のなかでの学習は、どのように接続可能なのであろうか。以上の分析事例を踏まえ、以上の接続について、高等教育の議論などに関連させながら、本事例内で見られるトラブルの修復について議論していきたい。

【話題提供 3】サイエンスカフェにおけるトラブルと専門家のフレームシフト

小泉 千尋（青山学院大学）

本報告では、サイエンスカフェにおいて低放射線のリスク比較を巡り、専門家と非専門家の互いの見解の違いが明らかになる「トラブル」（横山, 2016）が生じた事例を提供する。サイエンスカフェは専門家と非専門家が対等な立場で科学技術をテーマに語り合う対話イベントである。しかし、専門家と非専門家の対話は容易でない。専門家と非専門家との間には知識の非対称性のみならず、リスク認知の違い（Slovic, 1987）、科学技術をとらえる文脈の違い（小林, 2007）が存在していることが知られている。また、サイエンスカフェで話し合われるのは、科学によって問うことはできるが答えることができないトランスサイエンスの問題であり、「正解」が存在しない。例えば、遺伝子組み換え作物の「科学的な」安全性が担保されていたとしても、農業のあり方を変えるかもしれない科学技術の社会応用を安全性だけで判断することはできない。地域や経済に与える影響や、遺伝子組み換え技術の不確実性・不確定性をどのように評価するかなど様々な論点がありうるだろう。一方で、「サイエンス」カフェである以上、科学技術の考え方をぞんざいに扱うわけにもいかない。そのような状況において、異なる立場の参与者間でトラブルが生じたとき、人々はどのように対処しているのだろうか。この問いに答えるためには、サイエンスカフェ参加者のやりとりを詳細に検討する必要がある。そこで、今回は特に専門家に着目し、フレーム概念を用いて考察を行う。なお、フレームとは「どのような行為が行われ、どのように話し手が自身の伝えたいことを示すのかの枠組み」（Tannen & Wallat, 1987, p. 207）と定義される。

「プロフェッショナルの拡大、拡張、変容」

第一部 「学校教育と看護学の立場から」

話題提供：西本裕輝（琉球大学）、鈴木啓子（名桜大学）

司会：近田真美子（福井医療大学）、中坪史典（広島大学）

企画：日本質的心理学会編集委員

近年、プロフェッショナル領域における役割の拡大、拡張、変容が生じている。

広辞苑によれば、プロフェッショナルとは「ある学問分野や事柄などを専門に研究・担当し、それに精通している人」とあり、専門家のことを指すが、そもそも専門性は資格に由来するものなのか、それとも、その経験に長けているという点で当事者性をも内包するのかという議論もあるだろう。「ケア」という行為1つをとってみても、保護、看護、支援、教育とその行為に込めた専門性の意味内容は幅広く、それらを実施する行為者も、保育職、看護職、教師など多様である。

そこで、今回、「プロフェッショナル」という言葉の意味内容を遡行的に問い直すため、第一部「学校教育と看護学の立場から」、第二部「てつがくカフェープロフェッショナルとは何か？」の二部構成からなるシンポジウムを企画した。

第一部は、学校教育と看護学の専門家をお招きし、それぞれの立場から「プロフェッショナル」についてご発言いただく予定である。

◆西本裕輝（琉球大学）「学校教育の立場から」

日本の教員は働きすぎだとよく言われる。実際、OECDが2014年に発表した調査（国際教員指導環境調査）の結果によると、日本の教員の1週間の仕事時間は53.9時間で、参加43カ国の平均38.3時間を大きく上回った。

このようにただでさえ忙しい日本の教員に追い討ちをかけるように、近年、文部科学省から矢継ぎ早に様々な改革案が提示されている。例えば、大学入試改革として共通1次、センター試験と続いてきた大学入試が2021年度入学者選抜から大きく変わり、「大学入学共通テスト」へと移行する。またそれと関連するが、学習指導要領が改訂され、主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）が重視される教育が始まる。小学校における英語も教科化され、英語教育が本格的に始動する。

そうした中で、沖縄の教員の2016年度の病休率は2.8%で、10年連続全国ワースト1位となっている。よって沖縄は、全国的に見ても、教員の職場環境が厳しい県と推測できる。私は普段、量的研究を行っているので、本提案がシンポジウムの趣旨にどこまで合致するかわからないが、当日は特に沖縄の教員のおかれた厳しい状況をさまざまなデータを通して概観し、プロフェッショナルとしての教員について問題提起を行いたい。

◆鈴木啓子（名桜大学）「看護教育および実践の経験から考える看護の専門性とは」

看護が専門性に裏付けされた仕事であるのは確かだろうが、それを棚上げした方がよいこともある。むしろ優れた看護職は専門性なんてどこにあるかわからないようにして、自然に、巧みに患者さんにかかわっている気がする。これは“高度”の専門性なのだろうか。こんなことを含めて、専門性について検討できたらと思う。

「プロフェッショナルの拡大、拡張、変容」

—第二部 てつがくカフェ「プロフェッショナル」とは何か？—

司会：近田真美子（福井医療大）

西村高宏（福井大学）

企画：日本質的心理学編集委員

本企画は、日本質的心理学編集委員企画シンポジウム「プロフェッショナルの拡大・拡張・変容」の第二部として開催する。

第二部は、第一部のシンポジウムの内容を引き継ぎながら「プロフェッショナル」という言葉の意味内容について遡行的に問い直すため、参加者の皆さんと哲学的対話実践を行う。

哲学的対話実践（通称「てつがくカフェ／café philosophique」）とは、わたしたちが通常当たり前だと思っている事柄からいったん身を引き離し、「そもそもそれって何なのか」といった遡行的な問い（哲学的な問い）を投げかけ、ゆっくりとお茶を飲みながら、他の参加者との〈対話〉をとおして自分自身の考えを逞しくすることの難しさや楽しさを体験するものである。1990年代に、フランスの哲学者マルク・ソーテが、パリのバスティーユ広場にあるカフェで始めたのがきっかけとされている。

◆スケジュール

1. 主旨説明
2. てつがくカフェとは何か
3. てつがくカフェ：

テーマ：てつがくカフェ「プロフェッショナル」とは何か？

ファシリテーター：西村高宏（福井大学医学部 医学教育・倫理学／

てつがくカフェ「医療とケアを問い直す」）

ファシリテーション・グラフィック：近田真美子（福井医療大学 保健医療学部／

てつがくカフェ「医療とケアを問い直す」）

※第一部から継続して参加されることをおすすめしますが、第二部からの参加も可能です。途中退出は自由ですのでお気軽にご参加下さい。

てつがくカフェ「医療とケアを問い直す」

仙台では、てつがくカフェ@せんだいとして、東日本大震災以降、仙台市教育委員会が管轄しているせんだいメディアテークと共催で一般市民を対象に震災について考えるてつがくカフェ（考えるテーブル×てつがくカフェ：<https://www.smt.jp/projects/cafephilos/>）を開催してきた。現在までに66回実施しており現在も継続中である。また、医療やケアをテーマに取り扱うてつがくカフェ「医療とケアを問い直す」も各地で開催している

海外のフィールドに日本人の質的研究者として長くじっくり関わるということ

企画：伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）

話題提供者：岸磨貴子（明治大学国際日本学部）

大竹モルナー裕子（オックスフォード大学医療人類学部）

市川章子（一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程）

伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）

このシンポジウムでは、日本人の質的研究者としてそれぞれ海外のフィールドに長くじっくり関わってきた（あるいは関わりつつある）経験から立ち上がってくる諸相について議論する。それぞれ異なるスタンスで関わっている中東（岸）・アフリカ（大竹）・東アジア（市川）・東南アジア（伊藤）での経験から、相違点と同時に意外な共通点が浮き彫りになることだろう。たとえば研究者が非西洋人の「日本人」であることの意味づけは、フィールドに長くじっくり関われば関わるほど露わになってくる。それは、日本人研究者がおうおうにして抱く視点や捉え方という点からも、フィールドの人々からのまなざしという点からもうかがわれる。本シンポジウムでは、タイプの違う4人の日本人研究者による対話を、フロアーを巻き込んだ対話に広げ、それを全員でわかちあい、さらにこの対話の輪を拡充していく道筋をたてる。ひいては、海外のフィールドに日本人の質的研究者として長くじっくり関わってみようというところに若手を刺激したい。

“良い聞き手”としてのフィールドワーカー（岸磨貴子）

現在、トルコで、350万人を超えるシリア難民の状況を把握し、支援のための政策提言をする立場でフィールドワークを行っている。現場に入ると必ず感じる葛藤がある。それは、私と彼ら（シリア難民）との関係性である。私は、長くシリアと関わっていたため、彼らのやさしさ、強さ、豊かさを知っている。私は彼らのことを「弱者」として見ない。だからこそ、彼らも私を旧友のように受け入れ、多くを語ってくれる。そこで生成されるナラティブは、言葉にするのが難しいくらいたくましく美しい。そういった彼らの言葉や態度にフィールドワーカーとしてとても励まされ、魅了されてきた。一方で、支援のための政策提言をする目的でフィールドに入ると、彼らはそれとは違う姿を見せる。支援のためのフィールドワークでは、問題を同定し、支援の対象と方法を検討する。このように問題中心(problem focus)を志向して現場に入ると、彼らは自分の弱さや生活の不便を多く語る。国際協力の性質上仕方がないかもしれないが、「支援に関わる立場」として入ることで彼らを「弱者」にしているようで葛藤を感じる。

このような葛藤を常に感じるが、同時に、私自身が日本人であること、そして現地の言葉（アラビア語）を話すこと、彼らの文化をよく知っていることによって、「支援する—される」関係を少なからず解体することができる。それは私が彼らにとって「良い聞き手」であり、「素朴な問いをもった専門家」だからであると考え。シンポジウムでは、その具体事例を示しながら議論をしたい。

アフリカと欧米をつなぐ日本人フィールドワーカー（大竹モルナー裕子）

フィールドワークの歴史は西洋植民地史に端を発する。フィールドワーカー達は当時「未開」とされた植民地で人々と生活を共にしつつ文化・社会を記述し西洋の母国へ報告した。独立後、「途上国」として問題に満ちた否定的イメージが付与された旧植民地は開発・援助の対象となった。だがフィールドワーカー達はこれに疑問を呈し「途上国」の豊かさを「先進国」へと伝えてきた。

私が初めてルワンダに住んだのは援助者としてだった。援助がほぼ入らない地域で、紛争の傷跡から自力で復興する人々。共に活動する中で、私自身が彼らから多くを学び、助けられていた。「開発・援

助」の在り方に疑問を抱き、彼らの生き生きとした豊かな在り方を伝えつつ、“本当に”必要とされる支援とは何かを探るため、レジリエンス研究を英国で始めた。後に、“日本人だから”この研究ができることを次第に理解し始めた——。先述の通り、フィールドワークは植民地主義に端を発し、世界の権力構造の是正を一つの命題としている。実は、アフリカを扱う日本人フィールドワーカーは、この権力構造から少し外れている点で特殊だ。アフリカでは、欧米人は旧宗主国や（代理）紛争の加害者と見られるのに対し、日本人は中立を保てるため、欧米人には開示されない豊かな語りや生活世界へと招かれやすい。そこで得られた知見を欧米諸国に還元することもまた意義がある。本企画では、日本人だからこそできる、多文化・多国籍をつなぐフィールドワークについての議論を喚起したい。

「境界」への皮膚感覚の獲得—東アジア地域への質的研究を通して見えてきたこと—

（市川章子）

本発表では、朝鮮半島及び中国大陸・台湾への関わりが質的研究者にもたらすものについて報告する。報告者は、大学院入学以降、東アジア地域の人々を対象に質的研究を進めてきた。現在は、日本人学生が少ない環境で研究を続けている。こうした環境では、これまでの経験では可視化されてこなかった「言語社会的マイノリティ」「民族的マイノリティ」としての自己像を自覚するようになり、日常的に歴史に入りこむ。

国外の研究者と交流するなかで、現地の研究者から期待される文脈があることに気づくこともある。「戦争」やそれに伴う「記憶」を扱う際に国際的な視点を持った研究者として「語る」ことへの期待である。時には、研究者の枠を超えて「国家人」としての発言や振る舞いを期待されることも少なくない。日本の植民地支配、強制連行や慰安婦問題などの課題が残されている場所では、加害者の国からきた研究者として見られることもある。こうした経験の後には、研究協力者との関係構築及びフィールドとの関わり方、語りの解釈・分析の視点についても揺れが生じ始める。発表では、現地の研究者との関わりを深く捉え直す契機となった分岐点について国内外で経験した事例を示し、東アジア地域を対象とする日本人質的研究者の在り方について「アジアを語ることのジレンマ—知の共同空間を求めて」（孫歌、2015）を取り入れながら会場の皆さんと考えてみたい。

開けた研究対話のためのネットワークづくり（伊藤哲司）

初めてベトナムを訪れたのは1992年、博士課程の4年目に在学中で、バックパッカーとしての一人旅であった。そのベトナムが、今の私にとって研究上の、そしてしばしば教育上の重要なフィールドになっている。『ハノイの路地のエスノグラフィー：関わりながら識る異文化の生活世界』（ナカニシヤ出版）を2001年に出版し、その後もベトナムとの縁（ベトナム語では「ズエン（duyen）」は、ますます強いものになった。2016年に開学した日越大学（Vietnam Japan University）の幹事校のひとつに茨城大学も位置づけられ、学内で地球変動適応科学研究機関（ICAS）の機関長を務める立場から、同大学の気候変動・開発プログラムの講義にも従事している。

一見顔も雰囲気も似ているベトナム人たちとの多くの関わりの中、日本人から見て微妙的な文化的なズレが、かえって大きな違いに発展しうることを実感してきた。日韓中越で映画を媒介とした対話の実践（円卓シネマ）を行うと、そのことがまた露わになる。その違和感を嫌悪感に変えるのではなく、むしろ相手を知る手がかりとする方法とは何なのかを考えなくてはならない。2018年に編著者として上梓した『アジアの質的心理学：日韓中台越クロストーク』（ナカニシヤ出版）では、各国・地域から3人の研究者が寄稿し、それぞれに別の国や地域の研究者がコメントした。目指すは、ベトナムでの長年の関わりを踏まえた、国境を越えた開けた研究対話のネットワークづくり。このシンポジウム企画もまた、その重要なステップのひとつとなるだろう。

生の希望をふたたび

—認知症高齢者への音楽療法とアルコール依存症者の回復についての語りから—

企画・司会：山本 玲菜（環太平洋大学）

話題提供者：山本 玲菜（環太平洋大学）

山下 世史佳（よしかミュージック）

指定討論者：植田 嘉好子（川崎医療福祉大学）

佐久川 肇（川崎医療福祉大学、日笠クリニック）

企画趣旨

アルコール依存症の「どん底」から回復した人々は、ただ断酒できただけでなく、自分もまたアルコールに苦しむ人々の力になりたいと願うようになる者が少なくない。一方、認知症高齢者に対する音楽療法では歌うことを通して過去の自分に出会い、そのことについて仲間と語りを展開でき、「生」の喜びを再体験して涙を流す場面がみられた。「生」の極限状況から回復したアルコール依存症者と、歌うことにより生き生きとした現実を取り戻した認知症高齢者とは、一見かけ離れているように思われるが、共に「生の希望」の意味が見いだされると考えられた。

両者に共通する新たな「生の希望」の意味を明らかにする方法として、経験の事実から出発して「生」の本質に迫る現象学的方法が望ましいと考えられた。本シンポジウムでは、なぜアルコール依存症者は回復することが可能なのか、なぜ認知症高齢者は音楽療法を通して生きる喜びを再び取り戻すことができたのかについて発表し、会場の参加者とともに議論を深めたい。

山本玲菜「話題提供1：アルコール依存からの回復の意味」

飲酒をやめ続けるために通う断酒会では、アルコール依存症者たちが「聞きっぱなし、言いっぱなし」という本人の語りについて批判をしてはならないという原則のもと、アルコール依存の経験を語っている。そこには何十年も飲酒をやめ続けている者もいれば、まだ数日しか飲酒をやめていない者もいるが、断酒会会員たちは新しい会員をあたたく迎え入れる。断酒会で語られる内容は、アルコールによる悲惨な体験だけでなく、日常生活における変化や、家族の慶び事、笑い話など多岐にわたっている。中でも注目すべき語りとして、「酒害者を一人でも多く救いたい」というものが挙げられる。酒害者とはアルコール依存症者のことであるが、この語りからわかることは、ただ単に飲酒をやめ続けるために断酒会に参加しているのではなく、アルコール依存症者を救いたいという気持ちを持って参加している者がいるということである。

本発表では断酒会に参加しているアルコール依存症者の語りに基づき、なぜ依存に至ったのか、そしてどのように回復に至ったのか、さらになぜ回復することができたのかという経験の解明から、「生の希望」の意味について述べる。

山下世史佳「話題提供2：歌うことによる認知症高齢者の自己の表出と再生」

認知症高齢者（以下、認知症者と表記）に対して音楽療法を実施していると、認知症者が曲からその当時に瞬間的に思い出すことがある。認知症者は病気の進行によって失語の症状がみられるようになると、語りの表出は難しくなるが、曲によって表情や動きの変化はみられることがある。

例えば無口な認知症者が懐かしい歌を歌うことで覚醒し、歌の歌詞や旋律から当時を回顧して語り出す。その語りには日常的に認知症者と接している施設職員でも聞いたことのない内容が含まれることがあるので、このような場合には語りが歌うことによって引き出されたものと認識できる。

本発表では、高齢者施設の音楽療法において、歌うことによって表出した軽度～中等度の認知症者の語りを2点取り上げる。1点目は、複数の認知症者が歌唱後に涙の表出を語る場面、2点目は、複数の認知症者が音楽療法後に幼少期に流行った流行歌や軍歌等を語る場面である。各認知症者が歌うことで自己を表出し再生する過程と見出される「生の希望」について明らかにする。なお、両事例は発表者が音楽療法を実践している間に生じた語りである。

植田嘉好子「指定討論1：歌と語りによる生きてきた証の共有、そして喜び」

山下による認知症高齢者へのインタビューでは、懐かしい歌をきっかけ仲間との語りが生まれ、「個々人が生きてきたことの自己価値や喜びを見出している」と考察されている。また、これは同時に、認知症高齢者らにとって「自身の人生に気持ちを巡らせるだけでなく、他者の気持ちにも寄り添う時間となっている」という。「他者に自身の思いを伝えよう、他者を分かろうとする語りの表出や相互行為が起こる」この音楽療法の場は、実は元アルコール依存症者らが集う断酒会と構造が似ているのではないだろうか。

山本の発表では、元アルコール依存者が自らの体験を語るだけでなく、他者の語りに耳を傾け、一人でも多くの酒害者を救いたいと熱心に活動する姿が示される。皆の前で自身の苦しい過去を露わにすることはつまり自身の人生を肯定することであり、それによって他のメンバーの人生にも思いを寄せられ、他者を救いたいという気持ちへと至っているのではないだろうか。

しかしながら、自らをありのままに語ることができるためには、実は他者がその場を用意してくれていることも忘れてはならない。認知症高齢者の音楽療法においても、他者とともに歌い語り合うことで「個人だけでは表出しえなかった気持ちが生起し、これが言葉になって表出した」と山下は考察する。認知症やアルコール依存による生きづらい状況から、他者とともに生きる希望を発見する経験のありさまを丁寧に紐解いていきたい。

佐久川肇「指定討論2：人々の生きる希望とは何か」

アルコール依存による極限状況からの回復の経験と、音楽療法による認知症高齢者の自己の再生には、いずれも人間としての生きる意味というテーマが密んでいる。このような研究になぜ現象学が有用なのか。それはどのように用いればよいか。「アルコール依存」も「認知症」も病名であり、共に医学的治療（ケア）の対象とされているが、今回の結果は医療的介入によって起こったのではない。質的研究の領域は、医療、看護、リハビリ、心理、教育等幅広いが、この領域の役割を「対人支援」と考えれば、今回の事例は、その根幹にある「人々の生きる希望とは何か」、「それに支援者としてかかわる意味は」という課題に示唆を与えるものではないかと考える。

「深い経験づけ」(deep experiencing)とキャリアの分岐点

企画・話題提供：土元 哲平（立命館大学大学院文学研究科）

司会・話題提供：宮下 太陽（立命館大学大学院人間科学研究科・株式会社日本総合研究所）

話題提供：上川 多恵子（立命館大学人間科学研究科）

伊東 美智子（立命館大学大学院人間科学研究科・神戸常盤大学）

中本 明世（甲南女子大学）

指定討論：サトウ タツヤ（立命館大学）

企画主旨(土元)

長寿化による「人生 100 年の時代」の到来や、職業の自動化・デジタル化によって、職業生活に関する考え方は大きな変革を求められている。こうしたキャリアを取り巻く情勢の変動に伴い、人々は様々な“分岐点”に直面するようになってきている。分岐点において、人々は葛藤の中で重要な選択や成長を経験する。このような経験を伴う分岐点は、言葉（記号）で言い表せない深い意味や複雑な感情を含んでいる。精神を圧倒し、言葉で表現することが困難な経験を、レーマンとヴァルシナー(Lehmann & Valsiner, 2017)は「深い経験づけ」(deep experiencing)と呼んだ。キャリアの分岐点における深い経験を探求していくことで、個人の主観性に根ざした、キャリアに対する新しい理解が可能になると考えられる。したがって、本シンポジウムでは、「深い経験づけ」をキーワードとして、いかにキャリアにおける分岐点を理解することが可能かについて、各登壇者の研究成果から提案し、それをもとに、フロアを交えて議論を行う。

話題提供①：プロ人材への変容とキャリア転換（宮下）

長寿化により教育・仕事・引退という伝統的な区分が崩れ、仕事ステージの長期化と多様化が進みつつある。しかし、具体的な多様化のあり方や、変化に対応するために社会がどうすべきかについてはまだ明確ではない。そこで、キャリアの分岐点として、①メンバーからプロ型人材になる点、②プロとしてキャリア転換を図る点の2点に着目し、深い経験づけとキャリアの分岐点の関係について考えたい。

話題提供②：外国人留学生の日本留学および就職活動を通じたキャリアに対する意識変容（上川）

1名の韓国人大学院生を対象に、「日本留学および就職活動を通じて形成されたキャリアに対する意識」について考察した。協力者は11年間日本に留学、約1年間の就職活動を経験しており、自身が納得できる就職先を日本で探し求める中で「理想と現実のギャップ」に悩んでいた。ここでは、そのような外国人留学生の就職および日本語学習への信念との関わりについて考えたい。

話題提供③：社会人経験後に看護師を目指す人々の深い経験(伊東)

前職を辞めて学校に入り直し、看護師を目指す人が増えている。その契機として、①ある出来事を通して言葉にできない感情を抱くが、②やがて①に意味を見出して看護師を目指すに居たる「深い経験づけ」を経ていた。その、言葉にできない感情や出来事を敢えて協力者に語ってもらうことの意義と、深い経験に触れる故の研究者としての留意点についても考えたい。

話題提供④：メンタルヘルス不調による休職・離職経験とキャリア発達（中本）

メンタルヘルス不調による休職・離職を経て看護師として働くプロセスにおいて4つの分岐点：「心身に強く仕事の負担がのしかかる」「現状と先行きへの不安に職業継続意思が揺らぐ」「何もしていない焦りと不安を抱え葛藤する」「看護師としての自分を立て直す」が見出された。一見ネガティブと捉えられる経験がキャリア発達において深い経験づけとなり重要な意味を成すこと、それを言語化・可視化することの意義について議論する。

話題提供⑤：転機を生み出す暗黙的感覚の言語化（土元）

発達主体が自ら発達課題を設定するという考え方への転換において、転機における暗黙的・主観的感覚が重要となる。本研究では、転機にともなう主観的感覚へとアプローチするために、私にとっての「よいキャリア支援」の感覚を言語化した。オートエスノグラフィーの立場から、主観的感覚の言語化の過程を紹介し、“言語化できない”感覚に基づくキャリア支援のあり方について議論する。

指定討論（サトウ）

文化心理学の立場から、「深い経験づけ」とキャリアの径路、分岐点の関係について解説する。また、各登壇者の発表に対するコメントや論点を提示し、フロアとの議論を活性化させる。

精神医学と現象学的心理学から死と他者の形而上学へ（第2報）：
『人文死生学宣言』の誕生

【企画代表者・司会者】渡辺恒夫（東邦大学）

【企画者】小島康次（札幌保健医療大学）・浦田悠（大阪大学）

【話題提供者】新山喜嗣（秋田大学医学部）・三浦俊彦（東京大学文学部）・浦田悠

【指定討論者】小島康次・やまだようこ（立命館大学）

【企画趣旨】3年前のシンポジウムでは、死にゆく他者を支援する技術ではない一人称的死生観を確立する必要を唱え、科学的唯物論か伝統的宗教的二元論以外により洗練された形而上学的な死生観があるのではないかという問題提起をした。その後この企画は、『人文死生学宣言』（渡辺・三浦・新山/編，春秋社，2017）として結実したので，今回はこの書が本学会会員にとってどのような意味があるかを，編者が一堂に会する場で論じあう。まず，この書の編者らの死生観が，1）いかなる体験もしくは直観に基づくか。2）それは普遍化できるものか。3）死は生に比べて無限に悪いという現代における「死の害」説に対してどう答えるか。4）対人支援従事者を含む本学会員に対するアドヴァイスは可能か。以上に編者として答えるべく試みる。さらに，死生心理学の立場からも，浦田がこれらについて論評する。指定討論は，新山を渡辺に紹介してこの書成立の陰の功労者となった発達心理学の小島と，死のイメージの調査研究を行っている質的心理学のやまだが担当する（文責：渡辺恒夫）。

【話題提供1 新山喜嗣】「自分の死はいかなる非在か—ソシアの錯覚からの眺望」要旨：自分の死を現在形で語る「私はいない」という発話は，発話の主体が存せぬゆえ，語用論的には端的な誤りとなるしかない。しかし，このような発話は，一見われわれにとって有意味な発話であるように見えてしまう。それはなぜであろうか。ここにおいて，ソシアの錯覚の名をもつ精神病理現象に注目してみたい。ソシアの錯覚では，他者が全くそっくりのにせものに入れ替わったと患者は訴える。このとき，患者においては，他者の属性はすべて同一でありながら，比類のない「このものの性」のみが入れ替わっていることになる。今，ソシアの錯覚の臨床的特徴として刮目すべきは，にせものとされる他者は，日常生活でもっとも間近にいる一人か数人に限定されるという特徴である。このことは，日頃から対話的相互性をもつ‘唯一のあなた’としての二人称的他者にのみ，比類のない「このものの性」が付与されており，一方，周囲にいる多くの‘一般的あなた’としての二人称的他者には，「このものの性」は付与されていないことを示唆する。ここに示した二人称の両義性は，先の「私はいない」が有意味に見える謎を解く鍵になるかもしれない。なぜなら，二人称的他者に対する「あなたはいない」という発話は，‘唯一のあなた’については自分のときと同様に成り立たないものの，‘一般的あなた’については三人称と同様に成り立つからである。すなわち，‘唯一のあなた’が蝶番となり，非在の対象が，‘私’と‘一般的あなた’の間で絶えず交代する錯視を生み，これが「私はいない」という発話の見掛け上の成立を促すことになる。このことは，われわれにおける自分の死に関する語りは，いったん二人称的他者の死を迂回することによって，錯視を通してのみ可能となることを意味する。ここに，〈完全な非在〉としての自分の死は，偽装された二人称的他者の死である疑いが浮上する。当日の発表では次のステップに進み，自分の死が〈不完全な非在〉であるという道筋も探る予定である。すなわち，生きている時代に身につけていた全ての属性が死によって剥ぎ取られても，なおも「このものの性」として自分が残存する可能性について論を進めたい。

【話題提供2 三浦俊彦】「生死に関するカテゴリ違和の諸相」要旨：「a はいない（生者のメンバーではない）」という言明は、de dicto 解釈と de re 解釈の二通りに読むことができる。Fを「と感じられる」という演算子として、それぞれ次のような表記に対応する。 $F(\forall x(x \neq a))$ $\forall x(F(x \neq a))$ Fの主体をa自身とするならば、どちらも「私はいない」と読まれるが、de dicto 解釈は「〈私は生きていない〉と私は感じる」ということであり、自分の死後や生前の状態をありありと想像する、自分が無生物である状況をありありと思い描くといった場合の自然な解釈となる。F世界の中に、aが存在しないのである。対してde re 解釈は、「私は〈生きていないものと感じられる〉」ということであり、自分について「これは自己同一性を持たぬ者だ」と感じているのである。後者はいわゆる「コタール症候群」であり、死者もしくは無生物を自認することだ。この状態を、トランスジェンダリズムにおける「性自認」「性別違和」に倣って「生存自認」「生存違和」と呼ぼう。性同一性障害が脱病理化され、トランスジェンダーに対する承認と理解が進む近年の風潮に合わせて、生存違和の状態に承認を与えることはできるだろうか。すなわち、生理的には生者なのだが（当事者自身が知的にはその現実を認めていながら）、死者や無生物として扱われたい、と当事者が主張する場合、周囲が実際にそのように扱う、ということである。MtFを「トランス女性」と呼び、FtMを「トランス男性」と呼び、条件を満たせば戸籍変更もできる現状と論理的には整合するので、「トランス死者」認定、除籍謄本発行といった措置は当事者の違和を減少させるはずだが、現実には効力を持ちうるだろうか。コタール症候群以外にも、乖離性同一性障害のいくつかの人格が自らを「死者である」「無生物である」「胎児である」などと主張する症例があるかもしれない。さまざまな症例の関係を思考実験で吟味することにより、性別違和に対する扱いとの統一性を実現することにどれほどの倫理的・法的・医療的意義と可能性があるか、分析的に考察する。

【話題提供3 浦田悠】要旨：一見何でもない当然なことにも見え、かつ、とてつもない謎にも思えるのが、死の問題、とりわけ「ほかならぬ私が死ぬ」という一人称の死の問題である。従来の心理学では、一人称の死については、死に対する態度についての量的研究が、二人称の死については、死別の悲嘆に関する量的・質的研究が、三人称あるいは無人称の死については、死に対する一般的な不安や恐怖およびその管理についての研究がなされてきたと言えるだろう。しかし、これらの研究は、死そのものというよりも、死が刺激となって引き出された認知的・感情的・行動的反応についての研究であった。『人文死生学宣言』の著者らは、このような従来の死へのアプローチとは一線を画し、①一人称の死こそが最も根源的である、②従来の日常的世界観、科学的世界観あるいは死生学では、一人称の死の謎には迫れない、③死を考える上では、同一性の問題をどう捉えるかがクリティカルな問題である、というようなテーマをめぐって、（それぞれかなり色合いの異なる切り口からではあるが）その「捉えがたさ」の核心に迫ろうとしている。このような試みは、死生心理学や質的心理学にとっていかなるインパクトを持ちうるのだろうか。また、いかなる視座や方法をもって、その核心へアプローチすることが可能なのだろうか。さらには、そのような研究は、周辺領域の研究や死の臨床現場での実践とどのようにつながりうるのだろうか。それらの問いを踏まえ、ここでは『人文死生学宣言』の各章の主張を背景としつつ、まずは、死の意味が、従来の心理学やその周辺領域でどのように捉えられてきたかを整理する。続いて、人が死を考える際のある種の心理的傾向や心理的制約について、近年の興味深い心理学的な知見を確認する。人文死生学やこれらの心理学的見解は、そもそもなぜ私達が死そのものは語り得ないと感じつつ、それでもなお、自己の死や他者の死について語ろうとするのか、ということへの新たな示唆を含んでいる。話題提供では、これらの考察から、本書のような死の形而上学が持つ可能性や課題を提示したい。

沖縄「体験」を語る

－ナラティブなグループワークを通して語り合う「わが内なる沖縄」－

田代 順（山梨英和大学）

板倉えりか（帝京看護専門学校）

大西郁子（東京都スクールカウンセラー/ナラティブアプローチ研究所）

1、はじめに

本学会が沖縄で行われ、また、プレ企画として「基地ツアー」も行われる。つまり、この「沖縄」という地において、質的心理学会が行われるということの「意義」が学会員に問われているとも言えよう。その意味で、戦後の日本において、沖縄が経験した「過酷な歴史的現実」を踏まえながら、沖縄と言う「地」で「やること」の意味と意義を持った会員企画シンポを行う。

いわゆる「ヤマトンチュ」であるシンポジストは、それぞれに（ヤマトンチュであるがゆえの）「外側」からの（本土からの）沖縄「体験」を持っている。沖縄が強要された「過酷さ（沖縄戦、戦後の基地問題等）」を本土の我々はどのように体験してきたのか（あるいは「無知」であったのか）について、ナラティブなアプローチでもって会場参加者とともに語り合う。

沖縄ネイティブ以外の人々にとっては、（おそらくメインの話題としては）これまで（ほとんど）語られることなく、モノローグのまま、内在化されてきた「我が内なる沖縄」について、リフレクティングの形でそれぞれの「沖縄体験」というものを他者の声も含めて「多声化」しながら分厚く展開していく、リフレクティングによる「対話実践」を行う。こうしたナラティブな対話実践の形で、沖縄の地で「沖縄」を再体験し、「内なる沖縄」の語りを「外」に出して多声化しながら、「内なる沖縄」の語りを分厚くして、沖縄への対話的理解を拓けていく。

2、方法と展開

最初に、今回の対話実践（話し合い方）のベースとなる「リフレクティング」についての解説と実習を行う。

リフレクティングは、ノルウェイの家族療法家で精神科医のトム・アンデルセンによって、家族療法の中から産み出されてきた面接技法である。話し手（グループ）と聞き手（グループ）を完全に分け、互いが、他方が話し合ったことについて「話し合う」という、いわば、「会話についての会話という方法」（矢原、2016）を取る。このような形での集団での「話し合い方」は、ある意味、特殊な話し合い方ではある。しかし、このような話し合い方をすると、それぞれの「話したこと」が、分厚く深く広く多声的に展開していくという「効能」を持つ。この「利点」を最大に活用して、それぞれの「沖縄体験」を巡る話を分厚く深く広くしていく。結果、参加者それぞれの「沖縄体験」という「物語」が、深みと広がりを増しつつ、相互の「体験」がポリフォニックに響き合いながら整い、治まっていくことになる。以上を「実感」してもらうために、リフレクティングについての説明のあと、実習を行う。この実習は最もミニマムなリフレクティング・トークといわれるもので、基本的に三人一組でトライアログ実習を行う（当日は、ウォーミングアップとしてそれぞれの「参加動機」の語りをベースとした、リフレクティング・トークを行う予定である）。

これを終えたのち、リフレクティングをベースとした「体験グループ」を展開する。参加者全員を A、B 二つのグループに分け、それぞれにファシリテーターをつけて、リフレクティンググループをつくる。

まず、A グループが最初の話し手グループとなり、ファシリテーターの司会・進行のもと、それぞれの沖縄体験を述べていく。それを B グループは静かに聴いている。

次に B グループが A グループの話を聞いてということで話し合う。A グループの話を聞いて（内的対話として）「思い起こされたこと」をそれぞれが B グループのファシリテーターの司会・進行のもと、話し出していく。

今度は、その B グループの話を聞いてということで、A グループが話し合う。同様にしてそれを聴いてということで B グループが話し合うという、リフレクティング方式による「沖縄の語り」についての体験グループを（時間の都合に合わせてキリのいいところまで）展開させていく。最後に一つのグループとなって本日の「リフレクティングによる沖縄についての語り合い」を振り返ることになる。

3、おわりに

筆者は、臨床や院生の個人スーパービジョン、学会や研究会における集団的自例/事例検討に、このリフレクティングを応用して実践している。最低（臨床の場合はクライアントを含め）3 人いると実践でき、また、多声化による「物語」が整う効果がきわめて高いのを実感している。臨床やその関連の場のみならず、研修やミーティング/会議等、およそ、人々がグループで話し合う必要のあるときにリフレクティングは、とても「使える」技法である。これを機会に参加者が、リフレクティングを自分の「場」に取り入れ（応用）活用実践してもらえると、企画者としては望外の喜びである。

社会詩学 (social poetics) の試み

企画者：森岡正芳（立命館大学）

司会者：森岡正芳（立命館大学）

話題提供者：森岡正芳（立命館大学）

話題提供者：山口智子（日本福祉大学）

話題提供者：田崎みどり（長崎純心大学）

話題提供者：山本智子（近畿大学）

企画趣旨:

「生きた姿を描くことはそれだけですでに詩的である。なぜなら我々には、生きる姿はそれ自体であって、見ることはできず、見ても限定されているからである。」（辻 邦生）

他者と創造的関係を作っていく実践や、コミュニティを生み出していく心理社会実践において、そこに生じてくる微細な体験プロセスを社会詩学 (social poetics) とする (Katz & Shotter 1996)。ポイエーシスは創造することであると同時に交流すること、コミュニケーションという意味でもある。この概念によって実践で実際に起きていることを探求する新たな観点が立ちあがる。標準化された方法によって支援を受ける対象者として、当事者をとらえるのではなく、「その人の生きる姿」を回復する。支援の場に入って当事者といっしょに動きながら驚き、気づくことがある。社会詩学はその発見をより明瞭な形にしていくための心理社会実践の立場と方法である。この企画では、心理社会支援の様々な場面でのエピソードをもとに社会詩学の観点を検討し、実践知の新たな探求方法を共に考えたい。社会詩学は以下のような観点をもとに実践を描き出し、体験を掘り下げ、結晶化していく立場である。

1) 応答性

人と人の応答性 (responsiveness) が人の活動の基本である。人は生を、私たちと他者、周囲の他者性とのあいだでの絶え間ない関係応答の流れに埋め込まれた自らの生を生きている。とくに、生きた身体的な応答性こそ決定的な働きをなす。

2) 対話空間または第3の領域の形成

応答的活動は特別な第3の領域を形成する。重要な実践性は対話的に構造化された活動に関与している。この「対話空間」は複雑で交差しあう応答的秩序をなすが、感知されにくい。私たちの生の背景にあって、暗黙のままに維持されている。協働行為の中で自発的に構築される対話的現実や空間は、それ自体が独自の動きをもつ第3の遂行者として体験される。個人の身に生じた出来事に応答する感性、すなわち出来事に参加し、周りの他者に応答的なコンタクトをとり合うことが一つのコミュニティを作る。

3) 会話を通じたもう一つの知

他者と自発的、応答的に活動している最中では、行為していることの説明や理由づけを与えることはできない。そこで生じた対話的秩序のもつ規則性は、外からとらえることはできない。むしろその中で一緒に行い、日常の会話を通じてわかってくる。「私たちの秩序や原則に基づく組織的な活動の背後にあって、日常の会話の中に不確かな形で漂う、もう一つの知の在り方」(Shotter 1997)を探る。それは第3の領域、可能性の空間に身をおいてみてはじめて、知られるものである。実践の仕方は、何らかの形で実践し、行ってみることでしか伝わらない。他者とともに具体例を明細化することによってのみ行われる。

4) 実践性の感受

実践は、専門家によってあらかじめ描かれた地図にもとづくプランニングから始まるのではない。その場で生じる一回性のものに関心を持ち楽しむ。差異を許容し、言葉がミスリードすることに寛容であり、事前の判断を急がない。新しく始まったところから、それをどのように続けていくかに応えるのが支援の専門性である。クライアント個人の身に生じた固有の出来事を、可能性の風景において感じ取ることを前提に支援を進める。

話題提供:

当日は、森岡正芳が企画趣旨と「社会詩学の発想と心理支援」にて概略を示した後、3人の話題提供者の話を共有する。

山口智子「高齢者の生きたイメージを若い研修員が育むとき」

高齢者施設での社会福祉実習で、学生Aは看取り介護段階のBを担当した。当初、BはAの声掛けに反応しなかったが、Aは声掛けを続けた。ある日、BはAの名札を見て、名前を読んだ。Aは自分に興味をもってもらえたのではないかと考えて、共通の趣味であるカメラをBに手渡し、握ってもらい、Bがかつて写した写真を一緒に見ながら語りかけたところ、BはAの言葉かけに反応した。そこで、AはBの仕事を調べ、Bが作り上げたものの写真を準備し、写真を見せながら話しかけたところ、Bは大きな声を出して応えた。これは演者が実習指導に関わった出来事であり、演者の実践ではない。出来事は学生のその人らしさを尊重する働きかけとそれに呼応する高齢者の交流である。当日は、①両者の交流について、②実践者本人ではない立場からの記述の可能性や課題について検討したい。

田崎みどり「会話のリハビリテーションー高齢者介護において」

認知症高齢者の会話で注目されてきたのは、認知症高齢者どうしの「偽会話」（室伏,1984）である。「偽会話」は認知症を有した者どうしでなければ困難であるとされているが、同時に認知症の進行をかなり防いでいるとも考えられている（室伏 1984）。発表者は、介護サービスを提供しているデイケアやグループホームでフィールドワークを実施し、認知症高齢者（以下、事例）との会話を試みてきた。その中で印象的な事例の変化に遭遇した経験から、「偽会話」に近い方法で会話を続けていくことにより、会話で認知症高齢者のリハビリテーションが可能となるのではないかと考えるようになった（田崎 2016）。当日はグループホームの入居者である事例との会話を用い、事例発話の述語が「痛い」から「かなしい」へと変化したプロセスを追っていく。その中で「私」を主語とした語りがどのように生じたのかについて検討していきたい。

室伏君士（1984）老年期の精神科臨床 金剛出版

田崎みどり（2016）会話をリハビリテーションにするために 認知症高齢者との会話から 臨床心理学,16(5),571-575.

山本智子「障害者総合支援施設の中で」

私は知的、精神、肢体不自由などの障害がある人が利用する施設で月に数回SVや面談をしています。そのため、私も含め施設職員は彼らが少しでも生きやすいように支援を組み立てようとするのですが、いつも「うまくいく」わけではありません。つまり、彼らが求める援助とずれることがあるのです。援助を求めてくる人は、社会生活や日常生活のうえで何らかの生きにくさを抱えた人々です。そのため、援助者は彼らの「困難」や「苦しみ」の部分に焦点を当てて対話をしがちですが、援助を求めてくる人々は私たちと同じように、日常の生活を営む人です。この当たり前のことを忘れがちな援助の場では彼らの困難や苦悩がより深まっていく可能性すらあるのです。援助を求めてくる人々はその生きにくさの部分だけを生きているわけでないことを彼らとの対話から学びます。本発表では、「生活者としての人々」を中心においた援助が彼らの求めていた援助にたどり着くことができた事例を紹介したいと考えています。

この企画は語り聞くことそのこと自体をテーマにしている。参加者全員が話題提供者でありまた積極的な聞き手である。このような場を設けたい。

Katz,A. &Shotter,J.(1996). Articulating Practices: Methods and Experiences / Resonances from within the Practice: Social Poetics in a Mentorship Program. *Confrontation and Transformation*1,239-247.

Katz,A.& Shotter, J. (1996). Hearing the Patient's Voice: Towards a Social Poetics in Diagnostic Interviews. *Social Science and Medicine* 43-6,919-931.

Shotter,J. (1997).Conversational Realities: Constructing Life through Language. *Human Studies* 20-1,117-123.

社会的危機状況から創造される「未来のコミュニティ」の萌芽： ポスト社会構成主義に向けた対話型セッション

企画・話題提供・指定討論：香川秀太（青山学院大学社会情報学部・准教授）

司会・話題提供・指定討論：宮本匠（兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科・専任講師）

話題提供・指定討論：橋本茉莉（高千穂大学・准教授）

人間社会の歴史において、時に、既存の秩序、そして社会構造が大きく揺らぐ危機的状況が発生する。それは、一方で、社会転換を生み出す新たな可能性でもある。

例えば、わが国では、2011年に原発事故が発生したが、これは明らかに、国家と資本制が共同関係を結んで経済を発展させてきた負の側面の象徴であり、「このままの生活で本当に良いのか」と全国或いは世界の人々が問い続ける契機となった。

そして、原発事故に限らず、世界各地で、紛争、環境破壊、経済危機、貧困問題が発生し続けている。いわば、遍在する恒常的危機状況である。

こうした時、従来の社会秩序（殻）をいっそう頑強にしていくことで生活を取り戻そうとする方向と、少しずつであろうとも既存の構造の殻を破ろうとする方向とがあらう。神話「パンドラの箱」でたとえれば、前者は、厄災を放った箱を補強し再び閉じる方向であり、後者は、箱の底に残った希望を、様々な人々、生物が創造的に新たなものとして発達させていく方向である。他方で、社会構成主義は、一見独立しているように見える主体、客体もすべて社会的構成の産物であることを明らかにし、認知、学習、感情の諸研究、あるいは質的方法論の発展に寄与して、いまだ現在は折衷派が主流ではあるものの、相互行為、関係性、集団、コミュニティといった考えを心理学に浸透させ、パラダイムのシフトチェンジを完了させつつある。

しかし、社会構成主義のもとになったマルクスを振り返れば、資本制社会そのものに対する問いかけが含まれていた。マルクスの関係論的、唯物論的発想は、アルチュセール、フーコー、ヴィゴツキーらを経て、社会構成主義に継承され現在に至り、多くの研究者が次第に集結して、様々な各フィールド、上部構造で発生する意味、アイデンティティ、学習の生成過程を詳らかにしてきたのは周知のとおりである。しかし、その土台（下部構造）たる社会構造とその未来については、資本制や集権制が生み出す様々な搾取や制約には（必ずしも直接的ではないが）触れてはきたものの、十分な検討が行われていない。したがって、ポスト社会構成主義の実現とは、「未来の社会構造」の創造の試みといえるだろう。

本セッションでは、経済的利益の獲得や集権的国家体制を軸に形成されていた従来型の生活や集団組織の在り方が、危機的状況を経て揺さぶられると同時に、その限界を乗り越えるべく、新たに創造される「次の社会（オルタナティブ・コミュニティ）」の萌芽に相当する実践に着目する。そして、主に 1)オルタナティブ・コミュニティの形態や参加者の特徴、2)そこで新しく生まれつつある価値観やライフスタイル、3)参加者の相互行為や学びの実態について語りあう。

南スーダン難民と演劇：溶解する自他境界と「問題」への新たなまなざし

橋本茉莉（高千穂大学人間科学部・准教授）

本発表の目的は、ウガンダに暮らす南スーダン難民による演劇活動を事例として、危機的状況下における他者との共存の新たな様式と、その中で育まれる共同性について報告することにある。2013 年末

に南スーダンで武力紛争が勃発して以降、隣国のウガンダには多くの難民が押し寄せている。難民定住地にたどり着いた人々は、紛争経験や未来への不安を抱えつつ、祖国において「敵」である民族集団出身者とも共存していかなければならない。この中で発達したのは、多民族・多国籍・多言語からなる若者たちで構成される演劇グループである。物質的・経済的に限られた状況の中、彼らは難民定住区内で発生する深刻な問題を時としてコミカルに演じ、また聴衆を巻き込むことで、自らが抱えている諸問題と向き合っている。本発表では、難民コミュニティにおける既存の問題解決のありようと演劇活動における「問題解決」の方法を対比的に捉えながら、彼らの活動を微視的に検討することで、境界設定と分類に基づく集団組織の統御ではなく、むしろ既存の境界を溶解させることで見えてくる「問題」のありようや対処の実践について検討したい。

「未来のコミュニティ」における他者の相乗性を高める鍵は？

宮本匠（兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科・専任講師）

共同態（*Gemeinschaft, community*）から社会（*Gesellschaft, society*）へ、あるいは近年、柄谷行人が『世界史の構造』において主張した交換様式Dに至る変化を鑑みても、「未来のコミュニティ」では、他者がどのように共生し、互いの生を豊かなものにするのかが一層問われる社会になるはずである。その際に鍵となるのは、他者がもつ両義的側面、肯定的側面と否定的側面のうち、肯定的側面をいかに引き出しうるのかだ。つまり、他者の相克性を巧みに回避しつつ、他者の相乗性をいかに高めるかが「未来のコミュニティ」の社会構想にとって必要不可欠のテーマとなる。この他者の相乗性と相克性をそれぞれ象徴しているようにみえる出来事が 1995 年に起きた。阪神・淡路大震災とオウム真理教による地下鉄サリン事件である。この 2 つの出来事に端を発して、現在の日本には 2 つのベクトルがせめぎあっているのではないか。ボランティアのベクトルと危機管理のベクトルである。発表では、それぞれ 2 つのベクトルにおいて見られる現象を、災害ボランティアの現場を事例に具体的にふりかえりながら、他者の相乗性を高めるために鍵となる概念、条件とは何かについて議論をしたい。

所有，贈与，創造的交歓：資本制の亜周辺

香川秀太（青山学院大学社会情報学部・准教授）

経済的資本の獲得競争を軸とする新自由主義的資本制社会の裏側で、貨幣経済は活用しながらも、そのポジションや社会の在り方を転換させるような活動が分散的に発生しつつある。この動きに我々は未来の可能性を見る。とりわけここでは、神奈川県相模原市の藤野周辺地区で行われる（が地域に限定されない）、地域通貨活動、廃材エコヴィレッジ、ファーマーズマーケット、パーマカルチャーといった活動に着目する。

本発表では、こうした事例からヒントを得て、ネクスト・資本制を導きうる萌芽的コミュニティの特徴とその可能性を描くための視点を、主に柄谷行人の交換論とネグリ&ハートのマルチチュード論、そして活動理論とを結合させて導き出す。端的に言えば、他者からの利益獲得の世界から、他者への贈与の世界へ、そしてさらに「創造的交歓」（creative intercourse）へのシフトである。柄谷も含め、しばしば資本制に欠けたものとして贈与の実践があげられてきたが、獲得モデルや贈与モデルの交換論は、同じく「移送」メタファに依拠するものではなかろうか。それに対して、本発表では、他者への贈与ではなく、「活動（自然）の発達に対する特異性の創造的贈与」を軸とし、かつ複数の交換形態間の芸術的矛盾から発生する情動のカタルシスを意味する、創造的交歓の概念を提案する。

付記）本セッションは、基盤研究 C（研究課題 18K03013）の助成を受けたものである。

若者にとって沖縄の平和学習はどう生き方に影響しているのか

企画・司会	稲垣絹代 (名桜大学総合研究所)
話題提供Ⅰ	永田美和子 (名桜大学)
話題提供Ⅱ・指定討論	北上田源 (琉球大学・沖縄国際大学非常勤講師)
話題提供Ⅲ	大城研志郎 (元立命館大学国際関係研究科)
話題提供Ⅳ	吉居俊平 (名桜大学看護学研究科)

(企画概要) 沖縄戦から73年たち、生存する戦争体験者の方が減少し、次世代への継承が課題になっている。看護学生に大学で平和学習を継続してきた永田美和子が看護学の立場から学生たちの反応を報告する。大学生や多くの修学旅行生に沖縄平和ネットワークで平和ガイドを実施してきた北上田源から教育学の立場から話題提供をする。沖縄出身で県外で大学生活や就職した大城研志郎と県外から沖縄での大学生活、就職をしている吉居俊平からの経験を聞き、若者主体の討議をしていき、今後の平和学習や沖縄の経験をどうわかちあえるのか考えてみたい。

(話題提供Ⅰ 永田美和子)

沖縄県名護市の名桜大学で、1年次の看護学生達に授業で沖縄戦の戦跡巡りを継続してきた経験から、学生の反応や今後の課題を報告する。

(話題提供Ⅲ 大城研志郎)

沖縄で生まれ成長し、県外の大学で平和学について学び、現在、京都で就職している。若者の立場で、平和学習の問題点や今後の課題について報告する。

(話題提供Ⅳ 吉居俊平) 昨年9月、沖縄戦において集団自決が行われた読谷村のチビチリガマが荒らされる事件が起きた。私は学生時代の平和学習でこの場所を訪れて、沖縄戦当時の悲惨な状況を学んでいた。この事件を報道で知った時は衝撃を受けた。最も衝撃的だったのは、16歳から19歳の沖縄出身の少年らが行っていたことだった。73年前の凄惨な地上戦があった沖縄で生まれ、育った少年らが戦跡を荒らすという行動に出てしまった理由がわからなかった。私が生まれ育った、福岡での平和学習と言えば福岡大空襲や長崎・広島原爆、鹿児島・知覧の特攻隊のことだった。戦争という本質は変わらないし、多くの命が失われたことに重い軽いがあるわけではない。しかし、沖縄の大学にきて沖縄戦の歴史・経験を学ぶ中で集団自決という集団死があったことを知った時、その中で亡くなった命が、住民がどんな思いだったのか計り知れないものがあると感じた。自決せざるおえなくなり、日本軍兵士から「自身の子どもの大切な命を奪え」と命令されたという話を聞いたとき、戦争の本当の恐ろしさ、無残さを感じた。その沖縄で戦争が忍び寄ってくる足音が聞こえている。沖縄戦を乗り越え、米軍占領下を乗り越えてきた沖縄がまた、戦争の犠牲になることは許されない。本土と沖縄の壁が取り払われたはずの現代で沖縄に過重な基地負担を押し付け、基地の島にしようとする思惑を、さらに乗り越え、平和と自然豊かな島の沖縄を創っていく。今からを担う私たち若者に平和と沖縄のこころを学び創り出して、これから生まれてくる子どもたちに平和で豊かな未来を残していくことが求められる。

(話題提供Ⅱ 北上田源) 1. 私個人の体験から-戦争体験者との出会い

私は 2000 年に大学進学のために来沖し、興味本位で平和ガイドの活動を始めた。そんな私がその後平和ガイドとして、あるいは教壇に立つ教師・講師として平和学習に関わるようになった原動力となったのは、戦争体験者との出会いによるところが大きい。

私が沖縄に来て初めて話を聞こうとした戦争体験者の方は、戦争について語ることができず、一言だけ絞り出すように「戦争のことはもういいさ」と呟かれた。また、その後 2004 年から「虹の会」の活動に参加し、ひめゆり学徒隊関係者の方々との対話を試み続けているⁱ。そうした経験をもとに、「使命感」としてではなく「約束」としての戦争の記憶の継承のあり方を考えるようになったⁱⁱ。また、元ひめゆり学徒隊の方々から教えてもらった当時の教員の姿とその時々判断からは、私自身が教壇に立つ人間としてどう判断し、どう生きるべきなのかを問うきっかけにもなったⁱⁱⁱ。

2. 基地問題を取り上げない平和学習

沖縄戦体験にとどまらず、体験者個々人の生きざまにまで視点を移していった時に、体験者にとって「戦争」は決して過去のものではないことがわかる。特に、戦後 27 年間米軍統治下に置かれた沖縄においては、沖縄の人々は日常的な米軍の暴力性と向き合わざるを得ず、沖縄戦の記憶と向き合うことも余儀なくされてきた¹。しかしながら、沖縄の平和教育では基地問題をテーマとして扱うことは少なく、大半が沖縄戦についての学習で終わるものとなっている^{iv}。実際、虹の会のメンバーたちも徐々に沖縄戦から現在の基地問題に関心を広げていくが、周囲の同世代の若者の無関心さと直面することになっていく。

3. 若者にとっての沖縄戦・基地問題-「当事者性」と「効力感」に注目して

報告者は現在、県内の複数の大学において非常勤講師として平和教育、沖縄戦や基地問題についての講義を担当している。授業を通して見えてくるのは、「沖縄戦=悲惨で二度と繰り返してはならない」「基地問題=様々な意見があって難しい問題」という枠組みの中で沖縄戦、基地問題それぞれについて思考停止になってしまっている大学生の姿である。報告では特に、授業における学生の感想を「当事者性」と「効力感」という観点から分析しながら、県内の大学生の基地問題に対する認識およびその変化のあり方について確認していきたい。

4. 今後の沖縄平和学習をより良いものにするために

おそらく 1-3 の話題提供の中で、一定程度現在の沖縄平和学習が抱える課題について把握してもらおうと思われる。それもあるので、最後にその課題を克服し、沖縄平和学習をもう一歩前に進めるためのいくつかの提案をしてみたい。こうした提案を通して、参加者の方々と一緒に今後の沖縄平和学習のあるべき姿について議論できればと思う。

i 「虹の会」の活動については下嶋哲朗『平和は「退屈」ですか?』岩波書店,2006 年に詳しい。

ii 虹の会の活動を通じた報告者自身の振り返りは北上田源「次のスタートラインをめざして-沖縄戦」小森陽一監修『戦争への想像力』新日本出版社 2008 年に詳しい。

iii この点については北上田源『戦争体験者/非体験者』の二分法を超えた『当事者』として、栗原彬編『ひとびとの精神史第 9 巻(震災前後)』岩波書店,2016 年 p137-150 に詳しい

iv 例えば、ひめゆり学徒隊の引率教員だった仲宗根政善氏は、1970 年に発生した糸満主婦轢殺事件に関して、次のように述べている「轢殺犯人の無罪に抗議する沖縄県民の意識の中には、戦争体験の核があるからなのだ。糸満町の街路上に轢殺されて横たわる〇〇さん(引用者注…被害者の氏名)の屍は、沖縄戦の残虐性を想起させる」仲宗根政善『ひめゆりと生きて-仲宗根政善日記』琉球新報社,2002 年,p62 より

v 大学生を対象としたアンケートによれば、平和学習で米軍基地について扱っている学校は県全域で 7%程度であるという(2012 年 6 月 20 日沖縄タイムス)。

「質的統合法（KJ法）」の質的研究の可能性を考える

—科学的質的研究に向けて—

企画・話題提供者：山浦晴男（情報工房、千葉大学大学院看護学研究科）

司会・指定討論者：正木治恵（千葉大学大学院看護学研究科）

話題提供者：天野 薫（名古屋市立大学看護学部）

大原裕子（千葉大学大学院看護学研究科）

河井伸子（大阪大学大学院医学系研究科）

高橋良幸（東邦大学健康科学部）

企画主旨

「質的統合法（KJ法）」は、文化人類学者川喜田二郎理学博士によって創案された「KJ法」に準拠した方法である。長年、千葉大学大学院看護学研究科の正木教授と山浦が協働で看護学における実践科学の研究方法論として、修士論文、博士論文の作成に向けた研究・指導の実践の中から質的研究方法論として形づくってきた。その成果は、『質的統合法入門 考え方と手順』（山浦晴男著、2012年、医学書院）として公刊されている。

本企画シンポジウムでは、質的統合法（KJ法）とはどのようなもののかの解説を山浦が担当し、この方法論を用いて研究を行った博士論文（及びその後の研究も含め）を4人の話題提供者に事例として報告してもらおう。その上で、指定討論者を中心に、質的統合法（KJ法）を用いた質的研究の可能性を、フロアーからの質疑も交えながら、検討したい。

指定討論 質的統合法（KJ法）を用いた看護研究の独自性と課題（正木治恵）

看護研究には、看護の視点から発せられる問題意識があり、それが研究の問いとなる。研究者らは、自らの看護観に基づいて、どんな現実直面しているのか（問題意識）、どうしてその現実を放っておけない（打開したい）のか、その現実（現象）に身を置いて、自分は何を見、聞き、感じるか、そのリアルな現象に迫るべく、博士論文へとつながる一連の研究に質的統合法（KJ法）を用いた。これらの研究は、特定の領域の看護現象を詳細に観察・記録し、その全体を洞察し、言語で記述するためにモデル化し、そしてそのモデルを実際の看護実践に用いて検証を試みている。概念化（抽象）と実践（具象）を行ったり来たりしながら、研究論文にまとめあげたものである。これらの研究にみられる看護研究の独自性に着目し、その意義と限界、今後の課題について、フロアーの皆様との討議を通して明らかにできたら幸いである。

話題提供1 質的統合法（KJ法）の原理と手順—アブダクションの技術化—（山浦晴男）

実験科学を基盤とする医学に隣接する看護学は、医学分野の研究者から数値化による統計解析を行わない質的研究は、科学的でないとみなされがちである。ひどい場合には、「文学」と変わらないといった批判までされるケースがあるときく。

このような批判に答える形で、質的統合法（KJ法）の原理と手順を提示する。併せて、アブダクションをもたらし確率が高い方法論であることを事例によって紹介したい。

話題提供 2 質的統合法 (KJ 法) を活用した研究の発展プロセス (天野薫)

病状が不可逆的に悪化する下降期にがん治療を受ける人々を対象とした看護援助モデルの開発に関する研究において、質的統合法 (KJ 法) を活用し取り組んだ過程を紹介する。対象を理解するための事例の実態把握から論理を抽出し、さらにその論理を臨床の場で活用できるようにするために具体策を考案し、実際に臨床の場で検討し結論を導くなかで得た気づきを踏まえ、質的統合法 (KJ 法) の活用の可能性について考察する。

話題提供 3 博士論文「糖尿病患者に対する身体の心地よさを生かした看護援助モデルの開発」における質的統合法 (KJ 法) による検証 (大原裕子)

本看護援助モデルは 3 段階を経て開発された。第 1 段階では糖尿病患者に対する身体の心地よさを生かした看護援助モデルとその看護援助指針を作成し、第 2 段階では、その妥当性を専門家会議で検討した。第 3 段階では、臨床看護師による実践を通して看護援助モデルの臨床実践適用性と有用性を検証し、その結果に基づいてモデルを洗練させた。質的統合法 (KJ 法) は、第 1 段階のモデルと看護援助指針を作成する時、第 3 段階のモデルの有用性を検証する時に用いており、質的統合法 (KJ 法) をどのように用いたかについて報告する。

話題提供 4 糖尿病患者の連続性に着目した看護実践評価ツールの開発 (河井伸子)

2 型糖尿病患者が、疾患のコントロールのみならず自己の人生の在り方を含めた主体的な生活調整を行うためには、いかに行動変容するかという「変化」の視点だけではなく、その人自身が過去をどう携えて今に至り未来を見通しているか、過去 - 現在 - 未来のつながりである「連続性」に着目した支援が求められる。今回は、連続性に着目した看護実践の評価ツールを開発する研究プロセスにおいて、どのように質的統合法 (KJ 法) を用いたかについて報告する。

話題提供 5 実践科学としての質的統合法 (KJ 法) (高橋良幸)

慢性の病が進行し、心身状態が悪化していく中で自らのニーズを適切に他者に伝えることは困難である。そのような人にとって何が良いことなのか、何が癒やしにつながるのか、複雑なニーズをもつ人々により適したケアとなるにはどのようにそこに存在すれば良いのか、看護職者は考える。ここで紹介するのは、このような常時変化しうる複雑なニーズを抱える人へのケアについて、質的統合法 (KJ 法) の W 型問題解決モデルを活用して挑んだ一過程である。質的研究の成果と課題解決の両側面から述べる。

発話・身体動作の時間構造を記述する：コレクションに
基づく質的分析の可能性

【企画者】 細馬宏通（滋賀県立大学）

【話題提供者】高梨克也（京都大学）・平本毅（京都大学）

城綾実（滋賀県立大学）・細馬宏通（滋賀県立大学）

【企画趣旨】

社会学や心理学の多くの研究が内省、フィールドノート、インタビュー、実験の手法を用いるのに対し、会話分析の分野では、自然に起こる人の活動を録音・録画し、実際の状況における活動を記録することによって、当事者に内在する秩序を詳細に分析する手法が用いられてきた（Mondada 2013）。こうした研究方法は近年、発話と身体動作の時間構造に注意を向ける相互行為分析としてひとつの分野を形成しつつある。では、こうした相互行為分析で、録音・録画データはいかに収集され、どのような手続きで「コレクション」は作られ、質的に分析されていくのか。本シンポジウムでは、異なるフィールドを持つ相互行為研究者が、発話・身体動作の連鎖を記述することを通してどのようにコレクションを作り、分析を実践していくか、その過程を比較検討することによって、録音・録画データの用い方を再検討することを目指す。

最初に、細馬から簡単なコレクション作成に関する簡単なイントロダクションを行う。そのあと、具体的にどのように注目すべき事例を絞り込みコレクション作成に至るのか、それがその後の研究過程にどのように影響するかについて、三人の登壇者が発表を行う。その後、フロアにも議論を開き、新しい考えを発見するために、あるいは妥当な検証を行うために、質的研究においてどのようなコレクション作りが可能なのかを考察する予定である。

【発表1】展示制作のための多職種ミーティングに見られる懸念導入表現の分析手順
高梨克也（京都大学大学院情報学研究科）

本発表では、日本科学未来館の常設展示「アナグラのうた」の制作を行う多職種チームによる継続的なミーティングにおいて繰り返し観察された懸念導入表現「気になるのは」が当該のミーティングにおいてどのように用いられ、どのような効果を持っていると考えられるのかを分析した高梨(2018)に基づき、その着想からデータコレクション、作業仮説と分析枠組みの設定、分析手順と得られた結果、結果から導かれる知見に至るまでの一連の流れ、すなわち分析を「舞台裏」を紹介し、全体討論のたたき台とすることを目指す。特にこの分析では、多職種チームという点に調査関心があったため、この表現が当該の会話時点でどのような参与役割にあったメンバーによって用いられるかという参与構造上の特徴と、この表現が用いられると他の参加者がどのようにこれに応じていくことが求められるかという連鎖構造上の特徴とを同時に捉える枠組みが必要であると考えられたが、この点についての工夫や配慮について紹介したい。

【発表2】家族での買い物場面における購買提案時の身体動作

平本毅（京都大学経営管理大学院）

本発表ではスーパーマーケットにおける家族の買い物場面の調査結果を提示する。とりわけ父親と子どもが購買意思決定連鎖を開始する行為に焦点を当て、その連鎖開始行為（sequence-initiating action）がどう構成されるか、あるいはその行為が受け手（母親）にどう帰属（ascribe）されるかをみる。興味深いことに、発話形式の使い分け（[名詞句のみ] or [名詞句+述部]）（Hiramoto & Hayashi, to appear）に加えて、発話に伴う身体動作が、行為の構成と帰属に大きく寄与しているように思われる（Hiramoto & Hayashi, 2018）。具体的には、

- （１）購買を提案する品の横を歩き続けながら提案するより
- （２）品のそばで立ち止まった方が、さらにそれより
- （３）品に近づきながら提案した方が、さらに
- （４）品を指差した方が、そして
- （５）品を掴んだり取り上げたりしながら提案した方が、提案者が購入にコミットする度合いが高いものと、母親に受け取られる。この（１）～（５）は、提案する品との一環境と組み合わされた（environmentally coupled）一関係において、一種のスケールをなしており、父と子はこのスケールを使うことを通じて、いま自分たちが開始しようとしている購買意思決定連鎖に、自分たちはどんな立場としてコミットするのか（ただ連鎖を開始するだけの者か、それとも意思決定に影響を与えるか etc.）を表示している。本発表では（１）～（５）のコレクション作成と分析の過程について紹介し、身体動作のコレクションに基づく体系的な分析の可能性を議論したい。

【発表3】ジェスチャーに着目したコレクションの作成について

城綾実（滋賀県立大学人間文化学部）

会話分析の中心となるコレクションは、いくつかの手がかりを頼りに作成される。たとえば、位置と構成（position and composition）に着目することは、コレクション作成のもっとも基本的な手がかりになる。電話の開始位置における“Hello”を集め、電話会話の開始部における行為連鎖の特徴を明らかにした研究（Schegloff, 1968）などがこれにあたる。ほかにも、特定の表現に着目したコレクションも多くなされている。たとえば、母親が自身の子を「これ」と呼ぶことは、会話において達成しようとする行為（たとえば、説明の説得力を増すこと）にかかわって選択されているものであり、母親の愛情の多寡とは無関係であることが示されている（戸江, 2015）。

以上で紹介した研究例は、すべて言語形式に着目してコレクションを作成・分析したものである。近年、相互行為における発言と身体との関係を明らかにしようとする研究が増えているが、身体的振る舞いに着目してコレクションを作成すると、言語形式に着目して事例を集めるときよりも戸惑うことが多いように思われる。発表者はこれまで、二人以上で同時に同じジェスチャーを行うジェスチャーの同期（城, 2018）、一見展示物に見えない巨大な物体を相互行為に引き込む科学コミュニケーターの指し示し（城, 近刊）などの研究を進めてきた。本発表では、ジェスチャーに着目してコレクションを作成するにあたり、どのような点に注意を払って分析対象となる相互行為的現象を定めるのか、どうやって集めて検討していくのかといった研究過程を紹介し、言語形式に着目する場合との類似点や相違点を整理してみたい。

ナラティヴのうまれるところ、そしてその向こう：
ナラティヴ研究の可能性を探る

企画・司会：保坂裕子（兵庫県立大学）

話題提供：岡部大祐（順天堂大学）・木下寛子（近畿大学九州短期大学）・
保坂裕子（兵庫県立大学）

企画趣旨：

本シンポジウムは、質的研究の手法のなかでも、「ナラティヴ」に着目し、方法論としての理解を深めることを目的としている。ナラティヴ研究は、研究領域や手法によりさまざまに定義され、用いられている。なかでも、ナラティヴ・テキストを分析対象とし、内容や構造に着目するものが主流であるといえよう。しかし、わたしたちの日常をとらえようとするとき、「ナラティヴ」はすでにそこにあるというわけではない。ではわたしたちは、どのようにそれをとらえ、研究していくことができるのか。本シンポジウムでは、ナラティヴのうまれる場、ナラティヴ・テキスト未満のもの、そしてその向こう側、という三つの観点から、ナラティヴ研究が持ちうる可能性について検討したい。

「雰囲気」のための言葉：小学校の日々に生じる「話す」行為から（木下寛子）

本報告は、きわめてありふれた日々の中に生じる「話す」行為、特に雰囲気を巡って「話す」行為を考えることから、日々に話される「言葉」の意味、そして「語る」行為について考え直すものである。「語る」という語には、隠れて見えなかった意味を「おのずから示す（見えるようにする）」という含意がある。本報告では、私達の生きる世界の事象をひろく「ナラティブ」や「語り」として受け止めなおす語り研究の意義を受け取りつつも、この含意を引き受け、「語る」行為を「話す」行為から殊別して考える道をとった。

さて、日常的に言及される雰囲気については、心理学とその周辺領域でも、人が関わり合う場や集団を理解する上での重要性を指摘する論は少なくない。特に心理学は、集団や場という単位を理解する過程で雰囲気に注目し、実体をもたない雰囲気を対象化して正確に記述し、取り扱う方法を求め続けてきた。そして、人間を、対象を正しく認識し正しく言明・伝達する一貫した態度へと導こうとしてきた。

報告者は、2001年から九州のある小学校に参加している。そこで子ども達や先生達とその日々を過ごしていると、時に先生達が、ある教室の雰囲気を話題にすることがある。しかしそれは、心理学研究が人間に求めた態度とは対照をなすばかりか、格別の意味での「語る」行為にも至らないようである。話題がひとところに留まらず、とめどない「お喋り」になる時があるかと思えば、たった一言、言葉が誰かの口からこぼれるのを聞くだけという時もある。それらはいずれも、雰囲気が話題になった時にだけ生じるのではなく、多くの話題に関して起こりうるきわめてありふれた「話す」という行為（あるいは「話そうとする」行為）である。このような「話す」行為とは、いったいどのような行為なのだろうか。正しい認識・言明にも至らず、「語る」行為にもなりきれない、素朴で不完全な欠如態なのだろうか。雰囲気について話す言葉と、その言葉を巡る理解には何が必要なのだろうか。

本研究報告では、小学校という場でのありふれた「話す」行為の諸様態を広く紹介し、とりわけ雰囲気を巡って話される言葉の意味を明確にする。そして、雰囲気のためのそれらの言葉や、話す行為を巡る理解のほうから、さしあたり殊別してきた「語る」行為とその可能性を明らかにしたい。

未だ物語でないものから（保坂裕子）

研究手法として用いられるナラティヴは多くの場合、筋の通った一連の物語として位置づけられる。なぜならナラティヴは、物語のなかの時制を調整し、行為主体を明確にし、語ることを要請する状況を方向づけることで、ひとつの了解可能な確固とした物語（意味）となる。そしてその確固とした物語のありようは、わたしたちの日常を支える大きな物語をとらえるために役立つ。一方で日常の営みは、物語になりきらない、他者との未完のやり取りのなかにあるともいえる。前者を確固とした物語(Big Story)によるアプローチとするならば、後者は些細な物語(Small Story)によるアプローチとして位置づけられる(Bamberg & Georgakopoulou, 2008)。両者は相補的な関係を成しており、確固としたものとしてみなされている物語も、日常のやり取りのなかで実践され、再検証され、そして再構成されていくのである。本研究発表では、後者の些細な物語によるアプローチのように、未だ物語として完結してはいないものから日常の実践を読み解くことに、ナラティヴ研究の可能性を見出したい。具体的には、高校生グループへの「ともだち」についてインタビュー調査で得られた発話データをもとに、ひとまとまりの物語として語られているとはいいがたいが、彼・彼女らの些細な物語に着目し、いかに彼・彼女らが相互のやり取りのなかで「ともだち」のナラティヴを構成し、自らのものとしていくのかについて考察する。

もっとおもしろく「ナラティヴ」する？：病いを語ることから考えてみる（岡部 大祐）

質的心理学は「語りの心理学」なのかと問われることもあるように、「ナラティヴ」は質的心理学研究（者）にとって、いまだ中心的な関心対象と考えてもよさそうである。私自身は（ヘルス/異文化間）コミュニケーション論を専門領域として、とりわけ社会言語学、言語人類学、談話社会心理学といった社会的相互行為としてのディスコースの観点から研究に取り組んできた。そのような立場から見ると、私が学んできたものは、質的心理学の領域でいう「ナラティヴ」ととらえ方がやや異なるようである。その違いも踏まえながら、以下のような流れで、話題提供を行う。

「ナラティヴ」を研究する上で、もっと「おもしろく」するための視点として2点提案する。すなわち、1) 分析道具、2) データの生成と提示の方法、である。第一の分析道具の点からの提案は、一言で言えば、「ナラティヴ」研究は十全にコミュニケーション論的転回を果たすべきというものである。「ナラティヴ」を扱う関連領域、とりわけディスコース研究には、「ナラティヴ」をより精緻に分析するための諸概念の蓄積がある。しかしながら、（少なくとも質的心理学的な）「ナラティヴ」研究、とりわけ健康と病いに関する研究では、部分的には共通する研究目的があるにもかかわらず、それら諸概念がほとんど顧みられていない現状があるように思われる。シンポジウム当日は代表的な分析道具とそれらを用いた短い分析を紹介する。第二に、データ生成と提示の方法の点から、デザイン領域での「スペキュラティヴ・デザイン (speculative design)」(Dunne & Raby, 2010) のアイデアを（やや強引な形で）「ナラティヴ」の研究に援用する提案を行う。これまでの多くの「ナラティヴ」分析のアプローチでは、語り手の過去の経験の語りをデータとして引き出し、分析し、個別の経験を理解（あるいはその可視化）することに焦点（のひとつ）があると考えられる。とりわけ臨床的なまなざしが強い病いのナラティヴではその傾向が顕著に認められるだろう。一方、ここで提案する「スペキュラティヴ・ナラティヴ」研究では、あまり取り上げられない未来志向の語り（「～だったりして」(cf. 原, 2017)、ありうる未来、望ましい未来に向けた「ナラティヴ」）の生成・提示に焦点を当てる。このアプローチで生成した「ナラティヴ」から現在を照射し、議論を促し、個人ではなく、「ナラティヴ」のコミュニティの変化を志向する。さらに、このアプローチが潜在的に抱える倫理的課題についてもいくつか問題提起を行う。

質的研究の多次元領域マップを創る

話題提供：岸磨貴子（明治大学）・近田真美子（福井医療大学）・西倉実季（和歌山大学）

広瀬和佳子（神田外語大学）・滑田明暢（静岡大学）

司 会：荒川歩（武蔵野美術大学）・香川七海（日本大学）

企 画：日本質的心理学会研究交流委員会

質的心理学会には、さまざまな領域のさまざまな関心をもった研究者がいる。そのため、それぞれの領域・関心によって、質的研究に求めているもの、質的研究とされる範囲、質的研究において抱えている問題点には、共通する部分と異なる部分とが考えられる。そこでこのセッションでは、さまざまな領域で研究を進める登壇者を迎え、どこに違いがあつて、どういう共通点があるのかについて論点を整理し、異分野との対話のなかで、質的研究の新しい地平がみえるセッションになることを目指す。当日は、登壇者以外にフロアからもご参加いただける時間を持ちたい。

岸は教育工学の立場から学習環境のデザインについて研究している。教育工学は「テクノロジーと教育」という共通の関心テーマのもとに多様な専門領域の研究者が集まっている。行動主義心理学から発達してきた研究分野であり、従来、テクノロジーを組み入れた教授システムの効果を測るため主に量的研究の手法が使われてきた。1990 年はじめには構成主義心理学の知識観に基づいた研究も見られるようになり、質的研究の手法も着目されるようになった。実際、2006 年から 2017 年に日本教育工学会に投稿された論文のうち、質的データを扱った研究は 13%を占めている。教育工学における質的研究の手法を用いた研究の特徴は次の 3 点に整理される。第一に、新しい能力観への関心から複雑で多様な学びを捉えようとしていること、第二に、学習過程と学習者の歴史的観点にも着目しようとしていること、第三に、ワークショップやラーニングコモンズなど、到達目標が事前に設定できない環境（場）における学習も研究対象とされるようになり、環境との相互関係から学びを捉えようとしていることである。しかしながら、量的なデータを補完するために質的データを用いる研究が多く、その前提となる認識論や方法論が安易に折衷主義的に扱われている点が課題である。

近田は、看護学の立場から、重度の精神障がい者の地域生活支援を担う実践者の実践の構造を明かにするために現象学的手法を用いて研究を行っている。科学的根拠が重要視される医療や看護という自然科学系の学問領域では、以前から、量的研究と質的研究における「科学的客観性」や「一般可能性」の有無について議論が交わされてきた。また、近年では、現象学的手法といった質的研究でありながら分析や理論構築を目指す方法とは違う形で、臨床の営みを記述しようとするケースも増えている。質的データの共通項を見出すだけでは、臨床実践の場で生じている現象を十分に可視化することは出来ないという不全感が、多くの看護者を現象学的手法に向かわせる動機の 1 つとなっているのだろう。どのような研究方法に価値を置くのかという話は、看護学という学問が、今後、どのような専門性を指向していくのかにも関わる重要な問題でもある。今回は、看護学における研究方法をめぐる問題について、他の学問領域との比較を踏まえつつ、参加者の皆さんと議論したいと考えている。

西倉は、社会学の立場でライフストーリー研究をしている。社会学におけるライフストーリー研究は、社会的マイノリティや被差別者など、これまで学術的にも社会的にも不可視化されてきたか、主流社会や専門家によって一面的なイメージを付与されてきた人々のライフの理解に有効性を発揮してきた。ライフストーリーは生きられた経験の表現であり、自らの社会的世界に意味を与えるものであるからこそ、他者のライフを理解する絶好の手がかりとされてきたのである。研究対象のこうした特色ゆえに、社会学におけるライフストーリー研究には、研究者がインタビュアーとして調査協力者に対峙する状況やそのプロセスそれ自体を自己言及的に分析・記述するという特徴がみられる。社会的マイノリティである調査協力者との間の非対称性を見極めつつ彼／彼女らと向き合うには、対象とする諸個人のライフを問うのみならず、それを問う研究者の行為や認識をも問い直す方向へと展開する必要があるためである。ただし、こうした動向に対しては、研究者の自己言及的な分析・記述が調査協力者のライフの理解をめざすライフストーリー研究にどのように貢献しているのかがわかりにくいという批判もあり、必ずしも十分な応答がなされていない状況である。

広瀬は日本語教育学が専門であり、自身の教育実践の場で、学習者の文章産出過程や協働学習に関する研究を行っている。日本語教育学における質的研究は、教師が行う実践研究のあり方を議論する中で注目されるようになった。日本語教育の研究は言語学や心理学など関連分野との間で領域横断的に行われており、基礎科学の領域で生み出された理論を実践に応用するという立ち位置の研究が多い。これに対し、近年では教師がフィールド独自の理論を実践から立ち上げる実践研究の必要性が主張されるようになった。実践研究では、実践し研究する「私」を中立的・客観的な観察者とすることはできない。「私」を含む実践にかかわる全ての人々の言語観、学習観を批判的に問い直し、よりよい実践を共に創ろうとする当事者の視点が重視される。日本語教育における質的研究の特徴は、この実践者＝研究者（実践研究者）の視点にあると筆者は考える。しかし、教育心理学などの分野では実践者が研究を行う困難さや限界が指摘されており、日本語教育の分野でも同様の議論がある。実践研究者にしか記述できない実践の理論とはどのようなものか、方法論とともに具体的に提示していくことが日本語教育研究における質的研究の課題である。

滑田は心理学の立場から、家事に関する公平感覚と夫婦間の相互作用について研究している。心理学における質的研究は、人の心や行動を探究する研究法の一つである。例えば、心理学研究法に関するAPA（米国心理学会の）ハンドブックでは、研究者が研究対象となる事象の解釈や記述を求めており、その事象に関して行為者自身の思考と行動の動きを知りたい場合には質的研究を用いることになる、という方向性が示されている（Cooper, 2012）。心理学における質的研究の特徴は、当事者の視点に立った理解を行うことや、一人ひとりの経験の固有性と多様性を理解すること（例えば、柴山, 2006）、そして、（研究者を含めて）人と人を相互作用する存在として捉え、その人たちはともに文脈（環境や状況など）に埋め込まれていることを前提とする（例えば、やまだ, 2013）ことにあると考えられる。現在、心理学領域における質的研究が抱えている問題は、どのように理論の構築を行っていくことができるか、にあると考えることができる。

ナラティヴを通じた他者理解
——聞き手の視点と感性に注目しながら——

企画・司会：植田 嘉好子（川崎医療福祉大学）

話題提供者：田中 彰吾（東海大学）

植田 嘉好子（川崎医療福祉大学）

能智 正博（東京大学）

指定討論者：西 研（東京医科大学）

企画趣旨

ナラティヴは生の出来事についての語りや物語を指し、心理、福祉、医療などの質的研究における重要な手がかりとされてきた。ブルーナーは人間の思考様式を「論理・科学的様式」と「物語的様式」とに分類し、人々の生活の社会文化的次元や個人的豊かさを理解するうえで「物語的様式」の重要性を強調した。また医療では科学的根拠を重視するエヴィデンス・ベースト・メディスンに対して、患者の語りや対話に基づくナラティヴ・ベースト・メディスンが提唱されている。

ただ、こうしたナラティヴは真空のなかに生まれるものではなく、インタビュー等の対話のなかで生じるものであり、あるいはそのようななかで聞き手によって聞き取られるものである。患者やクライアントの語りや、あるいは語られないナラティヴを、他者である私たち研究者はどのように理解し、妥当な研究データとして活用することができるのか。

私たちはこれまでも学会の場で「ナラティヴ・セルフ」について議論してきたが、前回の議論では、次のようなテーマが浮かび上がっている。

- ① ナラティヴにおける情動や欲望の次元、
- ② 語り手と聞き手の関係や相互作用、および聞き手の感性の問題、
- ③ ナラティヴ分析におけるパースペクティヴと妥当性の課題

ナラティヴを用いる実践や研究では、クライアントや研究協力者等の「他者」に対する理解が前提であり重要な目的でもある。しかしそれがどのように聞き手において実現され、第三者へと普遍化されるのか。本シンポジウムでは、上記のテーマを意識しながら田中、植田、能智が話題提供を行い、それを踏まえて現象学者の西が指定討論を行って、人間的な経験の本質に迫るルートとしてのナラティヴに関する議論を深めていきたいと考えている。

話題提供1 「ナラティヴ・セルフの概念から考える質的研究」 田中彰吾

この話題提供では、質的研究にもとづく人間理解にとって「ナラティヴ」が有している意義について確認し、そのうえで、そこに含まれる可能性と問題点について整理する。

広く知られている通り、ナラティヴの概念は、もともと認知心理学者のブルーナーが1980年代に提起したものである。ブルーナーによると、「論理—科学的様式」と「物語的様式」とは互いに還元できない。両者が還元できないとすると、人間を対象とする科学にとっても、人間行動の科学的法則を探る量的研究と区別して、人々の発するさまざまな語り（ナラティヴ）にもとづく質的研究を構想する可能性が拓けることになる。

ここからさまざまなナラティブ・アプローチが派生することになるが、この発表で着目したいのは「ナラティブ・セルフ」の概念である。心理学者のマカダムスや哲学者のリクールは、人々がみずからの人生について物語る行為が、物語の主人公としての自己アイデンティティを構成する側面に注目している。人生を語るナラティブには、自分の生きてきた過去を振り返り、将来の生き方の可能性をさぐることで、時間的に一貫した自己を構成する作用がある。

だとすると、質的研究においては、特定のテーマに沿ってナラティブを収集してその共通性を抽出するというアプローチだけでなく、個別の人間の語りに寄りそって、物語を通じて構造化される自己や生のあり方を解明するという事例研究に近いアプローチもありうるだろう（たとえば現象学的な精神医学はその種のアプローチとして再評価できる）。当日は、ナラティブ・セルフという概念が指し示す研究の可能性と課題について、企画趣旨に示されている各テーマに関連づけて、より踏み込んで言及したい。

話題提供2 「ソーシャルワーカーの実践にみるナラティブを通じた他者理解」 植田嘉好子

ある特別養護老人ホームに勤めるソーシャルワーカーの語りから、現場実践においてクライアントのナラティブをどのように理解しようとしたかについて紹介する。クライアントである高齢夫婦は、突如の体調の変化により生活の場を自宅からショートステイ、病院、有料老人ホームへと移っていくことになる。その折々に相談支援を実践するソーシャルワーカーは、高齢夫婦やその娘、他の支援者それぞれのナラティブを注意深く受け取り、確かめ、次の行動へと展開していく。高齢夫婦の揺らぐナラティブに寄り添い、“彼らの人生の狭間の瞬間に携わる”ことへの感謝と決意をソーシャルワーカーは語り、自らの専門性へと繋げる。

発表後半では、質的研究としてナラティブを分析する上での論点を提示したい。「どのように語られたか」「何が語られたか」はその出発点ではあるが、現象学的に考えた場合、クライアントの語り（あるいは語られない語り）から研究者はどのようなメッセージを受け取ったのかを検証し明らかにする必要がある。つまり、ナラティブからクライアントの実存的意味をいかに解釈するか、その解釈は妥当性を持つのか、の2点について、その手続きとプロセスを考察する。

話題提供3 「ナラティブ・セラピーにおける情動の次元」 能智正博

ナラティブ・セラピーは、「ナラティブ」の概念を中心に据えつつ従来とは異なる心理療法の技法を発展させてきたもので、質的研究におけるインタビューの技法や他者理解の方法の面でも参考にできる場所が大きい。その前提にある考え方は、セルフ・ナラティブは複数存在するが、語られやすいドミナントな物語の背後には、しばしばあまり意識されていないオルタナティブな物語がある、というものである。ナラティブ・セラピーの創始者のひとりマイケル・ホワイトは、後者を掘り起こし、そのなかで現状を変えていけそうなものを選択し、それを育てていく対話の技法を提案してきた。一見この対話技法は、言語的な物語の表出に重きを置いており、情動的な面への配慮が希薄なようにも見えるかもしれない。しかし実際は、掘り起こされた物語の情動価については常に注意が向けられており、どの物語を育てていくかを選び、評価していく際に何度もクライアント（語り手）の情動に立ち戻るところがある。今回の話題提供では、ナラティブ・セラピーの対話技法から、インタビュー技法について何が学べるかを検討する。さらに、その技法を発展させて、語り手の身体性を捉えて対話に組み込んでいく技法の可能性について考えてみたい。

巨大災害後の内発的復興を促すために：
アクションリサーチにおける共同当事者性を考える

企画者・司会：永田素彦（京都大学）

話題提供者：藤本延啓（熊本学園大学・西原村 reborn ネットワーク）

鈴木隆太（被災地 NGO 協働センター・西原村 reborn ネットワーク）

宮本匠（兵庫県立大学）

永田素彦（京都大学）

指定討論：香川秀太（青山学院大学）

【企画概要】

本シンポジウムは、2016 年熊本地震の被災地である西原村をフィールドにして、巨大災害後のコミュニティの内発的復興を促すアクションリサーチのあり方について、共同当事者性の観点から検討しようとするものである。アクションリサーチは、研究者と現場の当事者の共同実践を通して、現場のベターメントを目指す。そこでは当事者の内発性を駆動することがしばしば重要な課題となる。しかしベターメントを目指すという姿勢は、逆説的に、当事者の内発性を疎外する危険性をもつ。研究者と当事者の両方を含めて共同当事者と呼ぶことにすれば、現場に潜在する内発性を引き出し、新たな内発性を創発する共同当事者性について検討することは重要な課題である。当日は、このような共同当事者性のあり方について、西原村で復興支援活動を展開する西原村 Reborn ネットワークの中心メンバーと、熊本地震を含むさまざまな災害現場でアクションリサーチに取り組んできた研究者の対話を通して、実践的報告と理論的観点を結びつけながら考えたい。

【話題提供】

熊本地震が発生して以来、常に自分の「立ち位置」と「その役割をいかに果たすか」ということに苦慮してきた。私は被災地住民であり、西原村に引っ越してきて 9 年目の「よそ者」であり、西原村災害ボランティアセンターの元統括であり、復興支援団体の西原村 reborn ネットワーク代表であり、熊本学園大学の教員（職業的・所属的ラベル／組織人であること等、複数の意味合いを内包する）であり、社会学の研究者であり… そのような『私』にとっての「内発性」とは、あるいは「復興」とは何だろうか。

この中から「被災地住民」のみに絞ってみても、西原村における地域社会の枠組みに従って、マクロレベルからミクロレベルへ順に『私』の立ち位置を眺めていくと、西原村住民として・門出地区住民として・小久保組住民として・4 人家族の藤本さん宅の父ちゃんとして… という、社会的な多層構造の中に自分が存在していることに気づく。「西原村住民」としての「内発性」「復興」と、「藤本さん宅の父ちゃん」としての「内発性」「復興」は、同じものなのだろうか？。

このシンポジウムでは、私自身を事例にして、社会的に様々な「立ち位置」、さらに西原村地域社会のマクロ・ミクロを行き来しながら見えてくる「立ち位置」において、「外部」からの支援者（ここでも「立ち位置」「地域レベル」によって「外部」の意味合いは異なってくるが…）とのかかわりも含めながら、「内発性」「復興」について議論してみたい。それは、この 2 年半の『私』がずっと抱えてきた悩みでもあるからだ。

（藤本延啓）

西原村の復興の特徴は多様な属性をもつ人々が協働を試みている点にある。西原村には 90 年代以降の宅地開発等により居住歴の比較的新しい新住民と、伝統的な集落に居住する旧住民が存在する。さらに、西原村の出身で今は他地域に居住する元住民が、地震をきっかけにして村の復興に関わっている。これら旧住民（土の人）、新住民（風の人）、元住民（旅の人）が、地震をきっかけに協働した経験を長期的な地域づくりにどのように活かしていくのかが復興の鍵となっている。このような多様な属性をもつ西原村村民に対して、外部支援者もまたさまざまな人々が関わっている。災害現場での経験を積んだボランティアや NGO もいれば、農業ボランティアを契機として西原村に通うようになった人々もいる。関西等の遠方から訪れる大学生もいれば、熊本市内から通っている若者達もいる。また、これまでの災害復興の事例では、災害直後に被災地に関わる外部支援者が、その後の長期的な復興過程に関わることは限定的であったが、西原村では災害直後に関わった外部支援者が現在も活動が続けていることが珍しくない。このような西原村の復興は、被災地「外」から関わる外部支援者が、被災地「内」にいる被災者の内発性を引き出していく、という図式というよりも、立場の異なるさまざまな人々がそれぞれのやり方で西原村の復興の当事者として活動しているとみた方がよい。西原村の復興事例から、人々の流動性が高まり、他者との共生が問われるこれからの災害復興の鍵を考えたい。

（鈴木隆太・宮本匠）

アクションリサーチにおいては、しばしば当事者の内発性の形成が重要な論点となる。災害復興の現場ではこのことは特にあてはまる。ところで、近年、巨大災害に襲われた被災地にもたらされる大きな特徴の一つは、特にその被災地がいわゆる田舎の町村であった場合には、それまで経験したことがないような大量かつ多様な外部者との出会いだろう。アクションリサーチに携わる研究者もさしあたってそうした外部者の一種である。災害復興の過程においては、しかし、内部者と外部者の区別よりも、それぞれが「共同当事者」として復興に携わることが重要である。当日は、私がこれまで関わってきた東日本大震災の被災地である岩手県野田村の事例をふまえながら、被災者の内発性を促す共同当事者のあり方、特に研究者としての研究者の役割について考えたい。

（永田素彦）

沖縄戦体験者の精神保健と戦争トラウマ

(企画) 田場真由美 當山富士子 高原美鈴 下地ヨシ子

(話題提供) 田場真由美 當山富士子 高原美鈴 下地ヨシ子

沖縄戦とは、「太平洋戦争の末期に南西諸島、とくに沖縄本島およびその周辺の島々で、一般住民を巻き込み展開された地上戦である。沖縄戦の何よりの特徴は、現地住民を巻きこんでの島嶼戦であったこと、その結果、正規軍人の戦死者よりも一般住民の戦死者がはるかに多かったところにある」¹⁾とされている。また、沖縄戦の特徴として、池宮城ら²⁾は下記の5つの特徴を挙げている。

1. 3ヶ月以上の長期に及び激しい地上戦
2. 現地時給の総動員作戦
3. 軍民混在の戦場
4. 軍人を上回る一般住民の犠牲
5. 米国占領の長期化

沖縄戦と心の問題については数少ない報告が見られるのみで、数量的な報告については皆無に等しい。演者らは遅まきながら、「終戦から67年目にみる沖縄戦体験者の精神保健」(研究代表: 當山富士子)の調査³⁾に参加し多くの沖縄戦体験者から貴重な話を聴くことができた。今回は、本調査に関わった者としてそれぞれの立場から報告を行いたい。

【今回の調査の概要】

〈調査の目的〉

戦闘が行われた沖縄本島とその周辺離島村を含む8市町村に在住する沖縄戦体験者の精神保健、特に戦争トラウマの現状について把握する。

〈調査期間〉

平成24年4月~平成25年2月。対象は、戦闘が行われた沖縄本島の6市町村(南部2、中部2、北部2)および沖縄本島周辺離島の2村(南部1、北部1)の在住者で、当該市町村の介護予防事業に参加していた沖縄戦体験者で75歳以上の者である。

〈使用した尺度および質問紙〉

- ①WHO-5 (World Health Organization Mental Health Well Being Index-five items :) 精神的健康状態を測定。
- ②IES - R (Impact of Event Scale-Revised) 改訂 出来事インパクト尺度でトラウマ関連の症状の程度を評価する。
- ③沖縄戦に関する自作の質問紙。

〈結果・考察〉

- ①収集したデータ431人のうち年齢、有効回答は401人(93.8%)。
- ②性別では女348人(86.8%)、男53人(13.2%)で、平均年齢は82.3±5.1歳であった。
- ③WHO-5の平均得点(標準偏差)は21.5(±4.2)で、先行研究に比べ高得点であり精神的健康状態は良好であった。IES-R(有効回答359)の平均得点は22.4(±15.4)。

- ④PTSD ハイリスクとされる IES-R（有効回答 359）の 25 点以上が 141（39.3%）。その理由として、凄惨な沖縄戦体験に加え、日常的に起きている「基地」から派生する生活に密着した問題がマス コミにより報道されることが強く影響しているものと推察される。
- ⑤「沖縄戦を思い出すきっかけ」では、「戦争に関する映像・新聞」317（79.1%）であった。IES-R 得点と有意な関係があったのは、「戦争を思い出す頻度」「雷や花火の音」「基地や軍用機」「誰かが危険な目に遭うのを目撃」「身内の死亡」「当時の年齢」であった。
- ⑥今回の対象は、PTSD のハイリスク者が 4 割いたにも関わらず、精神的健康状態は良好であった。その理由として、沖縄戦体験者は高いレジリエンスを持ち合わせており、加えて沖縄には“ユイ”という相互扶助の精神があり、地域の共同体との繋がりがあからだと推察される。

〈結論〉

PTSD のハイリスク者が 4 割いたことから、沖縄戦体験者に対する心身のケアや介護を行う際は、沖縄戦によるトラウマや PTSD を意識した関わりが必要だと考える。

【それぞれの立場から】

下地は、元保健師である。當山とは、学生時代の同級生でかつ當山が琉球大学保健学部時代に発足し 30 年間継続した保健婦の自主勉強会である「でいごゼミ」の仲間である。當山が定年退職を目前に、調査をしたいが人も金もないと悩んでいたところ、既に退官していた下地が、「やろう！あんたやりたいんでしょ！」「お金は要らない、ゼミの仲間で手伝うよ」という力強い一声から計画を進めることになった。下地は、当調査の火付け役であり足繁く地域へ出向いた一人である。

高原は、當山が所属する研究室の助手であった。当時第二子を妊娠中であったが、産前・産後も調査が滞りなく進められるよう、事務局および調査員として努力を惜しまず最後のまとめまで関わった人である。

田場は、調査前に當山の研究室に 11 年間所属していた。その期間に「でいごゼミ」に参加し、地域精神保健の事例を通して学ばせてもらった。當山のライフワークである「沖縄戦と精神保健」の調査に声を掛けられ、田場は「是非、参加したい」と参加することになった。調査時には、大学院生（博士課程）と臨床看護師の二足の草鞋を履きながら、自身の研究の合間を縫って調査員およびデータの入力・分析、報告書の作成を行った。

當山は、以前から沖縄戦と精神保健の問題について研究していたことから、地域により戦争体験が異なることや体験者が高齢化して行くのを目の当たりにし、沖縄本島だけでも凡その状況について早急に把握したという考えがあった。本来なら国や県がやるべき仕事だと考えられるが、県庁に話をしても相手にされず、今回の調査に踏み切った。

本調査の調査員には、元「でいごゼミ」のメンバー 6 名、沖縄県立看護大学学部学生・大学院生、及びその他を含む 18 名等、合計 32 名が関わった。

「終戦から 67 年目にみる沖縄戦体験者の精神保健」（研究代表：當山富士子）は社団法人対米請求権事業協会の平成 24 年地域復興助成研究費を受託した。

引用

- 1) 沖縄大百科事典歓呼事務局編（1983）：沖縄大百科事典 上、沖縄タイムス社、沖縄。
- 2) 池宮城秀意編集代表（1981）：日本の空襲一九 沖縄、三省堂、東京。
- 3) 當山富士子編集代表（2013）：終戦から 67 年目にみる沖縄戦体験者の精神保健、沖縄戦トラウマ研究会、沖縄。

集合的な場の「温度感」を記述する

話題提供：伊藤 崇（北海道大学教育学研究院）

上田 信行（同志社女子大学現代社会学部）・

岡部 大介（東京都市大学メディア情報学部）

指定討論：南部美紗子（はこだて未来大学システム情報科学部）

青山 征彦（成城大学社会イノベーション学部）

企画：岡部 大介（東京都市大学メディア情報学部）

郡司菜津美（国士舘大学文学部）

企画趣旨

このシンポジウムでは、場の「熱気」のような、相互行為分析に組み込みにくい対象を取り上げ、その記述可能性を検討する。子どもが集まる教室、多様な人びとが集うワークショップなど、大勢の人びとが1つの場をつくることは日常に溢れている。その時、常にみなが同じ対象や目的を志向しているとは考えにくい。しかし全体として活力を感じさせる場が生まれることがある。このような場のもつ熱気が、相互行為を通していかに浮かびあがるのかを議論したい。

質的心理学研究では、これまでも質感や雰囲気など記述として組み込みにくい対象がとり扱われてきた。本シンポジウムにおいても集合的な場を支えるものとして熱気を取り上げると共に、その質的な記述をめぐる問題を検討する。なお、このシンポジウムは認知科学会教育環境のデザイン分科会の主催で行う。

話題提供

教室内コミュニケーションにおけるムンムンとベタベタ

伊藤 崇（北海道大学大学院 教育学研究院）

体感する温度は教育活動を制約する条件である。

教育活動中に体感温度を左右するのは気候だけではない。学習者の身体自体が直接的・間接的な熱源として機能しうる。活動に伴う体温上昇や発汗は、人々が密集する空間では無視できない程の湿度や温度の上昇を引き起こす。いわゆる「ムンムンした熱気」などの表現はこのような現象を指すものである。

また、学校での子どもたちを観察すると、互いに身体を接触させる行動を大人同士よりも多く行う印象である。例えば、手を繋ぎ、肩を組み、じゃれ合い、抱きつき、髪をとかす。「ベタベタする」と表現したくなるような行動を子どもたちは教室で行っている。

要するに、教室内の子どもたちは、集団が発する熱と湿気に取り囲まれつつ、互いの体表温度を感じられるほど互いの体を近づけて相互作用を行う。このことは教室内のコミュニケーションの条件となっているはずであるが、それを対象とした研究の基盤となる書き起こしに温度や身体的な近接性が反映されることはまずないか、きわめて少ない。Erickson（1982）の言う教室内コミュニケーションの「学習課題構造」の要素が視覚的・聴覚的情報だとすれば、もう1つの「社会的参加構造」には集団的現象としての身体距離や物理的条件としての室内温度が要素として含まれる。後者に注目することにより、教室内コミュニケーションのある種の特徴を明らかにすることが可能であろう。

本発表では、小学校における授業、休み時間、給食や掃除、校外での活動の観察に基づいて、子どもたち同士の接触を含む身体的な距離の取り方や活発な運動に伴う体感温度の変化といった側面を分析し、それが学習活動をいかにして構成するのかという問いについて検討する。

[文献]

Erickson, F. (1982). Classroom discourse as improvisation: Relationships between academic task structure and social participation structure in lessons. In L. C. Wilkinson (Ed.), *Communicating in the classroom*, 153-181. New York, NY: Academic Press.

場の熱気を可視化するツールとしてのリアルタイムドキュメンテーション

上田 信行（同志社女子大学 現代社会学部）・岡部 大介（東京都市大学 メディア情報学部）

この発表では、場の熱気を記録するツールでありながら、同時に、熱気をつくりあげるツールでもあるものとして、映像によるドキュメンテーションを捉える。

第1著者は、大学生・社会人が集う Party of the Future（以下、POF）と名付けられた場を組織している。POFは、何かを学ぶための研修的な要素が強いワークショップやセミナーでもなく、TEDのようなトークイベントとも異なる、新しい「ミートアップ」である。第1著者はこのPOFを1年に1回、およそ30年間継続している(詳しくは、上田・中原, 2013, 図1参照)。POFの特徴は「unParty」であることだ。ある程度のプランやメインテーマ(例えば2018年度のテーマは「the NEXT」)はあるものの、主催者は中身を作り込まず、来場者が自由に楽しく過ごすように設計する。

参加者は当日までに様々なやりとりを重ねることで、いざ集まると「発火直前」のような状況となっている。空間がもっている力と30年間の歴史とが重なって「熱気のレディネス」ができあがり、訪れた瞬間に場に巻き込まれていくイベントである。

POFは2日間にわたって開催される。2日目の閉幕直前に「RTV(リアルタイムビデオ)」が上映される。RTVとは、POFの前日準備の段階から2日目までの記録映像であり、BGMとともに5分程度で(主に学生によって)制作される。POFのライブ記録であるRTVを上映すると、参加者は2日間実施したこと、感じたことをあらためて振り返る機会を得る。それと同時に、2日間のリフレクションに加えて「次に何をするか」という未来志向の視点を意識する。参加者ならば、例えば「明日から何をしよう」といったように、主催者も同様に、次に実施する際にはどう振る舞うかに視点が向く。このように、RTVの上映は2日間の間で最も盛り上がる瞬間のひとつである。RTVは記録映像であるものの、個々人の活動を観察したり評価したりするためのツールとは異なる。2日間のunPartyとしてのPOFを締めくくりつつ、当事者たちの熱気の「ピーク」を構築するものとも言える。以上のような視点から、本発表では「デジタル温度計」のように熱気を可視化しつつ、社会的・道具的に熱気をつくりあげるツールでもあるRTVについて議論していく。

[文献]上田信行×中原淳.(2013).『プレイフル・ラーニング ワークショップの源流と学びの未来』.三省堂.



図1 POFの様子(『プレイフル・ラーニング』より)

相互行為研究における「教養」の復権：歴史・地理・文学・生物編

【企画者】 阿部 廣二（早稲田大学）

【話題提供者】 阿部 廣二（早稲田大学）・高梨克也（京都大学）・
細馬宏通（滋賀県立大学）

【企画趣旨】

90年代以降、質的心理学は、ナラティブや相互行為分析などの新たな方法を採用し、固定化された量的アプローチに対し、新たな人間理解の視座を提供し続けてきた（やまだ, 2007）。したがって、こうした質的心理学において重要であったのは、既存の方法では解明し得なかった問題に対し、挑戦的に新たな方法を提案していく姿勢であったといえる。

しかしながら、現状の質的心理学も、気が付けば方法論化に傾きすぎてはいないだろうか？ つまり、既成の理論に忠実であることを志向することによって、現象を理論に当てはめていき、そうすることで研究者がある種の安心を得ようとしてしまっているという側面はないだろうか？ 我々に求められている立場は、現象と理論の間の距離の大きさを認め、特定の理論や思想的立場だけに固執するのではなく、両者を架橋することのできるさまざまな視点やアイデアを柔軟に導入することではなかったか？ 仮にそうであるならば、現象の性質が変わるのに応じて、方法論についてもまた、継続的な模索・試行錯誤を続けることが求められるのではないのか？

以上のような問題意識に向き合うべく、本シンポジウムでは、「教養」という観点を導入したい。ここでいう「教養」とは、単純に様々な領域の知識を有することを指しているのではない。もちろんそうした知識があることを前提として、対象とする現象の「質」のその都度の性質に応じて、多角的な視点を召喚する態度である。こうした教養の復権こそが、現在の質的心理学に求められているのではないだろうか。

こうした視点に立ち、本シンポジウムでは、相互行為研究を対象として、即興的な議論の中で、さまざまな視点が文脈志向・構築的に召喚されるさまを模式的に提示することを試みたい。相互行為は、世界における特定の時空間において行われる活動である。そのため、目のまえに見えている相互行為場面にその歴史的背景を重ね描きしたり、これを地理的空間の中に位置づけ直したりする想像力が求められる。相互行為が我々の日常的な営みに埋め込まれた生活の一部であることを鑑みるならば、生物としての人間の持つ生態学的条件も決して等閑視できないだろう。教養的な想像力を通して、我々は相互行為という現象の新たな観点を発見できるかもしれない。シンポジウムに参加する話題提供者、フロアの人々の教養の力を借りながら、実験的に新たな観点を創出することを目指す。

また、以上のような教養的な想像力への志向性は、研究を続けていく上で、次第に減少してくるもののように思われる。こうした志向性を持続するには、その持続を促進する環境や動機が重要になってくる。そのためにはどのようなアクティビティが必要になるであろうか。本シンポジウムがその模索のための第一歩になれば幸いである。

【シンポジウムの進め方】

以上の企画趣旨を鑑みて、本シンポジウムでは、通常のシンポジウムに見られるような、特定の領域についての体系だった話題提供を行わない。議論の題材となるようなトピックを話題提供者からに提供してもらい、その題材をもとに、フロアも交えて議論を深めていくことのできる限り時間を使う。フロア

からも議論のトピックを募集する予定である。また、ツールを用いて、会場からの意見を即時的にフィードバックすることも想定している。

【想定されるトピック：相互行為×〇〇】

我々が行う相互行為という現象に新たな視点を一つ付け加えることで、新しい相互行為研究の視点を探る。具体的には、以下のトピックを想定している。

・環境（動物、植物、モノ etc）

相互行為は、具体的な環境のなかで展開される。こうした環境は、これまでの相互行為研究のなかで、相互行為を展開する「資源（Goodwin, 2000）」として措定されてきた。しかし、こうした資源になる前の環境について、これまでの相互行為研究は思考できているだろうか。また、例えば馬の背中に乗るなど、動物との、触覚的・視覚的モダリティを用いた相互行為もありうる。こうした相互行為に対し、質的心理学は何を語ることができるのだろうか。昨今の存在論ブームにおいて、人々の社会生活におけるモノの位置が再考されている。こうした潮流も意識しながら議論を深めていきたい。

・社会（個人史、歴史、経済 etc）

相互行為には、複雑な社会的背景に支えられている。特定の他者との相互行為は、現在の環境によってのみ成立するのではなく、その他者とのこれまでの関係、つまり個人間の歴史によっても規定されている。また、そうした個人史は、より大きな歴史的背景、および経済体系のなかに埋め込まれている。しかしながら、実際の相互行為を検証するにあたり、実際に起こっている現象と、そうした背景との結びつきが検証出来ない場合が少なくない。この点について、どのように考えていくべきなのだろうか。また、こうした背景への視座は、系統発生・個体発生・微視発生に関連を重要視したヴィゴツキアンたちの議論と接続可能なように思われる。こうした理論が持つ相互行為研究への可能性も検討していきたい。

・芸術（文学、音楽、詩）

コミュニケーションに音楽的基盤が存在している可能性について、現在積極的な議論が行われている（レビューとして Trevarthen, 2010）。また、バフチンも芸術作品のなかに見られる対話構造について言及したことで知られているし（Bahktin, 1972）、ヤコブソンも、発話の詩的機能について指摘している（Jacobson, 1973）。こうした指摘を踏まえるならば、相互行為を捉える視座として、ある種の芸術的視点が有効であるといえよう。しかしながら、こうした試みはこれまでさほど多いとは言えない。

また、科学の役割の一つが、世界についてのさまざまな「見方」を提供することであるならば、こうした試みは文学などの芸術活動とも目的を一にする面を持っているはずである。科学と芸術とは特に近代においてはともすれば対立する営みであるとさえも捉えられてきたが、両者にこのように互いに共通する側面あるとするならば、両者の関係をどのように捉えなおしたらよいだろうか。以上の点について、議論していきたい。

もちろん、以上のトピックは、便宜的なものである。本シンポジウムの趣旨から考えるならば、フロアとの交流も通じて即興的に出てくるトピックを積極的に採用するべきだろう。また「なんとなく思いついた」など、研究的なディスカッションでは淘汰されるようなコメントのなかにこそ、教養の種は隠されている。したがって、そうしたコメントも積極的に採用していきたい。

農と子どもと心理学

企画・話題提供 菅野幸恵 石井宏典 木下寛子
話題提供 浜田寿美男

企画趣旨

これまで企画者らは「農と食と心理学」というテーマで、農的な営みから都市的生活へと変貌を遂げてきた生活世界の在り方について議論を続けてきた。人びとが生活の糧を求めて都市へ向かうと、生まれ育った地域で所帯をもつことは少なくなり、住居の郊外化、核家族化が進んだ。自らの衣食住を支える生産活動には直接関わらず、暮らしは顔の見えない誰かの労働に依存するようになった。このような変化は子どもの生活世界にも大きな影響を与えている。職住分離で、子どもたちは、大人たちの働く姿を直接見ることはできなくなったのである。そして子ども自身もかつては暮らしを支えるための周辺的な仕事を担っていた。しかしそれは単なるお手伝いではなく、大人の働く姿を見ながら、徐々に責任の重い仕事を任され、やがて自らが中心的な仕事を担うことにつながっていた。都市的生活とは、子どもを暮らしの場から遠ざける側面をもつものであると考えられる。

近年そのような都市的生活を離れ、地方に移住するケースが増えているという。これまでの移住者の傾向と異なるのは、これから結婚、子育てをするであろう 20代から子育て真っ最中の 40代の若い世代が移住しているということである。「自然豊かな環境で子育てをしてみたい」というはっきりとした欲求をもっている場合も多く、それは子どもを暮らしの場に引き戻そうとする動きとしてみるができるかもしれない。しかし地方に住みさえすれば、農的暮らしが実現するということはなく、そこには大きな隔たりがある。

本シンポジウムでは、農的な暮らしの営みと子どもの育ちのありようをいくつかの視点から考えることを試みたい。

話題提供

私たちのこのいまの生活は「ほんもの」か？（浜田寿美男）

自分自身の子どもの時代を振り返ってみる。もう半世紀以上も昔のことである。それだけの年月を経ると、社会のありようは大きく変化する。もちろん子どもたちの生活世界のありようも、それに伴って変化してきた。だいいち、私は子どもの頃、ふだんは草履をはき、しばしば裸足で駆け回り、ときに泥田に素足で突っ込んで、ヒルに血を吸われながら田植えをしてきた。その私が、いまは裸足で土を踏むことがない。私自身、そうしてこの変化の「歴史」を生きてきたのだと、あらためて思う。

一方で、この社会に生まれたばかりの赤ちゃんを、目の前で見ると。その身なりや回りに配置された道具や装置は、やはり大きく変化しているが、赤ちゃんの生身のはだかは、もちろん、昔もいまも変わらない。おなかがすけば、身体を震わせて泣き、乳を求め、ねむくなれば、静かに父母の胸に抱かれて、ひたすら眠る。人間の赤ちゃんは、何万年も前から同じ姿で地球上に生み出され、変わらぬ「自然」として、その人生をスタートするのだと、ここでもあらためて思う。

子どもは大人の社会のなかに生み出され、大人たちの生活の周辺で育ち、やがて自らもまた、その社会で大人へと育っていく。もし、ここで大人たちが営むその生活を「正統的」と呼ぶとすれば、どの時代であれ、子どもたちの育ちはつねに「正統的周辺参加」として実現してきたはずである。しかし、いまの子どもたちの「育ちのかたち」を見たとき、何かしら「正統的周辺参加」とはおよそかけ離れた

ものであるように見える。それに、私たち大人が営んでいるこの私たちの生活が、はたして「正統的」と言えるような質をもちえているかと言われれば、はたと考え込んでしまう。「正統的」という言葉を「ほんものの」と言い換えたとして、その「ほんもの」とは何かを考えないわけにはいかない。

移動を前提して都市で生きる子ども達と生活世界（木下寛子）

本発表では、福岡市内の都市中心部に近い校区で、移動を前提として生きる子ども達（特に「多文化の子」（外国人児童生徒等））を中心に、その生活世界とそこでの育ちを描くことで、「農的営み」からの近さと隔たりを問う。この校区での生活に立ち会っていると、確かに子ども達は「育てられる者」としての立場に固定され、大人以上に自らの生活を支えることから隔てられているようである。しかし一方で、子ども達は誰かや何かに関わって日々を過ごしており、世界の方から多様な意味を受け取り続けている。そしてその日々（世界）は多様に大きく分節して、互いに全く別の在り方を十全なものとして予示し、子ども達をそれぞれの世界における十全さへと誘い続けていることが窺える。子ども達が様々に展開する場の中に置かれ移動を前提として生きていく時、その育ちとはどのようなものとして見え、様々な場はそれにどのような意味を持つのか。子ども達の日々の記述を通じて考察する。

大人たちの世界にいざなう小さな道具（石井宏典）

伊江島を望む網元の家に 1952 年に生まれた男性の話を紹介したい。小学校に上がる前から祖父のサバニ（木製の舟）に乗せてもらい、子ども用のエーク（櫂）を漕いで遊んだ。祖父と父と一緒に初めて漁に出たのは小学 6 年のときだった。当時は、風を受けた帆とエークを頼りにサバニを操っていたから、「エークを持ったら一人前」と言われた。中学生になって集団での追い込み漁に参加したとき、大人たちの「ウミシンカ（漁師仲間）」に入れてもらえたことが嬉しかった。彼は中学を卒業すると、隣町にあった叔父の店で板前修業を始めた。ムラに残って海や畑を相手に生活を立てるという発想はなかったという。30 歳前にムラに戻ってからは現在まで建設業に従事してきたが、その傍らで、父親が遺した船外機付きボートの船主兼網元として、仲間とともに海に出て追い込み漁を続けてきた。

エークがエンジンに替わるという環境変化をふまえながら、かつて小さな道具によって子どもたちが誘われた大人たちの世界と、そして、これからのことを考えてみたい。

地方に！ターンした夫婦の語りから見る地方での暮らしと子育て（菅野幸恵）

移住した当初、彼らは「自然や山がいっぱいで子どもがそこを駆け回る」というイメージをもっていたが、実際にはそうではなかった。山だと思ったところは畑であり、そこで遊ぶ子どもの姿はない。子どもがいなくなったのは「農業の近代化ぐらいから」ではないかと彼らはいう。かつて「団塊の世代の人たちが子どものときは、小さいときからわりと働き手みたいな位置づけもあったり」したが、今は「やっぱり除草剤を使ったあと、子どもを入れたくない。その人たち自身が怖いものを扱ってるという自覚もある」からではないかという。かつて小学生が朝の日課で入っていた畑は、「子どもが入れない、入りにくい場所になって」しまった。彼らが目の当たりにした地方での生活は、およそ農的な暮らしではなく、「経済のことだけで畑をとらえる傾向が強くなって」おり、「現金がないと暮らせない」人びとの姿であった。

本シンポジウムは、科学研究費補助金（基盤研究 C「地方移住者の子育てネットワーク」代表者：菅野幸恵）の助成を受けています。

「土地の力」と災害復興～被災地のエスノグラフィーを通じて

＜企画・司会＞ 村本邦子（立命館大学大学院人間科学研究科）

人類の歴史とともに災害は世界各地で起き、破壊と創造が繰り返されてきた。人々は喪失や苦難を乗り越え前に進みながら、それらの経験を文化という形で継承する。それぞれの土地が持つ自然・文化・歴史・地政学的特徴から、そこに生きる人々は「土地の力」とでもいうべきものを引き出し、災害を生き抜く力が育まれてきたように感じられる。トラウマやグリーフをうたう昨今の心理主義は、もしかするとそれらの力を奪っている側面があるのではないか。

本シンポジウムでは、臨床心理士として被災地と復興のプロセスを見てきた三人が、各地の「土地の力」について話題提供する。その後、指定討論者のコメントを得て、フロアの皆さんと一緒に、「土地の力」をどのようなものとして概念化していくか、またそれにふさわしい研究方法としてのエスノグラフィーについて議論したい。合わせて、「土地の力」を損なうことなく貢献する臨床心理学的支援の可能性の有無についても検討できたらと考えている。

＜話題提供＞

気仙地域のエスノグラフィーから見る津波被害からの回復と民俗芸能

河野暁子（立命館大学博士課程後期）

報告者は国境なき医師団の臨床心理士として、紛争によるトラウマのサバイバーへ支援を行ってきた。当時は心理支援について疑問を持たないまま海外への派遣を繰り返していた。東日本大震災が発生して、岩手県の気仙地域に移り住み、さまざまな支援を目撃してきたが、翻訳された欧米の心理支援法は地域に適さないのではないかと感じていた。一方、自分自身が地域で暮らすことで、その土地の慣習、伝統、文化など、さまざまな地域の営みが見えていた。その一つが民俗芸能である。気仙地域は民俗芸能の宝庫である。しかも、民俗芸能好きの一部の人が楽しむのではなく、民俗芸能が生活に密着している。これは、歴史上繰り返し津波被害を受けてきた土地で、災害を乗り越えていくために伝統的に培われてきた力なのかもしれないと想像できた。

気仙地域にある大船渡市は、東日本大震災において、震度6弱、11.8mの津波が観測され、その被害は死者340人、行方不明者79人、建物被害5592世帯に上った。大船渡市の各地区では「五年祭」というお祭りを順番に開催している。「五年祭」は、気仙地域でよく見られる4～5年に1回開催されるお祭りで、数ヶ月間の準備を経て、祭り当日は各部落の手踊りや山車が競うように練り歩く。また同じく大船渡市で見られる「鹿踊り」は、群れた鹿が唄って舞う民俗芸能で、盆には供養のために家々を巡行する。「五年祭」も「鹿踊り」も住民は楽しみにしており、また震災後も途切れることなく続いている様子から、地域に根差した民俗芸能の力強さを感じる。気仙地域の民俗芸能のエスノグラフィーを報告し、「土地の持つ力」について考察したい。

台湾八八水害の復興に見られる伝統と文化のカー日光小林コミュニティのエスノグラフィーから
張亦瑾（立命館大学博士課程後期）

2009年、台湾南部を中心に発生した水害は、八八水害と呼ばれる。被害面積は台湾の半分に相当し、被災者は916万人と総人口の40%を占めた。報告者は女性支援の臨床現場でコミュニティ・カウンセリングを実践してきたが、2015年にこの災害から再建された小林村のフィールドワークに参加する機会を得て、地域社会に注目した災害復興のプロセスに関心を持つようになった。災害から九年を経た小

林村の暮らしが今どのように営まれているのか、復興プロセスにおいて何が重要な力となったかを知りたいと、2018年8月に5日間、小林村に入り調査を行った。10月にも再度訪問する。

旧小林村は高齢化した山村で、原住民族である平埔族群のタイボアン族が中心だった。八八水害による大規模な土砂崩れにより、集落の中心部は完全に埋没し、犠牲者は180戸462人であり、生存者は44名だった。その後、都心部に出ていた小林村出身者たちが帰村し、ボランティアと共に自治組織づくりを行った。復興の際、村は三分割された。住民は復興住宅の使用権しか持てなくなり、元農民は生活能力を失い、土地との繋がりを切られたという問題がある一方で、三つのコミュニティはタイボアン族文化を軸として、小林村住民としての絆を維持している。五里埔コミュニティには平埔族群博物館が建てられ、日光小林コミュニティでは関連の社会的起業、小愛小林コミュニティでは伝統蕎麦を重視した取り組みがある。共に「大満舞踊団」を立ち上げ、小林村の生活文化を伝承し、年に一度の小林平埔夜祭を行う。人々は、消滅に瀕した伝統を蘇らせ文化を作るということで復興の力を得ている。今回は日光小林コミュニティで行った調査の報告をし、「土地の力」を検討したい。

山元町復興に見る民話・伝承の力 村本邦子（立命館大学大学院人間科学研究科）

報告者は、東日本大震災を契機に、十年東北に通い被災と復興の証人（witness）になるというプロジェクトを継続してきた。7年にわたる実践とフィールドワークのなかで出会ってきた「土地の力」のなかでも、今回は、とくに民話・伝承に焦点をあて、宮城県亘理郡山元町民話の会の事例について報告する。山元町は、震度6強、最大20mの津波に襲われ、浸水域は町の総面積の65%に及び、人的被害は637人の死者、90人の重軽傷者を出している。

山元町民話の会は、1998年、16名で結成され、宮城民話の会のゆるやかなネットワークとともに、活発に活動を続けていた。現在83歳となる代表の女性は、自宅で津波に遭い、「ノアの箱舟」のように家ごと漂流した体験を持つ。会員の一人は犠牲となり、家族を亡くした人もあった。2011年5月、避難でバラバラになった会員が集まり、津波経験を語り合い、語り継ぎの重要性を再確認した。町民に震災体験の聞き取りを始め、『語りつぐー小さな町を呑みこんだ巨大津波』（山本民話の会、2013、小学館）として刊行されている。

2018年3月、「大震災を乗り越え、民話を語り継ぐ〜つどおう、山元民話の会発足20周年」の催しでは、町民6名が同書に収録された自分の体験を朗読した。過去の津波伝承を含む地元の民話が語られ、屋上倉庫に避難して全員助かった地元の小学校を描いた紙芝居や子ども神楽の上演もあった。そこには、伝承されてきたものの再現だけでなく、大災害を経た新たな文化の創出も見られた。この催しを支える町の人々や遠方より応援に駆けつけた民話関係者との交流に、「こんなふうに、町は苦難を乗り越え、共に復興していくのだ」と思った。山元町の復興過程に照らしながら、苦難に際して人々を支え、人々をつなぎ、町の復興を担った民話・伝承の力について紹介し、検討したい。

<指定討論>伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）

村本氏が提唱する「土地の力」という概念は、一見してきわめて魅力である。それをどう概念として明確にしていけるか、自身もアジア各地でフィールドワークを行ってきた立場からこれを捉え返し、土着の社会心理学という観点から議論を試みる。興味深いフィールドの例として2004年末のインド洋大津波の被災地であるタイ・プーケットにおいて出会った「人々の明るさとユーモア」等について紹介しつつ、話題提供者の興味深い発表内容を結び付ける横串を通す役割を果たしたい。

No	筆頭者名	筆頭者所属	発表題目
1	渡邊 文春	松山大学大学院社会学研究科	自閉症概念と当事者家族の相互作用
2	伊森 裕平	東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース	自閉スペクトラム症傾向が高い大学生の孤独感に対する現象学的アプローチ
3	勝浦 眞仁	桜花学園大学保育学部	家族の固有性を検討する意義—障碍のある子どもを持つ父母との語りから—
4	西村 次郎	岡山理科大学工学部	野外実習（ヨット）における障がい学生への合理的配慮の取組
5	広津 侑実子	東京大学大学院教育学研究科	聴覚障害のある人への心理的支援に関する質的検討
6	饗庭 桃子	立命館大学大学院人間科学研究所 対人援助学領域	ADHDに対する知識が健常者の障害理解に及ぼす影響
7	守屋 彩加	関西大学臨床心理専門職大学院心理科学研究科心理臨床学専攻	自傷行為を行う生徒と関わる担任教師に対する支援のあり方—複線経路・等至性モデリング（TEM）による分析—
8	黒田 一寿	東京工業高等専門学校	障害の社会モデルを学ぶワークショップで語られた内容の質的検討
9	下地 恭子	学校法人三幸学園	3歳～5歳児における「間違い探し課題」とアスペルガー症候群児1症例との検討
10	青木 美和子	札幌国際大学人文学部心理学科	高次脳機能障害者のキャリア形成のプロセス
11	横山 直子	姫路獨逸大学看護学部	脳卒中患者のレジリエンスの様相～急性期から回復期を中心に～
12	村上 満子	沖縄県立看護大学	長期入院精神障害者の地域移行—A氏が自信をもつまで—
13	坂本 蒼	岩手県立大学大学院社会福祉学研究科	甲状腺疾患を抱えて生きるつらさと付き合い方
14	菅生 聖子	立命館大学人間科学研究科	医学的理由により人工妊娠中絶をした母親ことでの「共有」体験についての—考察— —現象学的手法による分析の試み—
15	宮嶋 えりか	京都大学人間・環境学研究科	婦人科疾患を生きたる体験についての探索的研究
16	田村 美子	安田女子大学看護学部	超重症児の生きる力を信じる母親の語り —母親が未来志向に変化するプロセス—
17	清水 めぐみ	野洲市地域包括支援センター	高齢の夫の飲酒問題に取り組み妻達の体験
18	安仁屋 優子	名城大学 人間健康学部	回復期リハビリテーション病棟に勤務する看護師の認知症ケアへの困難感と思考の変化—事例報告—
19	田中 武志	日野病院組合 訪問看護ステーション	緩和ケアに従事する医療福祉専門職が抱く困難感とは？
20	古屋 由美	青山学院大学大学院社会情報学研究科	失語症患者への言語聴覚療法場面における相互行為の分析 —言語聴覚士の技能の視点から—
21	鈴木 啓子	名城大学人間健康学部看護学科	精神科入院患者へのハンドマッサーを用いた看護援助についての熟練看護師の認識
22	鮫島 輝美	京都光華女子大学健康科学部	医療的ケア児の保育ニーズをいかにして満たすか：実践事例の検討
23	齋藤 貴子	日本赤十字秋田看護大学	歩行介助の場面における看護師が言う『無意識に動く』看護実践
24	妹尾 麻美	立命館大学 立命館グローバルイノベーション研究機構	妊娠産後女性の職業キャリア展望
25	島袋 尚美	名城大学人間健康学部	沖縄県中堅保健師のキャリア発達における保健師マインドの形成とその継承
26	仲本 美央	白梅学園大学子ども学部	女性保育者のライフワークバランスに関する研究Ⅰ

27	石盛 真徳	追手門学院大学経営学部	親族による事業承継に関する事例的研究 (2) : 事業承継後 10 年以上経過した後継者のライフストーリーとキャリア選択プロセスの TEM による分析
28	横川 裕美子	名桜大学人間健康学部	名桜大学看護学生の国際看護学Ⅱ海外研修における異文化体験と効果
29	岸 磨貴子	明治大学国際日本学部	関係性を変えるための遊び: 難民の社会参画を促す発達の場のデザイン
30	中坪 太久郎	淑徳大学総合福祉学部	日本人の幸福の「語り方」に関する検討
31	淀川 裕美	東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター	5 歳児の園における食事の難しさに関する分析 - 園児の描画及びインタビューと保育者のインタビューから -
32	三村 千春	淑徳大学大学院総合福祉研究科	食行動の構造に関する質的研究 - ベジタリアンと摂食障害を対象として -
33	牧野 遼作	早稲田大学人間科学学術院	環境を利用した協働的な食事活動の分析
34	福士 元春	武蔵国分寺公園クリニック	「音楽の力」は高齢者にどんな影響を与えるのか? - 日本版 Music & Memory パイロット研究
35	高見 仁志	佛教大学 教育学部 教育学科	音楽科授業における熟練教師の実践知の特徴 - 若手教師育成への展望 -
36	新原 将義	帝京大学高等教育開発センター	ミュージカルは教室に何をもたらすか - 保育園における音楽アウトリーチの事例から
37	九津見 彩子	名桜大学人間健康学部	笑いヨガが高齢者に及ぼす影響 - 笑いヨガに参加した高齢者の所感より -
38	森田 亜矢子	関西大学人間健康学部	ユーモアのしろうと理論
39	新野 冬馬	横滨国立大学大学院国際社会科学府	通勤者にとつての有料座席列車の意味の検討
40	石井 俊行	姫路獨協大学看護学部	会社員が通勤電車内で読書をして過ごす認識の分析
41	村本 邦子	立命館大学大学院人間科学研究科	災福を生き延びる女性の力 ~ 原発事故によって移住を強いられた A さんのライフストーリー研究
42	持田 隆平	早稲田大学 人間総合研究センター	不確かな状況における将来展望のナラティブ: ある原発避難者の事例検討
43	河本 尋子	常葉大学大学院環境防災研究科	被災者の生活復興の過程における心理的変化に関する一考察
44	有澤 晴香	九州大学大学院専門職学位課程人間環境学府実践臨床心理学専攻	避難区域外での行動選択と支援に関する研究 - 福島県の住民の語りから -
45	A LIMA	茨城大学人文社会科学部研究科	復興曲線からみる被災者の心の復興 - 平成 27 年 9 月関東・東北豪雨による常総市での水害を事例にして -
46	陳 俐珊	京都大学大学院人間環境学研究所	巨大災害後のコミュニティの内発的な活性化 ~ NP0 法人ののりだ物語を事例に ~
47	河野 映子	立命館大学大学院博士後期課程	「お茶っこ」のエスノグラフィーから見る地域のレジリエンス - 東日本大震災被災地の慣習の持つ力 -
48	大門 大明	大阪大学大学院人間科学研究科	社会運動としての災害ボランティア: ひっくりかえす・ずらすという 2 つの戦略から
49	中野 祥子	山口大学留学生センター	在日ムスリム留学生のヒジャブの着用をめぐる葛藤と価値の変容過程 - 複線経路・等至性モデル (TEM) を用いた事例分析
50	相磯 友子	植草学園短期大学 福祉学科	外国人集住地域における日本人児童生徒の学校経験
51	朴 香花	名古屋大学文学研究科	中国人の日本観光とナショナル・アイデンティティとの関係について - 「日本旅行記ブログ」に対するナラティブ分析を中心に -
52	近藤 真帆	京都大学大学院 人間・環境学研究科	フランス、ラボルド精神病院の統合失調症患者との「出会い」 - 言語、習慣、日常「以前」の場所で -
53	根本 裕司	淑徳大学大学院総合福祉研究科心理学専攻	性適合手術を完了した FTM 男性を家族にもつ者の受容プロセスに関する一考察

54	町田 奈緒子	京都大学大学院 人間・環境学研究科	性を「気配」から再考する ―トランスジェンダー者との語り合いと対話的自己エスノグラフィをもとに
55	菅野 幸恵	青山学院女子短期大学	“二十歳になるまで”を振り返った親子の語り 子どもの妊娠から成人までの長期縦断研究から見る親子の発達 (1)
56	亀井 美弥子	湘北短期大学保育学科	子の語りに現れる家族外のコミュニティの位置づけ 子どもの妊娠から成人までの長期縦断研究から見る親子の発達 (2)
57	三品 拓人	大阪大学人間科学研究所	家庭内において妻が夫に対して担っている「感覚的活動」
58	曾山 いづみ	奈良女子大学研究生院生活環境学系	子どもは親の離婚をどのように語るのか
59	野原 萌	名城大学人間健康学部看護学科	教員学生協働型健康相談活動「チームガッキー」が学生に及ぼす影響と今後の課題 ―卒業生へのインタビュー調査から―
60	室 若葉	姫路獨協大学看護学部	野宿生活者への継続したボランティア活動の振り返りから ―得られた学びと看護基礎教育に活かしたいこと―
61	菊永 淳	新潟大学医学部保健学科	ターミナルケア実習における看護学生の学習 (成長・変容) のプロセス ～質的統合法 (KJ法) を用いた学生のナラティブに迫る試み～
62	松下 聖子	名城大学人間健康学部	小児看護実習における学生の学び ～質的統合法 (KJ法) による分析～
63	澤田 英三	安田女子大学心理学部	三重県志島の御木曳祭 (式年遷宮) にみられる青年への伝統の継承に関する文化心理学的研究
64	阿部 廣二	早稲田大学人間科学学術院	祭りを反復する：野沢温泉道祖神祭りにおける写真使用実践に着目して
65	楠本 和歌子	神戸山手大学	沖縄県離島における包括的心理支援モデル構築に向けた方法論の検討2
66	仲宗根 健太	琉球大学医学部付属病院	沖縄県北部A地区の高齢者が持つ、入院・入所時のウグワン(御願)に対するニーズについて ～スピリチュアルケアの視点から～
67	森 和子	文京学院大学人間学部	血縁によらない養子養育のプロセス ―思春期のストレスフルイベントへの対処と心理的支援
68	勝見 吉彰	県立広島大学	ステップファミリーで育った大学生の別居実親をめぐる思いについての検討
69	岡野 雄気	首都大学東京大学院 都市環境科学研究科	大学生のやる気はなぜなくなるのか？どのようにしてなくなっていくようにできるのか？―TEAによる検討―
70	田中 文昭	広島大学大学院教育学研究科	「大学生のやる気はなぜなくなるのか？」複線経路等至性モデリング (TEM) による検討 ―マツダ株式会社・立命館大学による共同研究「質的研究アナリスト育成プログラムの開発」による体験型プログラム ラムTEM院生版PBLからの学び―
71	荒木 奈美	札幌大学地域共創学群	「わからなさ」にみちた世界の中で〈教室〉という場の持つ豊かな意味を問い直す ―大学教育での授業実践の中で見えてきたこと―
72	川野 健治	立命館大学総合心理学部	部活を辞めることをめぐるディスコース分析
73	駒崎 俊剛	東京医療保健大学	学生のグループワークに見られる「話さない」参加のあり方
74	山本 展明	京都大学大学院人間・環境学研究科	対人関係に課題を抱えていたある男の子の「わからなさ」についての一考察
75	大山 星馬	青山学院大学社会情報学研究科	ソーシャルメディアで形成されるコミュニティと他者像
76	藤井 真樹	名古屋学芸大学	「他者理解」の多層性について

77	小島 康次	札幌保健医療大学保健医療学部	ピアジェの発生的認識論のスピノザ的解体 (6) — ベルクソンの「直観」と発生的認識論 —
78	都築 幸恵	成城大学社会イノベーション学部	試合時の没入経験に熟達が及ぼす影響 ～ピリヤーおよびゴルフのプレイヤーへのインタビュから～
79	土元 哲平	立命館大学大学院文学研究科	オートエスノグラフィにおける顕名性と倫理的問題
80	鈴木 聡志	東京農業大学 教職・学術情報課程	ロッキード事件小佐野証言に見られる行為主体性
81	杉浦 淳吉	慶應義塾大学文学部	食品安全のリスクコミュニケーションにおける参加型手法の開発と実践
82	新里 美智子	名城大学人間健康学部	自死遺族会を立ち上げた遺族の体験と求める支援 —遺族の自助グループ運営の支援に向けたアクションリサーチ—
83	藤森 優美香	九州大学大学院人間環境学府	心理臨床家のファンタジーの「読み」：絵本を読んで得られた語りより
84	保坂 裕子	兵庫県立大学環境人間学部	『人生すごろく』を介した語りの生成とアイデンティティ実践：女子高校生の語りへのスモール・ストーリー・アプローチ
85	林 幸子	九州大学大学院統合新領域学府	色彩表現ワークショップの場は何をもたらし得るのか —多声的な自己理解の生成の観点から—
86	田代 結芽	九州大学大学院人間環境学府	心理臨床場面における「会う」ことの治療的意味：面接後の余韻に着目した探索的研究
87	松本 光太郎	茨城大学人文社会科学部	身体のかち合いとしての爪切り行為
88	小池 星多	東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科	ソーシャルロボットのエージェンシー
89	竹内 一真	多摩大学グローバルスタディーズ学部	質的研究者の語りから捉える専門性の熟達と継承：やまだようこ氏のライフストーリーにおける生成継承性
90	上原 智香子	明治大学大学院情報コミュニケーション研究科	「敏感さ」とは何か？ — 自覚と無自覚のあいだにある思考態度
91	伊藤 真平	東洋英和女学院大学大学院人間科学研究所	就職活動後の社会人が描く樹木画と青年期イニエーション体験との関連
92	岸本 健太	関西学院大学言語コミュニケーション文化研究科	「ありがたい」と「すみません」は選択的な表現か - 会話分析の手法を用いた感謝表現の分析 -
93	佐々木 玲仁	九州大学大学院人間環境学研究所	五つの軸による心理学研究法空間の描出
94	酒井 麻紀子	名古屋大学大学院教育発達科学研究科	職場において援助を求めない教師に対する管理職のアプローチに関する検討
95	黒田 真由美	京都大学大学院教育学研究科	Round Study における移動の意味とは？
96	佐野 香織	早稲田大学日本語教育研究センター	街のことばに関わることばの教育の可能性 —言語景観を活用した日本語授業事例から
97	文野 洋	文京学院大学人間学部	マーケティングにおけるフォーカス・グループ・インタビューの相互行為
98	荒川 歩	武蔵野美術大学造形学部	質的研究の極北 / 極南：質的研究ざりざりアウトの研究を覗きこって考える
99	上條 菜美子	東京成徳大学応用心理学部臨床心理学科	ストレスフルな体験における意味づけのネットワーク的解釈の検討
100	山本 敦	早稲田大学人間科学研究科	帰り道はなぜ短い？ —往路と復路での環境探索行為の質的变化への着目—
101	得津 慎子	関西福祉科学大学社会福祉学部	「組織開発」を用いた社会福祉組織変革プロジェクトにおける協働者である実践主体の中間管理職の聞き取り調査
102	井上 清美	姫路獨協大学看護学部	「会議」における協働の検討 —調整とつながり—
103	平野 真理	東京家政大学文学部	写真に表現されたレジリエンスの主観性と文脈性 —回復の統制可能性を読み取る—
104	中坪 史典	広島大学大学院教育学研究科	写真を媒介とした保育者のマルチボーカル・エスノグラフィの開発

105	FU TULEGEN	茨城大学人文社会科学研究所	保育士は未就学児のリーダーシップをどう捉えるか
106	境 愛一郎	宮城学院女子大学教育学部	自然保育への移行に伴う保育者の意識変容と葛藤：固定遊具から森へ
107	鐘ヶ江 織代	青山学院大学大学院社会情報学研究科ヒューマンイノベーションコース	英語学習における演劇創作過程の事例研究（仮） ～学習者アイデンティティのズレに着目して～
108	南部 美砂子	公立はこだて未来大学情報アーキテクチャ学科	参加型デザインにおける越境的対話の可能性：アイデア高度化セッションの分析から
109	坂倉 真衣	宮崎国際大学教育学部児童教育学科	博物館での「出会い（encountering）」は、日常生活の中でどのように形を変えていくか ー来館者の博物館体験を理解する試みー
110	町田 佳世子	札幌市立大学デザイン学部	伝えたいことを伝えるために専門家がすること
111	香曾我部 琢	宮城教育大学教育学部	表現が生まれる一瞬間

No001 自閉症概念と当事者家族の相互作用

渡邊文春（松山大学大学院社会学研究科）

当初の自閉症概念は、知的障がいを伴う言葉によるコミュニケーションが成立しづらいカナータイプが主流だった。それからローナ・ウイング（Wing 1996=1998）が、自閉症の定義を改め、知的障がいを伴うカナー・タイプと、知的障がいを伴わないアスペルガー症候群を幅広く含む、連続体（スペクトラム）として説明した。この発表の目的は、自閉症児を持つ家族、とりわけここではその母親 M さんへのインタビュー調査をもとに、母親 M さんがアスペルガー症候群の自閉症当事者の書いた自伝を読むことを通して、カナータイプの我が子が経験した感覚や行為を、どのように意味付けているのかということを明らかにすることである。インタビュー調査で母親 M さんが語っていたのは、アスペルガー症候群の自閉症当事者が経験した感覚や行為を伝えるという実践が、カナータイプの自閉症当事者家族が理解し得なかった我が子の経験した感覚や行為について、当事者視点の意味付けを可能にしているという事例だった。当事者家族が当事者視点を獲得することによって、専門家視点によって構築されていた自閉症概念と、相互作用する可能性が開けてくるのではないだろうか。

No002 自閉スペクトラム症傾向が高い大学生の孤独感に対する現象学的アプローチ

伊森裕平（東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース）

近年、欧米を中心に孤独感が重大な社会問題となっている。ホルト＝ランスタッドら（2010）のメタ分析によれば、社会的関係の欠如による死亡リスクは肥満よりも高い。また、知的能力障害を伴わない自閉スペクトラム症（以下、ASD）者の心理的特徴として、平均的な知能レベルが保持されているからこそ、自己と周囲の違いを客観的に認識し、孤独感を抱きやすいという傾向が指摘されている。その一方で、いくつかの先行研究によれば、ASD 者と非 ASD 者の孤独感体験について、両者に何らかの性質的な差異が存在している可能性も示唆されている。しかし、どのような差異が存在するのかは、国内外でも殆ど検討されていない。本研究では、ASD 者および ASD 傾向が高い人々の孤独感について、それらの具体的な意味をインタビュー調査と現象学的アプローチによって検討し、より一般的な人々が体験している孤独感と比較した際の独自性を明らかにする。

No003 家族の固有性を検討する意義—障害のある子どもを持つ父母との語りから—

勝浦真仁（桜花学園大学保育学部）

障害のある子どもを持つ保護者に関する研究はこれまで様々に積み重ねきた。そこでは、子どもの障害を保護者が受容することを求める傾向が強くある。ただ受容の一言では済まされない葛藤や苦悩があることもよく知られている。保育の場においては、園での我が子の生活を保護者がどのように受け止めているのかは、重要な要素の1つであると考えられる。しかし、それを具体的に明らかにした先行研究は数少なく、家族の固有性にどこまで迫ってきたのかは疑問が残る。障害のある我が子が保育者や周りの子どもたちとどのように生活し、またその姿をどのように受け止めていたかが、家族の生活に様々に影響を与えることは想像に難くない。そこで本研究では、ある自閉症の年長幼児を持つ父母に、保育の場でのエピソードを示し、そのエピソードについて感じたことやその思いをインタビューした。その語りを基に、両親の内面に生じた変容について検討した。

No004 野外実習（ヨット）における障がい学生への合理的配慮の取組
西村次郎（岡山理科大学工学部）

平成28年に施行された、所謂、「障がい者差別解消法」により、不当な差別的取扱いの禁止、合理的配慮の提供が、国立大学ではそれぞれ義務、私立大学では義務、努力義務となっている。合理的配慮とは過度の負担を課さないものであり、一人ひとりの障がい学生の状態や特性に応じた建設的対話を通しての合意形成が重要となる。特に野外実習においては、野外における様々な物理的障壁（バリアー）やそれに伴う心の障壁という課題の解決が問われる。障がい学生（肢体不自由、視覚、聴覚、その他）が野外実習の受講を申し出た場合、身体に障がいがあることを理由に拒むことは不当な差別的取扱いに該当し、直接的差別を意味する。本発表では、野外実習（ヨット）を受講した障がい（肢体不自由）のある学生や家庭、受講学生、科目担当者、大学による合理的配慮の取組と障壁の課題解決について考察する。

No005 聴覚障害のある人への心理的支援に関する質的検討
広津侑実子（東京大学大学院教育学研究科）

聴覚障害のある人への臨床心理学的支援は国内ではまだあまり浸透していない。例えば、ほとんどのカウンセリング機関に手話を使えるカウンセラーはいないし、2014年時点では全国で20校程度の特別支援学校（聴覚障害）（ろう学校）にしか心理的スタッフは配置されていない（河崎、2015）。今回、ろう学校にて支援を行なっている者たちに対して、発表者が聴き手となりインタビューを行なった。なお、発表者自身もろう学校での心理的支援に従事している。本発表では、聴覚障害のある人の心理的支援にはどのような特徴や工夫、スキルがあるのかといった点について考えていきたい。その際に、インタビュー中で語り手が表出した内容面だけではなく、語り手と聴き手との間で語りが深まる点や阻害される点など語り方にも着目しながら質的に検討していく予定である。

No006 ADHDに対する知識が健常者の障害理解に及ぼす影響
饗庭桃子（立命館大学大学院人間科学研究科 対人援助学領域）

発達障害に関する社会的認知は他の障害と比べて低く、特性には個人差があり、現状では周囲からの理解を得るのは難しい。本研究では特にADHDに焦点を当てて研究しており。ADHDの場合、情報処理の偏りや不注意による困難があるが、配慮によって困難さを軽減させることが可能である。知識の有無が発達障害者観に与える影響は先行研究から明らかになっており、配慮や援助を促進するためには、ADHDに対する知識を持つことが不可欠である。本研究では、当事者の語りに基づく情報と科学に基づく専門的な情報を提示された場合にADHDに対して抱くイメージを調査した。その結果、当事者の語りに基づくナラティブ型の情報を提示された場合ADHD当事者に対して理解が深まり、援助授与の意志を生起させることがわかった。この研究の結果により障害理解が促進されることが期待される。

No007 自傷行為を行う生徒と関わる担任教師に対する支援のあり方 ―複線径路・等至性モデリング(TEM)による分析―

守屋彩加（関西大学臨床心理専門職大学院心理学研究科心理臨床学専攻）、サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）、川本静香（山梨大学院総合研究部教育学域）

本研究は、自傷をする生徒に対する担任教師の具体的な援助過程の記述と、担任教師への支援のあり方の検討を目的とした。半構造化面接法によって得た研究協力者2名のデータを複線径路等至性モデリング(TEM)によって分析し可視化することで、対象生徒への対応過程の中で生じている社会的諸力について見出した。さらに、担任教師が抱える困難に対する支援として、他の教職員の自傷行為への意識変容が必須であることが示された。また、本事例の対応過程が、従来望ましいとされている対応モデルと相違する点が多数あったことから、生徒の自傷行為初期以降の過程を含む対応モデルを構築する必要性が示唆された。倫理的配慮については、本研究の目的と方法、研究への参加は自由であり途中辞退可能であること、身体的な危険が伴わないこと、個人情報保護について文書と口頭で説明を行い、参加者から研究参加の同意を得た上で研究を行った。

No008 障害の社会モデルを学ぶワークショップで語られた内容の質的検討

黒田一寿（東京工業高等専門学校）

高等教育機関に学ぶ障害学生は年々増えており、2017年度の日本学生支援機構の調査によれば、大学生の0.86%が障害学生である。それでも欧米の大学と比較して決して多いとは言えない。障害学生が、キャンパスに多様性をもたらす存在として活躍する環境が整えられて欲しい。多様性(ダイバーシティ)と対になるのが受容性(インクルージョン)である。筆者は、高専に学ぶ学生が、障害の社会モデルを学ぶワークショップ形式の授業を試みた。障害平等研修の一部を参考にプログラムを構成したもので、3つの質問に回答し、グループでディスカッションする。参加者の記述を分析したところ、医学モデル寄りであった障害の捉え方が、徐々に社会モデル寄りに変化することが確認できた(黒田、日本高専学会、2018)。本研究では、録音したグループディスカッションの会話の内容にまで踏み込み、障害をテーマに何が話し合われたかを明らかにする。

No009 3歳～5歳児における「間違い探し課題」とアスペルガー症候群児1症例との検討

下地恭子（学校法人三幸学園）

本研究は、3歳～5歳児を対象にし、「間違い探し課題」と、「表情認知・場面理解課題」を実施し、①、「間違い探し課題」において年代別に何か違いがみられるのか否か。②、①で得られた結果から、「表情認知・場面理解課題」と照らし合わせて見て、何か関連があるのか否か。③自閉症スペクトラム障がい1つであるアスペルガー症候群児の1症例と比較してみても何か特徴的な事がみられるのか否かの基礎的な研究である。その結果より、①では、3歳児群において「間違い探し課題」を中央部から探していることがわかった。②の結果では、「間違い探し」を中央部から探している3歳～4歳児は、「場面理解課題」が答えられないという結果であった。③では、アスペルガー症候群児と、3歳児群の結果が似たような結果であった。

No010 高次脳機能障害者のキャリア形成のプロセス

青木美和子（札幌国際大学人文学部心理学科）

高次脳機能障害者は、記憶などの認知障害のほか、障害受容の難しさ、対人関係に問題があり、たとえ就労に結びついていてもそれを継続することが困難であるとされてきた。しかしながら、福祉的就労の場におけるフィールドワークにおいて、当初は就労を継続するのが困難であった高次脳機能障害者であっても実践に主体的に参加することによって長期にわたり安定して就労継続している事例に出会った。他の異なる障害を持つ人や支援者と共に生成した実践を通して、自分たちが行なう活動の意味や自分たちの関係性を創り直し、共に主体として働く場を共同構築している様子を観察することができた。本発表では、2003年より福祉的就労の場において行なってきたフィールドデータを分析すると共に、長期にわたり就労継続した高次脳機能障害者及び、支援者に対しインタビュー調査を行ない、力動的な相互作用の中で生成されるキャリア形成のプロセスについて報告する。

No011 脳卒中患者のレジリエンスの様相～急性期から回復期を中心に～

横山直子（姫路獨協大学看護学部）、西尾大祐（飯能靖和病院）、金子昌子（獨協医科大学看護学部）

脳卒中を発症した者は、発症から麻痺など身体的にも認知面においても障がいを生じる。変化した身体と環境への適応を求められるものの、それらへの適応が減退していると考えられる。本研究の目的は、何らかの機能障害を持ちつつ生活の再構築や社会復帰をしている脳卒中患者を対象とし、レジリエンスの内容を明らかにすることある。半構成面接で行ったインタビューデータの内容は質的帰納的に分析し、レジリエンスの内容を抽出した。D 医科大学倫理審査委員会の承認を得、対象者の匿名性とデータの機密性を厳守した。結果、急性期では意識障害がある中でも、周辺環境から支えとなるものを意識していた。回復によって状況が把握できると、できないこととできることの間で揺らぎがあっても、家族や医療スタッフなどを支えとしレジリエンスを強めていく傾向が伺えた。

No012 長期入院精神障害者の地域移行－A氏が自信をもつまで－

村上満子（沖縄県立看護大学）

本研究の目的は、在院期間41年の長期入院者とその家族の退院意向と治療関係者のかかわりを解明し、それにより援助のあり方を提示する。方法はカルテ等の記録物と、本人と家族、担当看護師へのインタビューデータを質的に分析した。所属機関の倫理審査委員会での承認と、対象者への口頭と文書での説明後に同意を得て実施した。A氏は20歳で統合失調症を発病。母の死後は姉がキーパーソンとなる。本人の方法では退院が進まないため病院の方法でやってほしいと伝えてA氏はしぶしぶ了承する。姉は施設への退院を了承する。本人は「自信がついてから」と消極的で、「人命救助」をすれば「自信がつく」との強迫的な思い込みがある。矛盾を突くと修正できる行為もあり「自信がなくても実力がなくても退院できる」と支持的看護に徹した。デイケア体験での仲間との付き合い、働く意欲や意志決定の機会を大事にすることで、A氏の表情や言動が変化してきた。

No013 **甲状腺疾患を抱えて生きるつらさと付き合い方**
坂本蒼（岩手県立大学大学院社会福祉学研究科）

本研究では甲状腺疾患を抱えて生きるつらさと付き合い方を明らかにすることで、甲状腺疾患患者に有効な支援を考える材料の1つにすることを狙いとした。調査は甲状腺疾患患者に対し、インタビュー調査（一部は質問紙も使用）を実施した。語りはKJ法を参考に分析し、それぞれの分析から共通点を探し出し、カテゴリー化を行った。倫理的な配慮としては、プライバシーの保護、調査への参加と途中辞退の自由を説明し、体調面で参加が気になる場合は医師の許可を得ることを約束していただいた。分析の結果、甲状腺疾患患者は自分の体調を医師や周囲の人に理解してもらえないだけでなく、自身でも十分に把握できず、心理的に折り合いがつかない辛さをかかえていることが分かった。また、体調の悪さは原因が分からないことが多く、無理に原因を考えると自分を責めてしまうので、あまり突き詰めて考えずに起きている症状を緩和することに努めていることが分かった。

No014 **医学的理由により人工妊娠中絶をした母親にとっての「共有」体験についての一考察—現象学的手法による分析の試み**
管生聖子（立命館大学人間科学研究科）

出生前診断を受け人工妊娠中絶を選択する際にカウンセリングは必須と言われているが、心理的支援を提供するためには、当事者にとって人工妊娠中絶体験がどのようなものであるのか知る必要がある。本研究では、昨年度発表の継続としてさらにもう一件妊娠中期に人工妊娠中絶をした母親の語りを現象学的手法により分析した。十分な倫理的配慮の元実施した本調査では、体験の「プロセスを自分以外の人と共有する」こと、子どもが「ちゃんと生きていたことを共有する」ことが母親にとって大切な支えとなったことが明らかとなった。自身の体験を安全な場で語りなおすことは、自身に起こったこと再構築し人生に位置付けてゆく作業であるが、本研究では、自分が「してもらえたこと」と自分が我が子に「してあげられたこと」の重なりが「すごい悲しいけど、すごい幸せ」をもたらす可能性を持っていると確認された。

No015 **婦人科疾患を生きる体験についての探索的研究**
宮嶋えりか（京都大学人間・環境学研究科）

婦人科疾患の中でも子宮内膜症や卵巣嚢腫を抱えて生きるという体験を探索的に検討するものである。これらの病は、ガンなどの病に比して軽度と扱われる傾向があるが、これはあくまで本人の周囲の支えるものや医療関係者にとっての負担が軽度ということであり、決して当事者が人生を生きるにあたり軽度の病とは言えない。結婚や出産など、女性のライフステージが大きく変化する年代において、こうした病を抱えることは、当事者にとってどのような体験であるかに接近するとともに、妊孕性の温存や女性性といった側面のみならず、1人の人として、どのような課題を抱え、それをどう生きているかに焦点を当てる。

No016 **超重症児の生きる力を信じる母親の語り ―母親が未来志向に変化するプロセス―**

田村美子（安田女子大学看護学部）、木下八重子（安田女子大学看護学部）、沖西紀代子（広島県立大学保健福祉学部）、藤堂美由紀（安田女子大学看護学部）、久木原博子（福岡大学医学部）、山下純子（安田女子大学大学院文学研究科）、フナツモリヒサ（安田女子大学心理学部）

本研究は、在宅超重症児の母親が困難を乗り越えながら未来志向に変化するプロセスを明らかにすることを目的とした。超重症児の母親4名の半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。安田女子大学倫理審査委員会の承認を得た後、対象者に個人情報保護について文書および口頭で説明し同意を得た。その結果、「受け入れがたいわが子の姿」「大変なのは毎日」「行政の壁」「受け入れられないわが子の姿」「当たり前前の生活ができないわが子」「感覚的にわかるわが子の思い」「社会からの孤立」「この子の子育ては一度きり」「分かり合える仲間の存在」「子どもによって世界が広がる」「教えられるわが子の成長」が生成された。超重症児の母親は、子どものありのままの姿を受け入れ、周りからのサポートにより子どもと母親の世界を広げていた。社会から受け入れられることにより、子どもの将来と母親自身の将来を見据えていた。

No017 **高齢の夫の飲酒問題に取り組む妻達の体験**

清水めぐみ（野洲市地域包括支援センター）、稲垣絹代（名桜大学総合研究所）、原田小夜（梅花女子大学看護保健学部）

本研究は高齢の夫の飲酒問題に取り組む妻達の飲酒や飲酒問題に対する考え方を明らかにすることを目的とした。断酒会に家族として参加している妻5名にグループインタビューを行い、質的統合法(KJ法)を用いて分析した。倫理的配慮として参加の自由意思、プライバシーの尊重などについて説明し、協力を求めた。研究協力者は【断酒を続ける夫とともに断酒会に通い、断酒会の力を地域に活かしたいと思う妻たちの体験】を語った。【飲酒者に対する家族の気持ち】は様々であるが、断酒には【家族の力・会社の力】、【専門病院の力】が必要であり、再飲酒後の断酒につながる家族の断酒会参加と本人への働きかけとしての【断酒に必要な断酒会の力】があり、【適正飲酒のために専門外の医師が果たす役割】として、アルコール依存症の予防、適正飲酒についての効果的な指導、【地域に広める断酒会の力】として断酒会を多くの人に理解してほしいという家族の願いがあった。

No018 **回復期リハビリテーション病棟に勤務する看護師の認知症ケアへの困難感と思考の変化―事例報告―**
安仁屋優子（名桜大学 人間健康学部）、稲垣絹代（名桜大学 総合研究所）

回復期リハビリテーション病棟(以下、回復期病棟)では自宅復帰を目指した機能回復と、リハビリが主であり多職種協働で患者を支援している。しかし専門的ケアが必要である認知症高齢者の対応に困難感を示すスタッフは多い。本研究では回復期で勤務する看護師を対象に認知症ケアへの困難感と想いについてインタビューを行い質的統合法(KJ法)にて分析した。本研究は所属する大学の研究倫理審査委員会で承認を得た。分析の結果【急性期病棟での認知症ケア体験】【回復期病棟での認知症ケア体験】【はじめに抱いていた回復期病棟への想い】【認知症高齢者への機能回復アプローチ】【回復期病棟における自宅復帰支援】【目標志向型思考への変化】の6つが抽出された。看護師の抱いていた困難感は実践の中で経験する事で変化していき、認知症高齢者のもてる力を発揮することができることを実感し、認知症ケアの困難感が認知症高齢者の目標志向型思考へと変化していた。

No019 緩和ケアに従事する医療福祉専門職が抱く困難感とは？

田中武志（日野病院組合 訪問看護ステーション）、井上和興（鳥取大学医学部地域医療学講座）

【目的】緩和ケアに従事する医療福祉専門職には、様々な困難感が生じると報告されており、その事により業務遂行困難となる場合も散見される。そこで、緩和ケアに従事する医療福祉専門職が抱く困難感がどのようなものか抽出する事を目的に本研究を行ったので報告する。【対象】緩和ケアに従事する医療福祉専門職 13 名

【方法】1 回目：7 名、2 回目：6 名にグループ分けし、テーマを「緩和ケアを行う現場で感じる困難感とは？」とし、リフレクティング・チーム形式で対話を促した。対話の音声データを収集し、Steps for coding and theorization(SCAT)を用いて解析した。【結果】抽出された困難感は、【今までの経験を思い起こすことで生じる後悔】【「現在」から前に進むことができないもどかしさ】【患者・専門職の将来を想起して生まれる迷い】等であった。【結語】緩和ケアに関わる医療福祉専門職は、後悔・もどかしさ・迷いを感じながら緩和ケアに従事している事が示唆された。

No020 失語症患者への言語聴覚療法場面における相互行為の分析 -言語聴覚士の技能の視点から-

古屋由美（青山学院大学大学院社会情報学研究科）

言語聴覚士は言語障害に対して訓練を行う専門職種である。言語聴覚療法領域におけるこれまでの研究は、言語症状を対象とした発現機序論等が主であり言語聴覚士の臨床技能については十分検討されていない。そこで本研究では、失語症患者及びその家族から研究についての同意を得た上で、言語聴覚療法場面を対象とした相互行為分析を行い、言語聴覚士の臨床技能について明らかにすることを試みた。その結果、言語聴覚士は患者が発話に困窮した際、患者の表情やしぐさといった非言語的行為に対しても応答を形成し、音声提示による援助のタイミングを調整していることが確認された。これらの結果は、臨床実践の場で使用される「患者の発話を待つ」という表現が単に「待つ」行為ではないことを示している。すなわち「患者の発話を待つ」場合でも、言語聴覚士はマルチモーダルで微細な行為連鎖を通して患者との相互行為を構築しており、これが臨床技能の重要な側面の一つである可能性が示唆された。

No021 精神科入院患者へのハンドマッサージを用いた看護援助についての熟練看護師の認識

鈴木啓子（名桜大学人間健康学部看護学科）、鬼頭和子（名桜大学人間健康学部）

本研究は、精神科入院患者を対象に、ハンドマッサージ(以下HM)を用いた看護援助に関する精神科熟練看護師の認識を明らかにし、これにより精神科病棟における看護実践技術としてHM活用のための課題を検討することを目的とする。研究協力の同意の得られた精神科熟練看護師 5 名を対象に半構造的面接調査を実施し、質的記述的に分析した。研究に先立ち、研究者所属先での研究計画書についての倫理審査を受け承認を得てから研究に着手した。HMの効果や活用については、いずれも前向きにとらえ、協力者自身も介入困難な事例で、ふれるケアを実施することがあると語られた。熟練看護師としての必要なケアの見立ての中で、HMはあくまでもかかわる一つの手段とみなされていた。患者を変える意図をもたないHMがありえるのか検討したい。

No022 医療的ケア児の保育ニーズをいかにして満たすか：実践事例の検討

鮫島輝美（京都光華女子大学健康科学部）、東村知子（京都教育大学教育部）

末永美紀子（NPO 法人こどもコミュニティケア）

医療技術の進歩により、日常的に医療的生活援助が必要な「医療的ケア児」が急増しているが、医療的ケアの担い手が少ないために地域に行き場がなく、特に未就学児は受け入れ先がほとんどないのが現状である。そこで本研究では、医療的ケア児や障害児と健常児との「共生保育」を実践している「こどもコミュニティケア」のフィールド研究にもとづき、この実践が、いかにして医療的ケア児の保育を可能にしているのかを明らかにすることを目的とする。今回は、「こどもコミュニティケア」の創設者のインタビューから、活動を開始した2003年から現在に至るまでのエスノグラフィーを描く。本研究では、医療・保育を社会的共通資本における「制度資本」と捉え、施設の歴史だけでなく、創設者が発想に至ったきっかけや神戸市の方針や制度の変化とその関係をも描いていく。ここから社会的共通資本としての「公的子育て支援」のあり方について考察する。

No023 歩行介助の場面における看護師が言う『無意識に動く』看護実践

齋藤貴子（日本赤十字秋田看護大学）

運動器看護領域における看護実践について現象学的看護研究をもとに記述することを試みている。看護実践の場面に同行し、フィールドワークを行った。整形外科では患者の回復に合わせて移動を介助することが頻繁に行われる。〈Eさんは廊下へ出てくると高階さん（仮名）の右後ろに立ち、歩行器のU字の部分をつかむというより触るようにして常に触れつつ高階さんについていった。〉場面について、Eさんは後に「さっきの歩行器のやつも、こっただけ（歩行器の右側だけ）支えてあげれば、まっすぐなるからといちおう考えて。」と考えたうえでの援助であったことを示しつつも、「リアルタイムで、『今意識で動いてました？』って言われたら『無意識に動いてました。』ってなっちゃいますけど。」と語った。「いちおう考えて」いながら、それを「無意識に動いてました」と表現される看護実践について検討する。

No024 妊娠期女性の職業キャリア展望

妹尾麻美（立命館大学 立命館グローバルイノベーション研究機構）、三品拓人（大阪大学大学院）、安田裕子（立命館大学総合心理学部）

本研究は、妊娠期女性に対して実施した聞き取り調査にもとづき、彼女たちの職業キャリア展望を明らかにするものである。女性の就業行動は、夫の就業や家事・育児・介護責任などに影響される。子を持ちながら就労を継続できる女性は、恵まれた状況にある数少ない者だともいわれている（西村2014）。では、妊娠中の女性は、夫や家族との関係のもと、どのような就業選択を行うのだろうか。本研究では、妊娠中の女性10名に調査を実施した。データから、職業キャリア継続を希望する者、家庭生活を優先する者、状況依存的に子育てを引き受けざるを得ない者の3類型が見いだせることがわかった。一部に、職業キャリアを自ら選択できない存在が浮かびあがる。これらの結果を踏まえて、女性のライフコースについて議論を展開する。なお、立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会の承認の元、研究を実施している。

No025 沖縄県中堅保健師のキャリア発達における保健師マインドの形成とその継承

島袋尚美（名桜大学人間健康学部）、稲垣絹代（名桜大学人間健康学部）

目的：本研究は、沖縄県の中堅保健師が新人期から職業を継続する中で、どのようにキャリア発達し、中堅期にどのような保健師マインドをもっているのかを明らかにする。また、仕事と私生活の経験から自己成長の過程を振り返り、中堅保健師のキャリア促進の在り方を検討する。

方法：沖縄県行政機関の中堅保健師 11 名を対象に半構造化面接を行い、データを質的統合法(KJ 法)を用いて個別分析と総合分析を行った。

結果：11 名のデータの総合分析から【先輩の想いを引き継ぐキャリア初期の教育経験】【深い住民支援の経験から形成された保健師マインド】【公私の困難を乗り越え自己成長を認知することで得た「やりがい」の継承】【自分らしい保健師キャリアの探求】【専門職の自信とチャレンジ精神を育む現任教育】の 6 つのシンボルマークが得られ、新人期からの成長過程の構造が明らかにでき、中堅保健師のキャリア発達を促進する現任教育についての示唆が得られた。

No026 女性保育者のライフワークバランスに関する研究 I

仲本美央（白梅学園大学子ども学部）、中坪太久郎（淑徳大学）、芹澤高斉（淑徳大学）

我が国において子育てをめぐる問題は社会的関心となっており、さまざまな視点からの取り組みが始まっている。特に、保育士や幼稚園教諭の待遇については改善の可能性が示されているが、女性が活躍することが多い職場領域であるからこそ、待遇だけでなく、働く女性の人生全体への理解と、それに基づく適切な施策が必要であると考え。本研究では、女性の保育士が自分自身の人生において仕事をどのように位置づけているのか、研究趣旨に同意した 3 名の保育士の自由記述によるデータから見出すことを目的とした。データを KJ 法で内容分析した結果から、保育士という職業に就いていることは、将来自らが子育てをする上で役に立つことであるが、その一方、勤務体制上自らの子育てにおいては子どもと接する時間の短いなどの問題があること、保育の質に対する社会的評価が低いこと、さまざまな取り組みが進み、待遇面が改善されつつあるものの他の職業と比較して給与が低いことなどが明らかになった。

No027 親族による事業承継に関する事例的研究（2）：事業承継後 10 年以上経過した後継者のライフストーリーとキャリア選択プロセスの TEM による分析

石盛真徳（追手門学院大学経営学部）、朴修賢（追手門学院大学経営学部）、田淵正信（追手門学院大学ベンチャービジネス研究所）

近年、中小企業経営者の高齢化が進むに伴い、事業承継問題が注目されるようになってきている。事業承継には、主として親族承継、内部昇進、外部登用があるが、中小企業でもっとも一般的とされるのが親族内事業承継である。本研究では、親族内事業承継を行って 10 年以上経過した後継者 4 名のライフストーリーとキャリア選択プロセスの径路について検討するため、半構造化面接によってデータを収集した。得られたデータについては、個人の人生を時間と共に描くことを目標とする複線径路・等時性モデル (TEM) による分析を行った。そのことにより、後継者の事業承継へと至るキャリア選択プロセスを、事業環境に関わる客観的な状況とも照らし合わせながら検討することが可能となった。それに加えて、後継者が事業承継後 10 年以上経過して、次世代への事業承継についてどのような認識を持っているのか、またどのような準備を行っているのかについても検討を行った。

No028 名桜大学看護学生の国際看護学Ⅱ海外研修における異文化体験と効果

横川裕美子（名桜大学人間健康学部）、金井優子（元名桜大学人間健康学部）、浦添美和（名桜大学人間健康学部）

名桜大学看護学科では、2年次前期必修科目の国際看護学Ⅰで異文化看護の基礎を学ぶ。その後2～4年次で選択科目の国際看護学Ⅱ履修生がタイ東北部で研修を行う。目的は、異文化を体験し、国際保健協力活動の実際を学ぶことである。研修は現地NGOへの参画型学習で、HIV/AIDS陽性者リーダーによる自助グループ活動、小・中学生への性教育、現地の保健医療施設の視察、現地の看護学生との交流、農村部でのホームステイによる異文化生活体験、現地の人々との文化交流、生活文化および宗教・信仰を体験することである。履修生は、NGOスタッフやホストビレッジ・ファミリーに支えられながら異文化を体験し、本当の優しさとは何かを改めて感じ考えたという者が多かった。非言語的コミュニケーションの大切さ、「伝えたい」気持ちと「わかりたい」思いが言葉より重要であること、「相手を思い支え合う」ことを学修した。この体験は、看護学生にとって対人援助の本質を理解する効果がある。

No029 関係性を変えるための遊び：難民の社会参画を促す発達の場のデザイン

岸磨貴子（明治大学国際日本学部）、青山征彦（成城大学）

本研究では、シリア難民が、彼らを受け入れるホスト国のトルコ人生徒と共に活動を創出する「遊び」を通して、相互の関係性を再構築していくプロセスを明らかにする。トルコは、2018年の段階で350万人のシリア人難民を受け入れているが、軋轢が深刻な問題となっている。そのため、政府は社会的結束を掲げ、トルコ人とシリア人の相互理解を進めているが、政治的、歴史的、文化的な違いから相互理解に至ることは難しく、また、文化理解だけでは良好な関係性を構築できていないのが現状である。そこで、筆者らはパフォーマンス心理学の実践としてインプロを行い、遊びを通じた関係性構築を試みた。本研究では、シリア人とトルコ人の生徒（小学生から中学生）を対象にインプロを行い、フィールドノート、映像記録、子どもたちの感想を分析することで、相互関係がどのように生まれていくのか、どのような条件が相互関係の生成を促進するのかを議論したい。

No030 日本人の幸福の「語り方」に関する検討

中坪太一郎（淑徳大学総合福祉学部）、綾城初穂（駒沢女子大学）、平野真理（東京家政大学）

近年、文化比較の重要な指標の一つとして幸福感が用いられるようになっている。しかし極めて曖昧なこの概念については、その実態をどのように考えるかという点でさまざまな意見がある。従来からの指標に対して、特徴的ともされる日本人の幸福感を加味するためには、幸福が表現される文脈を考慮に入れる必要があるだろう。本研究では、日本人が「幸福をどのように語るのか」というリサーチクエスションを立てて、幸福に関する質問の形式を変えることでその答え方がどのように変わってくるのか検討を行うこととした。221名の大学生を対象に、「家族」「健康」「感情」「経済」「対人関係」の各領域において、現在形の肯定・否定文、未来形の肯定・否定文で幸福を問う4条件による質問紙調査を実施した。その結果、条件によって幸福に関する得点に差があることが示された。この結果から、日本人の幸福の語り方、表現の仕方の文脈的特徴について考察を行いたい。

No031 **5歳児の園における食事の難しさに関する分析**
ー園児の描画及びインタビューと保育者のインタビューからー
淀川裕美（東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター）

本研究の目的は、園での食事に難しさを抱えていると保育者が認識した5歳児について、実際に園児自身が園での食事をどのように認識しているかを検討することである。都内私立保育所2園の5歳児クラス園児計24名を対象に、給食場面の描画とインタビューを行い、担任保育士へのインタビューを行った。保育士の語りから、食事の難しさとして①友達関係、②食事への集中、③マナーの習得、④苦手なものを時間をかけずに食べることが挙げられた。①はランチルームの園で、④は保育室で食べる園でのみ語られた。園児の描画と語りから、難しさとして語られた内容は園児の描写がないもしくは少なく、園児自身が十分に認識していないことが示唆された。一方、②食事への集中に関しては、保育者と園児の認識のずれが描画から見出された事例もあった。描画とインタビューの手法が、食事経験に対する園児の認識を知る上でも、ひとつの有効な手段であることが示唆された。

No032 **食行動の構造に関する質的研究 ーベジタリアンと摂食障害を対象としてー**
三村千春（淑徳大学大学院総合福祉研究科）

現代では一人一人が自らの意志で食行動を実践していくことが求められている。そのような中で、思想に基づいて食行動の選択を行う者や、食行動そのものを拒否する病理が存在する。本研究では、食行動の「選択」を行っているベジタリアンと「拒否」を行っていた摂食障害を対象として、食行動の構造を明らかにすることを目的とした。グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行い、両者の食行動に関する構造モデルを作成した。食行動の選択や拒否は自身に対する評価を高める要因として機能していた。ベジタリアンが健康状態の改善や動物を救っているという感覚から自己に対する評価を高めていたのに対し、摂食障害では、体重が減ることや周囲から干渉されることで自己に対する評価を高めていた点が特徴的であった。また、周囲から食行動を理解されることが周囲の者との共食の機会があることは、食行動の幅を広げることに繋がっていることが示された。

No033 **環境を利用した協働的な食事活動の分析**
牧野遼作（早稲田大学人間科学学術院）

本発表では、身体知的重複障害者と家族の間の相互行為、特に協同的に達成される食事活動についての分析を報告をする。この食事場面では、母が大皿から適切な量をスプーンですくい、息子の口の前まで運び、食べるというやり方で食事を行っていた。このやり方で食事を進めるために、母親はスプーンを口の前に運ぶタイミングと、息子が口に料理を入れ、食べるタイミングは調整されなければならない。つまり息子の口の中が空のときに、母親はスプーンを口の前に運ぶ必要がある。そして息子は自身が食べれる状態であることを母親に示す必要がある。個別事例の分析の結果、息子は食事を口にいったあと、次に食べるタイミングとなるまでテレビに顔を向けていた。この振る舞いを通して息子は自身の食べるタイミングを示し、母はその示しを理解しスプーンを口に近づけていたことが示された。つまりテレビという環境を利用し彼らは協働的に食事を達成していた。

No034 「音楽の力」は高齢者にどんな影響を与えるのか？

—日本版 Music & Memory パイロット研究

富士元春（武蔵国分寺公園クリニック）、岩浪悟（東京都立多摩総合医療センター）、松永安優美（医療法人聖生会）、大矢仁司（特定非営利活動法人エコロジーオンライン）、上岡裕（特定非営利活動法人エコロジーオンライン）

目的：「音楽の力」で高齢者の生活をより豊かにすることができるのか探索的に調査する。方法：2017年10月から3か月間、4施設に居住する高齢者6人を対象に音楽リスニングプログラム(Music & Memory)を実施。プログラムに関わる施設職員に対して半構造化個別インタビューを実施した。その音声記録から文字起こししたテキストデータについて構造構成的質的研究法をメタ研究法とした Steps for Coding and Theorization（一部改変）で質的分析を行った。分析には実施中の映像も資料として参照した。結果：対象者に何らかの反応がみられると、職員はささいな変化も音楽の良い反応ととらえる傾向がみられた。音楽に対する高い期待や潜在的意識やケアに対する「うしろめたさ」が、安易な導入、対象者の選別や音楽の効果・害の評価を歪める要因につながることを懸念された。

No035 音楽科授業における熟練教師の実践知の特徴 —若手教師育成への展望—

高見仁志（佛教大学 教育学部 教育学科）

本研究は、音楽科授業中の熟練教師の実践知を調査し、若手教師の力量を高めるための方略を提示することを目的としている。まず、音楽科授業における教師の思考プロセスを「状況把握としての思考」「判断としての思考」「（教授行為の）選択としての思考」の3段階に分け、実践知の枠組みを明確にした。新人教師と優秀な熟練教師各2名、計4名の音楽科授業を対象として、再生刺激法によりデータを収集し分析を試みた。その結果、新人教師と熟練教師の実践知には、①「音楽に関する視点」②「関心・意欲・態度に関する視点」③「着眼点の多様性」④「着眼点の具体性」⑤「着眼の対象者」⑥「推論を伴った判断」⑦「見通しを持った判断」⑧「思考の完結」の各点から差異が確認された。この結果から音楽科授業における優秀な熟練教師の実践知の特徴が導かれ、それを基盤として「若手教師育成のためのメンタリング・プログラム」の方向性が示された。

No036 ミュージカルは教室に何をもたらすか —保育園における音楽アウトリーチの事例から

新原将義（帝京大学高等教育開発センター）

本稿では、ミュージカルをはじめとする演劇的活動が、教室において指導者・学習者にどのような相互行為を生起させるのかについて、ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」の概念と関連づけながら考察する。近年の「発達の最近接領域」理論の展開においては、子どもが「今できること」を、他者との協働によって超えていく過程を重視する「パフォーマンス」としての発達観が注目を集めている。こうした近年の議論を基に、グループでの協働による創造的で即興的な活動を通して、子どもの情動的・社会的な発達を促進することを目指すため、筆者を中心とした研究グループは、ミュージカルを題材とした音楽教育プログラムを継続的に計画・実施した。本報告では、この実践においてどのような特徴的な相互行為が生起したのかや、それが実践の継続を経てどのように変化したのかについての詳細な分析を行う。

No037 **笑いヨガが高齢者に及ぼす影響 —笑いヨガに参加した高齢者の所感より—**

九津見彩子（名桜大学人間健康学部）、永田美和子（名桜大学人間健康学部）、新垣あゆみ（沖縄県立精和病院）

本研究は、地域で生活する高齢者 15 名に週 1 回連続 4 回の笑いヨガに参加してもらい、所感や表情、仕草や行動などから、笑いヨガが高齢者に及ぼす影響について検討することを目的とした。笑いヨガ前後の所感や表情などからは、笑うことへの良い影響、主観的幸福感の増加、気分の改善、歯痛の軽減、リラックス効果などを示す反応が確認できた。また、笑いヨガの参加前から終了までの仕草や行動などからは、参加者は互いに予定を確認し、遅れそうな場合には電話をかけ気遣ったり、数名が自家用車に乗り合い自宅間を行き来するなど良好な交友関係が確認できた。笑いヨガは、高齢者にとって安全な健康体操であるとともに、笑いヨガの場は、馴染みの関係にある高齢者の親睦や幸福感を高め、人間関係を良好に保つことが社会的孤立の予防に役立ち、有効な社会交流の場になると考えられた。尚、本研究は、所属大学の倫理審査委員会の承認を得ている。

No038 **ユーモアのしろうと理論**

森田亜矢子（関西大学人間健康学部）、今道健人（関西大学人間健康学部）、森岡夏海（関西大学人間健康学部）

個人が有するユーモアの感覚や能力、また、そのはたらきについて、心理学の領域から多様な関心が寄せられてきた。ユーモアは人格的な成熟や態度と密接に関わる性格特性であるとともに、社会的スキルの一部であり、認知や感情の一側面であり、精神的健康を示す指標でもある。2000 年以降、国内外でユーモアをタイトルに含む論文の出版件数は 2000 件を超えるが、多面性と多次元性を有するユーモアは、海外の研究者の間でも定義に相違がある。また、英語の” humor” と日本語の「ユーモア」は、意味が同一でないように思われる。日本語としてのユーモアは広く知られた外来語であるが、その定義は明確でなく、ある辞書には「諧謔」と説明されている。日本においてユーモアを質量の両面から捉えるにあたり、そもそも日本語としてのユーモアが、一般的にどのような理解をされているのか、明らかにすることが役立つであろう。本件では KJ 法と KHCoder を用いた分析にもとづく考察を行う。

No039 **通勤者にとっての有料座席列車の意味の検討**

新野冬馬（横浜国立大学大学院国際社会科学府）、田名部元成（横浜国立大学国際社会科学研究院）

鉄道による輸送についてのこれまでの研究は都市計画分野における社会的効用の分析がなされるばかりで、有料座席列車の導入などのサービス改善が相次ぐ現状とは対照的に鉄道をサービスとして捉える視点は欠落していた。そこで本研究では、都市圏の通勤時間帯の鉄道輸送のサービス改善の端緒とするため、M-GTA を用いて通勤者にとって有料座席列車がどのような意味を持つかを明らかにする。分析の結果、有料座席列車は通常の列車利用時に生じる不快感の回避だけでなく、通勤の時間を生産的なものとし、意義のある時間として捉え直すきっかけとなる可能性が示唆された。これまでの分析を踏まえ、今後提示しうる理論について議論する。

No040 **会社員が通勤電車で読書をして過ごす認識の分析**

石井俊行（姫路獨協大学看護学部）

会社員が通勤電車で読書をして過ごす認識をインタビューより分析し明らかにすることを目的とした。
1.研究対象：片道に1時間以上を要し電車通勤内で読書をしている会社員で、研究への同意が得られた3名。
2.研究期間：平成29年1月～5月。
3.方法：通勤電車で読書をして過ごすことについて自由に語ってもらい、その内容を研究者が記録した。
4.分析方法：記録した内容を大きなカテゴリーに分類し分析した。
5.倫理的配慮：個人が特定されないこと、不利益が無いこと等文書を用いて説明を行い、文書による同意を得た。
【結果】3名のインタビューより、【通勤時間は有効に活用する】【読書が好き】【読書により感性が豊かになる】の3カテゴリーに分類された。
【考察】会社員は1日往復2時間以上の時間を貴重な時間と考え、読書で活用していることを語っていた。

No041 **災禍を生き延びる女性の力**

～原発事故によって移住を強いられたAさんのライフストーリー研究

村本邦子（立命館大学大学院人間科学研究科）

東日本大震災後、東北に十年通って被災と復興の証人（witness）になるというプロジェクトを続けている。災禍を逞しく生き延びる女性たちと出会うなかで、その力は災禍に際して突如として現れるのではなく、それまでの生き方の延長線上にあると感じている。今回は、W村に嫁ぎ伝統的村社会のなかで女性役割に戸惑いながらも、主体的に人生を生きるべく珈琲店を立ち上げ成功させたところで、原発事故による避難・移住を強いられたAさんのライフストーリーを紹介する。Aさんは、苦勞して築き上げたW村での生活を原発事故によって根こそぎ奪われ、「自分の全人生を否定された」と感じながら、「それでもスタイリッシュに生きたい」と被災後4ヶ月には避難先で珈琲店を再開させている。Aさんのライフストーリーが時間経過とともに変化し再構築されていくさまを追い、語り手と聴き手の関係についても考慮しながら、災禍を生き延びる女性の力について考察したい。

No042 **不確かな状況における将来展望のナラティブ：ある原発避難者の事例検討**

持田隆平（早稲田大学 人間総合研究センター）

事故や事件による行方不明や認知症などの病により、親密な関係のある人物の喪失や存在が不明確になる状況を、あいまいな喪失（Boss、2005/1999）という。近年、災害や亡命による故郷や近隣関係の喪失、家族の離合集散などもこの枠組みから検討する動きがある（Boss & Ishii、2015；Perez、2016）。本研究では、故郷である福島への帰還の可否が不確かな状況に置かれたある原発避難者に4年半に渡り面接調査を行い、あいまいな喪失理論に依拠しつつ、ナラティブの分析からその将来展望が事例的に分析された。その結果、事例の避難者は、その時々々の将来の予測や期待を持つことができても、実際的な見通し（Baumeister et al.、2016）を語るほど予測や期待を否定することにつながることを示唆された。結果を踏まえ、確定的な喪失を経験した者の語りを検討しているやまだ（2007）の知見との差異について議論された。なお、本研究は早稲田大学倫理委員会の承認を経て実施された。

No043 被災者の生活復興の過程における心理的変化に関する一考察

河本尋子（常葉大学大学院環境防災研究科）、重川希志依（常葉大学大学院環境防災研究科）、田中聡（常葉大学大学院環境防災研究科）、立木茂雄（同志社大学社会学部）

本研究は、東日本大震災の事例研究として、災害からの生活復興に向かう過程における被災者らの時系列的な心理的変化を明らかにすることを目的とした。具体的には、宮城県名取市に在住する被災世帯を対象として、発災からすまいの再建に至るまでの過程において、彼らの心理がどのように変化していったかを明らかにすることを目指した。本研究の対象は、自宅再建済み世帯、借り上げ仮設住宅居住世帯、プレファブ仮設住宅居住世帯という3つの被災世帯群に大きく分類される。研究方法としては、各世帯群に対するエスノグラフィー調査を実施し、調査から得られたテキストデータを用いて内容分析をおこなうこととした。内容分析の結果、発災以降の流動的な生活環境のなかで、それぞれが複数の居住場所の移動を経ており、その移動に伴って心理的変化がみられたこと、各世帯に共通点・相違点がみられること等が明らかになった。

No044 避難区域外での行動選択と支援に関する研究 ―福島県の住民の語りから―

有澤晴香（九州大学大学院専門職学位課程人間環境学府実践臨床心理学専攻）、サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）、川本静香（山梨大学大学院総合研究部）

本研究では、東日本大震災における原発事故（ラブチャー）による避難行動の選択する際に、家族が分離しない避難を選択し、かつ原発事故によって生き方を変えざるを得なかった人に焦点を当てて研究を行った。非可逆的時間に沿ってどのような心理的変容を経たのかを明らかにできるように、複線径路・等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling:以下TEMと表記する）を用いて分析した。対象者は福島県在住の医療関係者1名である。その結果、対象者が避難行動を「留まる」として選択した後、生活を営む中で新たな未来展望を見出していったプロセスを明らかにした。このプロセスより、避難行動選択時やその後どのような支援ができるかが推察された。ラブチャーの影響でこれまでのライフ（生命・生活・人生）を分断された人のレジリエンスの過程をTEMを用いて描くことが可能となったが、新たな概念としてラブチャー以前の等至点である「ゼロ等至点」を理解する必要があると分かった。

No045 復興曲線からみる被災者の心の復興

―平成27年9月関東・東北豪雨による常総市での水害を事例にして―

A LIMA（茨城大学人文社会科学研究科）

2015年9月、関東・東北豪雨により茨城県常総市での鬼怒川が決壊して非常に大きな災害になった。本研究では、復興曲線インタビューを主に用いながら、常総市において水害が起きてから今までの被災者の心の復興はどうなっているのか、どのように変わってきたのかを明らかにすることを目的とする。災害からの復興では、インフラの復興だけではなく、被災した人々の心の復興も大事である。本研究で言う心の復興とは、被災者の心理状態を被災前に戻すことではなく、被災体験を踏まえてよりよい心持ちで生活を送ることができるようになることである。鬼怒川の決壊で家屋が流失してしまった常総市三坂町上三坂区の8戸のうち6戸の6名の人（男性2人、女性4人）に協力を依頼し復興曲線を描いてもらい分析した。復興曲線の変化からみると、災害から2年間経って生活再建がおおむねできたが、心の復興にはまだ時間が要することがうかがわれた。

No046 **巨大災害後のコミュニティの内発的な活性化 ～NPO 法人のんのりのだ物語を事例に～**

陳俐珊（京都大学大学院人間環境学研究科）、永田素彦（京都大学）

本研究は、巨大災害後のコミュニティの内発的な活性化のあり方を、アクションリサーチを通して検討したものである。巨大災害におそわれたコミュニティにおいては、住民が復興やコミュニティの復興や活性化を「わがこと」と捉え主体的に関わっていく、内発的な活性化が重要となる。事例としてとりあげるのは、東日本大震災の被災地である岩手県野田村の NPO 法人「のんのりのだ物語」（のんのり）である。のんのりは、震災後、野田村に定期的に訪れていた学生ボランティア団体の被災者との交流活動をきっかけとして、一人の若い女性を中心に組織された NPO であり、外部者との交流を軸に、次第に多くの村民を巻き込みながら活動が続けている。本研究では、のんのりの成立の経緯、および、のんのりの活動がもたらした内発性について、主に内発性を促す関係性という観点から考察する。

No047 **「お茶っこ」のエスノグラフィーから見る地域のレジリエンス**

—東日本大震災被災地の慣習の持つ力—

河野暁子（立命館大学大学院博士後期課程）

報告者は東日本大震災以降、臨床心理士としての支援のため、気仙地域に移り住み、復興の過程において、地域には困難を乗り越える独自の知恵があるだろうと感じてきた。その一つが「お茶っこ」である。これは気仙地域に以前からあるお茶のみの慣習で、人々は気軽に互いの家を訪ね「お茶っこ」をしていた。この慣習は、仮設住宅のサロン等でも生かされてきていた。現在、報告者は気仙地域の空き家に居住している。ここでは月に一回お茶っこサロンが開催され、報告者も参加している。サロンでは、被災して転居してきた方も元々地域に住んでいる方も入り交じり、おしゃべりをしながら過ごしている。また、サロンではなく近所の家を訪ねる「お茶っこ」を、報告者自身も経験しながら生活している。「お茶っこ」のエスノグラフィーから見えてくる地域のレジリエンスについて報告し、被災地の外から入る支援者が地域を大切にしながらできることは何かを検討したい。

No048 **社会運動としての災害ボランティア：ひっくりかえす・ずらすという2つの戦略から**

大門大朗（大阪大学大学院人間科学研究科）、渥美公秀（大阪大学大学院人間科学研究科）

1995年に発生した阪神・淡路大震災によって、災害ボランティアは新たな社会運動の可能性を秘めたものとして注目された。しかし、20年以上経た現在、それは、政府や企業の引き起こす問題に対する敵対性を失っただけでなく、社会を変革する能動的な実践可能性すらも、新自由主義的な政治体制へと取り込まれつつあるように思われる。本研究は、第一に、この閉塞感を、主体（ボランティア）と客体（被災者）の枠組みの物象化の問題と、支援の偶然的な展開を排除する制度にあることを指摘した。第二に、実際に見られる災害ボランティアの示唆的な事例から、この2つの問題に対応して、「ひっくりかえす」戦略と「ずらす」戦略が有効であることを指摘する。最後に、災害ボランティアの社会変革について、近年の社会運動論から、提示した2つの戦略が空間・時間的に局所的な被災地を超え、複数の被災地の境界を橋渡し boundary-spanning し、社会的な変容を促す可能性を理論的に検討した。

No049 在日ムスリム留学生のヒジャブの着用をめぐる葛藤と価値の変容過程

—複線経路・等至性モデル（TEM）を用いた事例分析

中野祥子（山口大学留学生センター）

近年、ムスリム留学生は増加している。ムスリムには、守るべきとされる宗教的規範がいくつかある。特に女性は、肌の露出に関する制約が男性に比べて厳しく、家族以外の異性の前では頭髪を隠すべきとされている。それゆえ、多くの女性ムスリムはヒジャブと呼ばれるスカーフで頭髪を覆っている。筆者はこれまでに在日ムスリム留学生の異文化接触について調べてきた。その中で、彼女らが日本でヒジャブをつけることに葛藤を感じたり、その価値を問い直したりしていることがわかった。そこで本研究では、在日ムスリム女子留学生5名に半構造化面接を行い、ヒジャブ着用に関わる葛藤と価値の変容について探索する。インフォーマントは、日本滞在中にヒジャブの着用をやめた者、着用を続けた者、新たに着用を始めた者である。本研究では、彼女たちがそれぞれの決断に至るまでの認知、感情、行動の変遷について複線経路・等至性モデル（TEM）を用いて分析を行う。

No050 外国人集住地域における日本人児童生徒の学校経験

相磯友子（植草学園短期大学 福祉学科）

外国人児童生徒を含めた教育方策の示唆を得ることを目的として、外国人集住地域の小・中学校を卒業した日本人児童生徒の学校経験について所属機関の研究倫理審査後にインタビューを実施した。RQは1) 外国人集住地域の日本人児童生徒は学校で何を経験したのか、2) 学校経験をどのように捉えているのか、3) 学校経験と外国人への見方をどう関連づけているのか、の3つである。インタビュー協力者は、特定の外国人の友人を持ち、楽しい経験もネガティブな経験も有していた。学校経験の捉え方は、肯定的に捉える者と「普通」の経験と捉える者がいた。その違いは、外国人児童生徒を異なる存在と認識するか、「普通」の存在と認識にするかに起因した。現在の外国人への見方には肯定的影響があったと考える者と、影響は特にないと考える者がいた。外国人児童生徒との関わりを自ら選び取らなければ外国人への見方には影響しないことが示唆された。

No051 中国人の日本観光とナショナル・アイデンティティとの関係について

—「日本旅行記ブログ」に対するナラティブ分析を中心

朴香花（名古屋大学人文学研究科）

本研究では、中国人が記した「日本旅行記ブログ」での語りに対するナラティブ分析により、中国人の日本観光とナショナル・アイデンティティとの関係性について探ることを目的にした。具体的に、「日本旅行記ブログ」で語られた自国の中国に対するブロガーの個人的な主張や意見などの態度を表す語りに着目して、そのような語りは如何なるプロセスでどのように語られていて、そこから反映されたナショナル・アイデンティティは如何なる特徴が存在していて、最終的に中国人にとっての日本観光とナショナル・アイデンティティの間では如何なる関係性を持っているのかについて検討した。その結果、上位構造パターンとして、主に自国に関する肯定的な語り（ナショナルプライド）と否定的な語り（ナショナルコンプレックス）の二つの構成パターンを抽出することができた。本研究の限界として、ブロガーが伝えようとするメッセージを汲み取ろうとしたため、個別的な事例研究としての知見であり、一般化を保証するものではない。

No052 フランス、ラボルド精神病院の統合失調症患者との「出会い」

—言語、習慣、日常「以前」の場所で—

近藤真帆（京都大学大学院 人間・環境学研究科）

今年の5月、筆者はK市の精神科診療所の医師、スタッフ、デイケアに通所するメンバーと共に、世界的に有名な精神病院であるラボルド病院を訪れた。滞在2日目、筆者たちの食事のテーブルに、裸足の男性患者が無表情のまま、しかしまっすぐこちらに向かってやってきて座った。最初は、平板な表情、目の合わなさ、交流の断絶感ばかりが感じられていたが、次第に、彼なりの志向性を感じ取っていく。そして、彼が自らの名前を必死に伝えようとしてきたのに対して、こちらも必死に応じる瞬間が訪れた時、それまでとは全く異なる彼のありように出会った。そしてそれは、我々の帰国後にも続く、大きな変化だったと、現地の医師から後日報告を受けた。この「出会い」で何が起きていたのかについて、互いの志向性がいかに絡み、いかなる了解の過程があったか、そしてその蓄積が何を生んでいったのかを分析する。なお、個人情報保護等を含め十分な倫理的配慮を行う。

No053 性適合手術を完了したFtM男性を家族にもつ者の受容プロセスに関する一考察

根本裕司（淑徳大学大学院総合福祉研究科心理学専攻）

性同一性障害（GID）は、性別を移行する当事者だけでなく、移行前から関係を持ってきた家族にも、ポジショニングの変容が求められると考えられる。本研究では、性適合手術を完了したFtM（Female to Male）男性（以下W）の家族3人への、Wに関するライフストーリーインタビューを行った。そして、GIDを家族がそれぞれどのように受け止め、ポジショニングの変容が行われたかについて検討することを目的とし、ディスコース分析を行った。分析の結果、父・母・祖母すべてに、Wに対する人称の揺らぎと、それに伴うポジションの混乱が見られた。家族のGID受容を後押しした要因の語りでは、GID当事者でもある精神科医のヴォイスが用いられ、その中で「責任能力のない子どもを守る親」から「子どもの人生を後押しする親」というポジションの変容が見られた。しかし、一貫して「子どものためを思う親」としての要素は保たれており、GID受容を促すプロセスの一端が示唆された。

No054 性を「気配」から再考する

—トランスジェンダー者との語り合いと対話的自己エスノグラフィをもとに

町田奈緒子（京都大学大学院 人間・環境学研究科）

従来、セクシュアリティ（性）は、個人の内部にある属性ないし、社会的構築物として論じられてきた。しかしながら、そうした捉えられ方が、実際に性を携えて生きている人間の実感に根差したものであるかについては疑問が持たれる。本発表では、性についての一般的な日常性が崩されている体験から、性の再考を試みる。具体的には、生物学的性とジェンダー・アイデンティティが一致しないとされるトランスジェンダー者との語り合いおよび対話的自己エスノグラフィで得られた語りを提示する。その結果から、性別違和は、単に個人の内部で起こっていることでも、社会との接面で起こっていることと捉えるだけでは不十分であり、他者との「あいだ」で体験される現象であることを論じる。そして、性が個人から滲み出るような前言語的なものであることを、「気配」という概念を用いながら描出と説明を行いたい。なお、調査結果の公開については協力者の承諾を得ている。

No055 “二十歳になるまで”を振り返った親子の語り

子どもの妊娠から成人までの長期縦断研究から見る親子の発達 (1)

菅野幸恵 (青山学院女子短期大学)、岡本依子 (立正大学)、亀井美弥子 (湘北短期大学)、東海林麗香 (山梨大学)

筆者らははじめて子どもを迎える家族を対象に妊娠期から児童期までの縦断研究を行っていた。協力家庭の子どもが成人を迎えるのを機会に、子育て完了期における親子の長期的な発達を検討するために、再度研究への協力を依頼、応じてくれた親子にそれぞれインタビューを行った。インタビューでは誕生からこれまでを振り返って、よかった時期、大変だった時期、難しかった時期などを尋ねた。今回はこのうち、「大変だった時期」「難しかった時期」についての語りに焦点をあて分析を行う。具体的には、双方にインタビューを行うことのできた親子を対象に、親と子双方があげる時期に差はあるのか、「大変さ」「難しさ」のとらえかたに違いがあるのか、について検討する。

No056 子の語りに現れる家族外のコミュニティの位置づけ

子どもの妊娠から成人までの長期縦断研究から見る親子の発達 (2)

亀井美弥子 (湘北短期大学保育学科)、菅野幸恵 (青山学院女子短期大学子ども学科)、東海林麗香 (山梨大学大学院教育学研究科)、岡本依子 (立正大学子ども教育福祉学科)

第一子を迎える家族を対象に妊娠期から児童期までの縦断研究を行っていた筆者らは子の成人を機に、親子の長期的な発達を検討するため、再度協力家庭へ研究協力を依頼した。その結果承諾の得られた親子にそれぞれインタビューを行うことができた。20歳という年齢は発達心理学的には思春期を乗り越え、家族と新たな関係性を培い、より大きな社会的文脈へ活動が広がっていく年齢といえる。本研究では子どもに家族との関係や本人の困難や成長について問う質問項目への回答のなかで、家族外のコミュニティが子どもにとってどう位置づけられ、子自身や家族の成長や関係の変化と関連するのかに注目する。これらの子の語りを親の語りと合わせて分析することで、家族から家族外への関係の移行について考察する。

No057 家庭内において妻が夫に対して担っている「感覚的活動」

三品拓人 (大阪大学人間科学研究科)、妹尾麻美 (立命館大学立命館グローバルイノベーション研究機構)、安田裕子 (立命館大学総合心理学部)

男女共同参画社会の実現が目指されている (内閣府男女共同参画局 2001)。夫婦関係が「平等」に近づいている時代状況において、一見家事や育児に協力的な夫であっても、その背後に客観的には認識されにくい妻の配慮や活動があるのではないだろうか。本研究では、妻が行っている「感覚的活動」(Mason1996)の実態を明らかにする。感覚的活動とは、ケアが成り立つ前提として感知、思考を通して潜在的に行われる活動である。妻へのインタビュー調査からは①子どもの生活時間の伝達、②分担した家事の指示、③夫と子どもが関わりやすくする配慮、が捉えられた。つまり、妻は伝達・指示・配慮を通して夫の家事・育児への参加と協力を促進している。すなわち、妻が家庭内の状況を把握しており「感覚的活動」を行うことによって夫のケア活動が成り立っている可能性が示唆される。なお、本研究は立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会の承認を受けている。

No058 **子どもは親の離婚をどのように語るのか**

曾山いづみ（奈良女子大学研究院生活環境学系）

日本においても離婚率の高止まりが続く中、親の離婚を経験する子どもたちの割合も増加している。離婚時に子どもをケアすることや、子どもの気持ちを尊重することの重要性が認識されつつある一方で、離婚は個別性が高く、強い葛藤をはらむものであるゆえ、何をもって「子どもの気持ちを尊重する」ことになるのかはそれぞれの状況によって大きく異なると考えられる。そこで、本研究では親の離婚を経験した子どもがどのようにその経験を語るのか、特に気持ちの変化に焦点を当て、丁寧に検討することを目的とした。具体的には、2017年9月～2018年2月の間に、親の離婚を経験した18歳以上の方を「ご招待」し、1人に対して3回のインタビューを実施して、TEAを用いて分析した。協力者の語りをTEM図を用いて可視化することで、協力者にとって混んとしていた経験が整理され、語りが促進される様子や、離婚以外の経験も積極的に語られるようになる様子が見られた。

No059 **教員学生協働型健康相談活動「チームガッキー」が学生に及ぼす影響と今後の課題**

—卒業生へのインタビュー調査から—

野原萌（名桜大学人間健康学部看護学科）、鯉淵乙登女（名桜大学大学院看護学研究科）、稲垣絹代（名桜大学総合研究所）

沖縄県 A 大学看護学科では、2009 年から生活困窮者への血圧等を含む健康測定と健康相談を行う、教員学生協働型健康相談活動（以下、健康相談活動）を開始し、これまで多くの学生が活動に参加してきた。今回、健康相談活動に継続して参加してきた卒業生へのインタビュー調査を行い、活動が学生に及ぼす影響と今後の課題を明らかにする。本研究は研究代表者の所属の倫理審査委員会で承認を得た。インタビュー内容は、基本的属性（年齢、性別、出身、活動歴）の他、健康相談活動の参加のきっかけと継続参加の理由、自身の変化や成長等である。分析は音声データを逐語録に起こし、研究目的に沿ってカテゴリー化を行った。4名の卒業生（2名は個別調査、2名はグループ調査）に調査を実施した。卒業生は健康相談活動に参加することで、血圧測定やコミュニケーションなどの基本的看護技術の向上に加え、自身が経験したことのない生活困窮者の生き様を知ること、対象理解と活動の魅力につながっていた。今後の課題として継続して参加するための環境づくりが示唆された。

No060 **野宿生活者への継続したボランティア活動の振り返りから**

—得られた学びと看護基礎教育に活かしたいこと—

室若葉（姫路獨協大学看護学部）、井上清美（姫路獨協大学看護学部）、野原萌（名桜大学人間健康学部）、山根美穂（マイノリティの健康支援研究会）

報告者らは、野宿生活者が多く集まる大阪 A 公園にて行われている炊き出し活動の傍らで、看護職による健康相談活動を約9年間継続して実施してきた。ボランティアメンバーの中には、学生として活動に参加し、看護職となり、その後看護基礎教育に携わるようになった者もいる。その中で、活動当初から継続して参加しており、看護基礎教育に携わったメンバー3人で、自分たちがどのように活動に関わってきたかに焦点を当てて振り返りを行った。結果、ボランティア活動体験から学んだことと、その経験を看護基礎教育に活かしたいことの2つの視点が得られた。振り返り内容の検討と報告には関係者の同意を得た。

No061 **ターミナルケア実習における看護学生の学習（成長・変容）のプロセス**

～質的統合法（KJ法）を用いた学生のナラティブに迫る試み～

菊永淳（新潟大学医学部保健学科）、関奈緒（新潟大学大学院保健学研究科）、坂井さゆり（新潟大学大学院保健学研究科）、宮坂道夫（新潟大学大学院保健学研究科）

目的：実習記録の分析から、ターミナルケア実習における看護学生の学習（成長・変容）のプロセスを検討する。方法：対象はターミナルケア実習を終えたA看護系大学3年次生1名の実習記録とした。質的統合法（KJ法）で分析し、学生のナラティブを再構築した。倫理的配慮：所属施設の倫理審査委員会の承認を得た。結果：学生は緩和ケアを必要とする子宮がんの患者を担当した。146枚の元ラベルをラベル6枚に統合した。学習の始まりは患者把握と病態理解の不足の指摘による「自己の学習課題への気づき」であった。次に休息と安寧という「緩和ケアを受ける患者への細やかな配慮」の心がけであった。患者との関わりを重ね、学生は「患者との距離が縮まる」ことや「観察能力の向上」を経験していた。そして「症状緩和と精神的支えの効用」「療養生活を見据えた退院支援」を学習していた。結語：ターミナルケア実習において、学生視点からの学習プロセスが示唆された。

No062 **小児看護実習における学生の学び ～質的統合法（KJ法）による分析～**

松下聖子（名桜大学人間健康学部）、宜保真由美（社団医療法人敬愛会中頭病院）

佐久本聖菜（社団医療法人敬愛会中頭病院）、徳元真美（社団医療法人敬愛会中頭病院）、真鶴ゆかり（社団医療法人敬愛会中頭病院）、新里美智子（名桜大学人間健康学部）

小児看護実習での学生の学びを明らかにするため、5グループ（29名）が実習のまとめで作成したカードメソッドのカード85枚を用いて質的統合法（KJ法）で総合分析を行った。その結果、「入院中の子ども力」として、子どもは入院中の「ストレスを遊びで緩和」している。一方で「入院中の子どもとの関わり」として「子どもの人権を尊重し個別性への対応のむずかしさ」と「自信のなさや技術不足から来る自らの未熟さ」を感じていた。その反面で「子どもへのケアの調整」として「家族アセスメントによる介入」と「子どもへのケアの一助」として、「家族との関係づくり」が大切であることを学んでいた。そして「小児看護の在り方」として、「子どもの特徴を理解し、知識と技術にもとづく総合的判断」をあげていた。以上のことから、学生の体験を意味づけ、深い学びにつなげるための指導方法の検討が必要である。本研究は、対象学生に目的と趣旨を説明し了解を得た。

No063 **三重県志摩市の御木曳祭（式年遷宮）にみられる青年への伝統の継承に関する文化心理学的研究**

澤田英三（安田女子大学心理学部）

三重県鳥羽市志摩市には、全国で唯一現存する青年宿（寝屋子）があり、かつては青年団活動も活発であったが、近年では青年の島外流出が著しい。20年に一度の御木曳祭（御多羅志神社の式年遷宮に伴うの祭）は2018年6月に開催されたが、ここ20年の間に祭の主役となる青年が減少したことによって、伝統の一部を修正しつつ祭を継承することを余儀なくされた。本研究では、祭りの主役である音頭取り養成に焦点を当て、20年・40年前の音頭取り経験者（師匠・顧問）が青年に対してどのように祭りを伝え、かたちに修正を加えつつ伝統を継承していったのかを、祭の準備から当日の祭本番への参与観察（観察とインタビュー）を通して検討した。20年後も祭を存続するという共通認識のもとで進められた準備され実施された祭は、青年に加えて子どもや大人を含めた運用をしながらも、その中心的役割については20年後を見越した人選と伝承が行われていた。

No064 祭りを反復する：野沢温泉道祖神祭りにおける写真使用実践に着目して

阿部廣二（早稲田大学人間科学学術院）、古山宣洋

本報告では、長野県野沢温泉村にて毎年開催される道祖神祭りが反復される過程について、祭りの準備を担当する構成員の写真使用実践という観点から考察していく。祭りを準備する構成員は、三夜講（伝・榎本、2016）と呼ばれる組織を構成しており、毎年新しい世代の人々が祭りの執行を担う「世話人」となる。また、世話人をするのは、昨年度、「見習い」として、世話人の補佐を経験した人々である。したがって、世話人は、「（見習いとして参与した際）昨年度世話人がどのような準備をしていたか」という情報を利用して、祭りを反復することになる。こうした情報は、自らの記憶、および昨年度の実践が明確に反映されているメディアである「写真」を用いて参照される。そこで本研究では、この写真の使い方、および準備への反映過程について、フィールドデータおよび相互行為データを用いて検討し、彼らが祭りを反復していく様に迫る。

No065 沖縄県離島における包括的心理支援モデル構築に向けた方法論の検討2

楠本和歌子（神戸山手大学）

心理支援ニーズの高まりは僻地においても例外ではないが、心理支援が最も恒常的かつ一定の範囲で行われている教育領域のスクールカウンセリング分野でさえ、人材の確保が困難、人材が定着しない、カウンセラーによって支援の質が異なる、他機関との連携方法が不明確で効果的な協働が行えない、といった課題が山積している。それにも関わらず、僻地臨床に関する研究は殆ど行われていない。本研究は、仮説生成型研究の立場から僻地の各臨床領域（教育、医療・保健、福祉、産業・労働、司法・犯罪）でインタビュー調査を行い、包括的心理支援モデルを構築すること、さらに、当事者たちと対話協働を行いながら心理支援の効果的な実践方法を検討し、その知見を現場に還元することを目的としている。本発表では、各臨床領域の心理支援の特徴を整理し、分析枠組みの検討を行う。

No066 沖縄県北部A地区の高齢者が持つ、入院・入所時のウグワン(御願)に対するニーズについて

～スピリチュアルケアの視点から～

仲宗根健太（琉球大学医学部付属病院）、田場真由美（名桜大学人間健康学部）、松田めぐみ（名桜大学人間健康学部）

本研究の目的は沖縄県北部在住の高齢者が入院・入所中に望む、沖縄文化習慣である「ウグワン：御願」に関するケアニーズを明らかにし、よりよい看護の提供に向けた一資料とすることである。高齢者4名を対象とし、半構成的面接を実施し、逐語録から意味が類似しているデータをカテゴリー化した。倫理的配慮は、在学していた大学倫理審査委員会の承諾を得た。【ウグワンの内容】等では、ウグワンが精神的安定と地域での繋がりが示唆され、【入院中の治療やウグワンへの想い】では、ウグワンの捉え方や身体の状態により、ニーズの優先順位の相違がみられた。また、【ウグワンの実行不可】時に感じるスピリチュアルペインの軽減に繋がるケアが必要である。今後、地域性や信仰により、スピリチュアルケアに対するニーズは多様化すると考えられる。その為、対象者の文化背景を理解しニーズを汲み取り援助することがスピリチュアルケアの向上に繋がると考える。

No067 血縁によらない養子養育のプロセス

ー思春期のストレスフルイベントへの対処と心理的支援

森和子（文京学院大学人間学部）

2組の親を持つことに起因する特有の課題をもつ養子の養育プロセスにおいて、養子を迎えてから青年期後期に至るまでに発生した「嬉しい」「辛い」イベントに対して養親がどのように意味づけストレスフルイベントに対処していたのか、それに対する有効な心理的援助について明らかにすることを目的に、ライフ・ライン・インタビュー・メソッドを用いて検討した。本事例は多くの養子にみられる養子を迎えた直後の家庭に適応する困難（試しの時期）がなく自慢の子どもであった。しかし10代に入ってから小学校での問題行動、転校、不登校、大喧嘩など、辛いストレスフルな時期を過ごしている。ラインが上向ききつかけとしては、鑑別所の一般相談による支え、精神科病院での発達障害診断、出自の開示等で、実親の遺伝的要因もあり仕方ないという辛い経験による底つき体験からの「ふっきれ感」を得てからライフラインは嬉しい方向に上向きに進んでいたことがわかった。

No068 ステップファミリーで育った大学生の別居実親をめぐる思いについての検討

勝見吉彰（県立広島大学）

日本においてもステップファミリーに関する心理学的研究が増えてきているが、ステップファミリーにおける親の体験や子どもと継親との関係に焦点を当てた研究がその多くを占める。また、近年別居親と子どもとの面会交流の重要性が認識されるようになってきており、離れて暮らす実親との関係をどのように築いていくかが子どもの心理的発達に影響を及ぼす可能性について論じられてきている。そこで本研究では、ステップファミリーで育った大学生に対して個別にインタビューを行ない、両親の離婚により離れて暮らす実親との関係をめぐる思いについての語りを資料として整理した。そして、別れた実親をめぐる体験を彼らがどのように処理しているのか、そのプロセスは同居する実親ならびに継親との関係の中でどのように位置づけられるのかといった点について考察を加えた。

No069 大学生のやる気はなぜなくなるのか？どのようにしてなくならないようにできるのか？

ーTEAによる検討ー

岡野雄気（首都大学東京大学院 都市環境科学研究科）、若杉美穂（武庫川女子大学大学院文学研究科）、菱ヶ江恵子（日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科）、サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）、安田裕子（立命館大学総合心理学部）、神崎真実（立命館グローバル・イノベーション研究機構）、土元哲平（立命館大学大学院文学研究科）、菅井育子（マツダ株式会社）、隅本雅友（マツダ株式会社）

本研究の目的は、大学生が大学入学当初に持っていたやる気を喪失するプロセス及び喪失の要因を明らかにするとともに、大学生のやる気の喪失を防ぐ、あるいはやる気を回復させる方略を検討することである。データの収集として、現役大学院生4名に「大学入学当初に持っていたやる気を喪失していく経験・過程」についてインタビューを行った。収集したデータの分析には、質的研究法の複線径路等至性アプローチ（TEA）を採用した。各対象者の複線径路等至性モデリング（TEM）の図を作成した後、1つのTEM図へと統合した。統合したTEM図から、やる気喪失の要因を探った。その結果、やる気喪失の要因は「講義に対するギャップ」、「他者からの評価」、「大学外の活動の充実」であった。また、本研究の対象者は大学1年生時の比較的早期にやる気の喪失を経験していることが明らかになった。これらの結果を基に、やる気の低下防止・回復の方略を検討した。

No070 「大学生のやる気はなぜなくなるのか？」複線径路等至性モデリング (TEM) による検討
—マツダ株式会社・立命館大学による共同研究「質的研究アナリスト育成プログラムの開発」による体験型プログラム TEM 院生版 PBL からの学び—

田中文昭 (広島大学大学院教育学研究科)、張曉紅 (関西大学大学院総合情報研究科)、浅瀬万里子 (京都大学大学院 医学研究科)、サトウタツヤ (立命館大学総合心理学部)、安田裕子 (立命館大学総合心理学部)、神崎真実 (立命館グローバル・イノベーション研究機構)、土元哲平 (立命館大学大学院 文学研究科)、菅井育子 (マツダ株式会社)、隅本雅友 (マツダ株式会社)

本研究ではマツダ株式会社と立命館大学との共同研究として開発された TEM 院生版 PBL を紹介し、その成果を発表する。本プログラムでは、「大学生のやる気はなぜなくなるのか？」という課題について、2 班 (A 班、B 班) に分かれて検討した。班ごとに 2 名ずつペアになり、各自語り手と聴き手を順に体験し、トランスビュー (Trans-View) の手法によりデータを収集し合った。分析では、まずデータごとに TEM 図を作成し、それらをまとめ、統合 TEM 図を作成した。A 班 (6 名) では最初、研究目的にもとづき等至点を「勉学へのやる気の低下」と設定し、その状態に至る時間的変遷を描いたが、分析を深めていくと「将来に繋がるやる気の継続」がすべての語りデータに共通して捉えられた。またその過程で、「新しい出会い」が必須通過点となっていたこともわかった。こうした体験型学習プログラムにより、初学者でも TEM について深い理解と活用方法のヒントを得ることが可能になった。

No071 「わからなさ」にみちた世界の中で〈教室〉という場の持つ豊かな意味を問い直す—大学教育での授業実践の中で見えてきたこと—

荒木奈美 (札幌大学地域共創学群)

臨床教育学入門」という発表者が独自に立ち上げた授業の中で教師と学生が学びあうことの意味を繰り返し問い続けてきた。この一連の経験の中で何をおいてもまず問わなければならないのは、教師が「教える人-学ぶ人」の構造を壊し、新しい価値観の中で学生と出会い直すこと、そしてそのために両者が出会う〈教室〉という場の持つ豊かな意味を明らかにし、そこでイニシアチブをとる教師の「役割」を積極的に意味づけることと考えた。本発表では三つの NI (Narrative Identity、Narrative Interaction、Narrative Inquiry) という観点から教師の存在意義を問い直し、「統合とひび割れ」(Clandinin、2017) というキーワードを手掛かりとして、複合的に「わからなさ」にみちた世界の中で、教師がこの「わからなさ」と正面から向き合うための方法を改めて問いたい。

No072 部活を辞めることをめぐるディスコース分析

川野健治 (立命館大学総合心理学部)

A 県 HP で公開されている自殺事案についての報告書を取りあげ、部活を辞めることを主題としたディスコース分析 (Parker、2002) を行った。この報告書では、当人が部活を辞めたいと思いながらやめることができない「葛藤」に悩みながら日々の生活を続けているところに、体罰場面への遭遇などから部活を頑張ろうとする意欲がそがれ、うつ病が発症し、最終的には自殺にまで至ったとされている。「中途半端な理由ではなく、筋の通った理由がないといけない」「就職にも影響する (と父に指摘された)」「自分が辞めると仲間から何か言われるのではないかと気にしている」「辞めることを改めて伝えるため、母親、担任や友人から同行するとの申し出があっても拒んでいる」というように、多様な表現で、辞める／辞めないの境界が構成され、外部のない全体性が提示される。言い換えると、部活、学校、生活領域という三重のはずの同心円は一つに重なって提示されている。

No073 学生のグループワークに見られる「話さない」参加のあり方

駒崎俊剛（東京医療保健大学）

2014 年 3 月に学生 4 名のグループワークの参加度についてビデオデータを観察法により学習者のグループワークへの参加度に焦点をあてて分析した。このグループワークは、25 分間実施され、そのうちの 10 分間は、事前学習を順番に発表し、その後、15 分でグループの見解をまとめた。本研究では、このグループワーク中に見られた、ある参加者が、かれ自身の発言順番以外は、全く話さないという現象を参加者同士のインタラクションに焦点をあてて、発話とジェスチャーの関係から分析した。本研究の実施にあたり、協力者の学生から研究開始前・開始後においても研究協力の取りやめを希望した際には、いつでも中断・辞退できること、および研究協力の中断により何ら不利益を被ることがないことや研究協力の中断・辞退手続きも研究同意書に記載・説明し、同意書を取得した。また、所属先の「ヒトに関する研究倫理審査」を申請し受審済みである。（受付番号教26-37）

No074 対人関係に課題を抱えていたある男の子の「わからなさ」についての一考察

山本展明（京都大学大学院人間・環境学研究科）

筆者は、森のようちえんに関与観察する中で、対人関係に課題を抱えていたという一人の男の子に出会った。本発表では、この男の子が森のようちえんの活動、あるいは他園児との衝突や保育者との関わりを通して仲間との関係を生成していく過程を追っていくことで見えてきた、彼の抱えていた「わからなさ」とはどのようなものかの一事例を考察する。方法に関しては、私の参与観察の過程から得たエピソードを、エピソード記述法を用いて分析した。倫理的配慮について、本発表に関して、調査協力者の男児の母親に、事前に研究の目的を説明した後、研究協力を依頼した。その結果、データの発表に際しては個人が特定されないように細心の配慮することを条件に、調査に対する協力を快諾していただいた。また、本発表で用いたエピソードに登場するすべての人名に対して、個人を特定できないように仮名を使用し、写真には加工を施した。

No075 ソーシャルメディアで形成されるコミュニティと他者像

大山星馬（青山学院大学社会情報学研究科）

ソーシャルメディア発生以前のネット上のコミュニケーションに関する研究から、「リア充」といった仮想的な他者イメージを想像することで、ネット利用者たちがコミュニティやアイデンティティを複雑に組織していた可能性が示されている(川上、2014)。本研究では、上記の他者への意識と結びついた自己意識の構造と、コミュニティとしての結びつきに注目し、Facebook 上のコミュニティのメンバーによる自己像の語りを対象とした。対話的自己論(ハーマンス、1993)を分析枠組みとして分析した結果、自分たちではない他者のポジションから自己像が語られていた。さらにそのグループ外の他者に名付けをおこなったメンバーの語りを分析した結果、自分たちという集団意識と関係して、不特定多数の他者たちが一まとまりの集団として顕在化し、さらにその「他者たち」という相補的な関係で自己像が作られている事実が明らかとなった。

No076 **「他者理解」の多層性について**

藤井真樹（名古屋学芸大学）

私たちは、他者を理解することに関して、他者を「分かる」とか「理解する」、また他者と「つながる」といった言葉で表現する。しかし、これらの言葉は、それぞれが明確に意味づけられたり、区別されてはいないのが実情である。従来の心理学研究においても「分かる」も「つながる」も広く他者理解の問題に含まれてきたと言える。しかし、私たちの日常を振り返ると、「分かる」や「つながり」が単純に「他者理解」に内包されているわけではない。例えば、「つながり」が生じ得なくても「分かる」こともできることもあるし、行動や発言の意図や意味が明確には「分からな」くても、「つながり」は感じる、ということもあり得るからである。つまり、「他者理解」にはいくつかの層が存在するのではないだろうか。発表では、こうした広く「他者理解」として捉えられてきたことの多層性について考察する。

No077 **ピアジェの発生的認識論のスピノザ的解体（6）**

— ベルクソンの「直観」と発生的認識論 —

小島康次（札幌保健医療大学保健医療学部）

ベルクソンが当初、論敵としたのは連合主義心理学とカントの認識論だった。カントの認識論は、連合主義とは違って精緻で、きわめて厳密であることは、ベルクソンも認めるところである。思考能力は、人間に生得的に備わった時間と空間という感性の形式に従って働くもので、この形式の外に存在するはずの實在（「物自体」）は人の思考能力を超えたものであり、認識不可能であるとされる。ピアジェの発生的認識論はカントの認識論を土台としたものである。時間や空間が人の行動と結びついた知性の産物であることはベルクソンも認めるところであるが、それが不可知であるという奇妙な結論には同意しない。カントの言う時間が、実は思考のための便宜的形式でしかないことをベルクソンは喝破し、本当の時間、それは「持続」であり、予め時間の外に排除された知性ではなく、「直観」という方法でしか接近できないことを論証する。発生的認識論における時間概念の問題を論じる。

No078 **試合時の没入経験に熟達及ぼす影響**

～ビリヤードおよびゴルフのプレイヤーへのインタビューから～

都築幸恵（成城大学社会イノベーション学部）、竹谷亜沙美（成城大学 社会イノベーション学部）、青山征彦（成城大学 社会イノベーション学部）

本研究では試合時の没入経験について検討するために、ビリヤードプレイヤー3名(プロ1名含む)、ゴルフプレイヤー3名(元プロ1名含む)の計6名を対象として半構造化面接を行った。この2種目は、メンタルスポーツと呼ばれる個人競技かつ静的球技であり、プレイヤーが没入を体験するプロセスを捉えやすいと考えられた。KJ法による分析の結果、「目の前の課題にのみ集中」「無」などの没入時の状態の記述、及び、「時間感覚の変容」「コントロールできているという感覚」などの主観的感覚の記述に関しては、プロとアマのあいだで目立った差異は見られなかった。一方、没入経験に関するメタ認知、没入経験に入るための方法の意識化などに関しては、両者に大きな差異が見られたことから、熟達が没入経験に影響する可能性が示唆された。本発表では、プレイヤーの没入経験を記述することに加え、熟達による没入経験の変化についても議論したい。

No079 **オートエスノグラフィーにおける顕名性と倫理的問題**

土元哲平（立命館大学大学院文学研究科）、伊東美智子（立命館大学大学院人間科学研究科・神戸常盤大学）、上川多恵子（立命館大学大学院人間科学研究科）、伊藤美樹（立命館大学大学院応用人間科学研究科）

本研究の目的は、オートエスノグラフィー（自己エスノグラフィ；Ellis & Bochner、2000）における倫理的な問題点を整理し、その解決の方向性についての示唆を得ることである。近年、“研究者＝対象者”となる質的研究は日本だけでなく世界的にも注目を集めている。しかしながら、この研究領域にはいくつかの議論の余地が残されている。特に、オートエスノグラフィーの顕名性にともなう研究倫理の問題は、他者を対象とした研究を前提とした枠組みでは十分に議論がなされておらず、わが国においても議論が立ち遅れている現状がある。したがって本発表では、オートエスノグラフィーにおいては顕名性が伴い、他者だけでなく「自分自身の説明」（Butler、2008/2005）も含んでいるという観点から、自己を対象とした質的研究において生じる倫理的な問題点を整理する。こうした問題点を踏まえた上で、その解決や議論の深化の方向性について提案を行う。

No080 **ロッキード事件小佐野証言に見られる行為主体性**

鈴木聡志（東京農業大学 教職・学術情報課程）

社会構成主義の影響下にある心理学がこれまであまり取り組んでこなかった問題に行為主体性（agency）がある。例えばディスコース心理学は、内的な心理過程とされているものが言葉のやり取りによってつくられるとして、そのつくられ方に注目してきた。しかしそれをつくる個人には目を向けない。ディスコースによる現実や心理的事実の構成を主張するからには、ディスコースを駆使する主体が存在することは否定できないだろう。人は行為主体性を十分に発揮するときもあれば、それができないときもある。行為主体性を極度に発揮する機会のひとつに公の場での発言がある。ここで取り上げるのはロッキード事件における小佐野賢治氏の衆議院予算委員会での証言（1976年2月16日）である。委員が疑惑とともに発する質問に対して彼が行った証言の中に、行為主体性の現れを見出してみたい。

No081 **食品安全のリスクコミュニケーションにおける参加型手法の開発と実践**

杉浦淳吉（慶應義塾大学文学部）、吉川肇子（慶應義塾大学商学部）、穂山浩（国立医薬品食品衛生研究所食品部）、織朱實（上智大学地球環境学研究科）、高木彩（千葉工業大学社会システム学部）、竹村和久（早稲田大学文学学術院）

リスク情報の伝達と質疑という従来の方法に対し、意見集約や政策決定における市民参加のワークショップ型会議で実際に活用されている手法を応用したリスクコミュニケーションのアクティブ手法が開発されている（杉浦ら 2017）。本研究では、テーマとして、「食品添加物の正しい理解」を取り上げ、ゲーミングの要素を取り入れたリスクコミュニケーションの手法開発を行った。ある自治体における実際のリスクコミュニケーション場面において、参加型手法としてゲーミングの要素を取り入れることで、従来型のリスクコミュニケーションと比べて参加者の積極的な関与による効果がみられることが示唆された。特に、参加者がリスク情報の論点を整理すること、論点に対して質問を考え、質問それ自体を参加者が小グループで評価する手法は、特殊な質問によって質疑の場がかく乱されることなく円滑に進める上で有効であることが明らかとなった。

No082 **自死遺族会を立ち上げた遺族の体験と求める支援**

ー遺族の自助グループ運営の支援に向けたアクションリサーチー

新里美智子（名桜大学人間健康学部）、鈴木啓子（名桜大学人間健康学部）

本研究は、自死遺族会を立ち上げた遺族への面接調査を通してその体験および求める支援を明らかにし、効果的な支援への示唆を得ることである。第1段階として遺族会の代表者である自死遺族に自助グループ立ち上の体験、グループの運営状況と求める支援について半構造化面接を実施し、データを質的統合法(KJ法)で分析した。本研究は研究者所属の倫理審査委員会の承認を得て実施した。研究協力への自由な意思を尊重し、個人情報保護、匿名性の確保に努めた。分析結果については協力者である遺族へフィードバックした後に了承を得て遺族支援に関わる専門家と共有した。第2段階として再度、自死遺族会を立ち上げた遺族へ半構造化面接を実施し、同様に分析を行った。その結果を遺族へフィードバックし了承を得て遺族支援に関わる専門家と共有した。第3段階では、これまでの経過と結果を考察し、遺族の自助グループ運営の支援について示唆が得られたので報告する。

No083 **心理臨床家のファンタジーの「読み」：絵本を読んで得られた語りより**

藤森優美香（九州大学大学院人間環境学府）、佐々木玲仁（九州大学大学院人間環境学研究院）

本研究では、心理臨床家（以下、臨床家）がファンタジーをどのように読んでいるかについて非臨床家と比較・検討を行う。藤森・佐々木（2017）では、臨床家が使用した「世界」「時間」「音楽」という単語を抽出し、それらの用い方を同じ単語を使用した非臨床家と比較・検討して臨床家の事象把握の特徴を論じた。本研究では単語だけでなく、語り全体から、各人の「読み」方を詳細に筆者が描写することで、個々の「読み」方の特徴を浮き彫りにするという形で再分析を行い、臨床家・非臨床家の「読み」を比較・検討した。その結果、臨床家は絵本と自身の間に独自の枠組みを導入した「読み」を行っており、一方で非臨床家は、絵本内のもの同士、自身や自身に近いものと絵本を直接的に繋ぐ「読み」を行なっていることが明らかになった。このことより、臨床家はファンタジーとの距離感を保ちつつ、そこに絵本の筋以外の話を「読ん」でいることが考えられる。

No084 **『人生すごろく』を介した語りの生成とアイデンティティ実践：女子高校生の語りへのスモール・ストーリー・アプローチ**

保坂裕子（兵庫県立大学環境人間学部）

『人生すごろく』の作成は、教育場面においてキャリア形成(渡邊、2010 など)や生活設計教育(斎藤ら、1999 など)において活用されている。また、ライフストーリーのひとつの表現方法として位置づける研究も見られる(吉川、2009; 杉浦、2012)。高校生にとって『人生』を意味づけ語することは容易ではないが、『すごろく』という表現ツールを用いて、<いまーここ>の時点での「わたし」を意味づける行為をとらえることは可能ではないか。『人生すごろく』として描いたものを、インタビューのなかで再び意味づける作業をおこなうとき、それは、<いまーここ>でのアイデンティティ実践として、彼女らの人生の意味づけの在り様を示しているといえるだろう。本研究発表においては、個別に作成した『人生すごろく』をもとに、インタビューにおける意味づけ作業の分析を行い、ナラティブ・アイデンティティの実践について、検討する。

No085 **色彩表現ワークショップの場は何をもたらし得るのか**

—多声性的な自己理解の生成の観点から—

林幸子（九州大学大学院統合新領域学府）、南博文（九州大学）

本研究では、グループワークによる色彩表現という自己表現を伴うワークショップの場での参加者の体験を実証的に明らかにするために、参加者の語りに着目した。そして、この場での複数の話者の会話の過程を、多声性的な自己理解の生成という観点からバフチンのポリフォニー論を基に考察を試みた。具体的には、ワークショップでは音を色で表現する②色で自己紹介③言葉を色で表現するという3つのテーマで参加者が色と形で描画を行ない、それぞれの表現について自由に語り合った。4グループ（1グループ3～7名）の事例について、会話の逐語録を作成し、参加者間の相互作用のパターンを分析した。その結果、ここでは想起の連鎖、表現と言葉のズレを起点とした会話の中で参加者相互の発言が重なり、新たな自己理解を伺わせる発話が生まれた。多声性的な自己理解という観点から考察した。

No086 **心理臨床場面における「会う」ことの治療的意味：面接後の余韻に着目した探索的研究**

田代結芽（九州大学大学院人間環境学府）、佐々木玲仁（九州大学大学院人間環境学研究院）

本研究では、心理臨床場面においてセラピストとクライアントが物理的に同じ場所に二人でいるということ、つまり「会う」ことの治療的意味について検討する。この検討のために、面接後の“余韻”に着目し対面と遠隔で比較検討を行う。対面の面接と遠隔の面接では、専門家として面接を行う臨床心理士でも両者の間で経験の差があることが考えられ、その差が結果に影響する可能性があるため余韻に着目する。専門家として面接を行っており、自らの体験や感覚を言語化することに経験があるといえる、臨床心理士を2名一組のペアとする方法を採用した。セラピー場面に近似した会話を行う時間を対面及びテレビ電話で過ごしてもらい、面接中の印象・面接後の余韻についてインタビューを行う。このようにして、得られたデータから対面面接と遠隔面接での面接後の余韻について言語的・非言語的に比較検討し、心理臨床場面における「会う」ことの治療的意味について論じる。

No087 **身体に分かち合いとしての爪切り行為**

松本光太郎（茨城大学人文社会科学部）

人間の心の成り立ちを表す日常行為として爪切りに注目して、乳幼児の観察を続けている。乳幼児は、手の随意性や両手の協働、視力や視覚、爪切りの必要性の理解、それらの未発達から自ら爪を切ることが出来ず、親をはじめとする大人に手足の爪切りを委ねざるを得ない。爪切りが他の身体をめぐる行為と異なるのは、「爪を切る」という表現の通り、身体の一部を刃物で切る行為、すなわち、親にとって子どもを傷つける可能性をはらむ行為であり、子どもにとって親に傷つけられる可能性をはらむ行為である点が挙げられる。本発表では、想定していた爪切り行為の成り立ちと、実際に観察された乳幼児における爪切りについて紹介し、私たちが発達の過程で経てきた「身体に分かち合いとしての爪切り行為」について検討する。

No088 **ソーシャルロボットのエージェンシー**

小池星多（東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科）、鈴木真広（東京都市大学）、千田翔太（東京都市大学）、中島裕輝（東京都市大学）

小型のソーシャルロボットを製作し、実際に大学の図書館に設置した。そして図書館職員とロボットとの関係性についてフィールドワークしてロボットのエージェンシーについて考察した。小型ロボットは著者の研究室が開発した「マグボット」で、安価なマイクロコンピュータを使用し PC やスマートフォンから音声合成をさせることができる。フィールドワークの期間は 2016 年 11 月から 2017 年 12 月である。ロボットは当初、図書館の入口に設置されただけであったが、職員がロボットが何ができるかを理解し、職員自身がロボットをプログラムすることで、ロボットは次第に仕事を与えられて図書館の入り口から内部に移動していった。また、ロボットは職員の手によって服を着せられ、受付にいて学生が来ると室内にいる職員を呼び出すことを担当した。ロボットは、図書館職員の一員として役割と信頼を得ることで、エージェンシーを持つようになった。

No089 **質的研究者の語りから捉える専門性の熟達と継承：やまだようこ氏のライフストーリーにおける生成継承性**

竹内一真（多摩大学グローバルスタディーズ学部）

質的研究は 21 世紀に入ってから大きな価値観の変換が起こった。この変革を前後して、研究者はどのように熟達を果たし、質的研究を継承してきたのか。本研究では質的心理学会の発起人の一人であるやまだようこ氏の語りをもとに専門性の熟達と継承という観点から上記の問題に迫る。やまだようこ氏に対しては 2 回のライフストーリーインタビューを行った。また、やまだ氏が過去に自身の研究について語った雑誌記事や論文書物の前書きやあとがきなども日記とみなしデータ収集を行った。その結果、熟達と継承という二つの学習のスタイルが見出された。一つの熟達は実験を中心とする実証的な心理学の学習を通じて博士論文を書き上げ、研究者としてのスタイルを確立する。一方の継承は、やまだ氏が混沌とした現場を捉えるための手法としてピアジェを自らの先行世代と位置づけ、日誌観察を実践していく中で、モデル構成のためのフィールド心理学を作り出していく。

No090 **「敏感さ」とは何か？ ― 自覚と無自覚のあいだにある思考態度**

上原智香子（明治大学大学院情報コミュニケーション研究科）

本研究は、「敏感さ」とはどのようなものかについて、実験心理学的手法と質的手法により心理的側面・生理的側面から考察するものである。主観的に敏感だと感じる人は、何についてどのように敏感なのか。まず、沖縄県宮古島市と静岡県において実験心理学的調査を実施、HSP 尺度にて主観的敏感さを確認した。主観的敏感さはとくに沖縄の中学生において道徳規範・共感性・批判的思考態度と関係があった。次いで、関東にて触覚検査器具を用い触覚（圧覚）における生理的敏感度の実測値を得、主観的敏感さと生理的敏感度の違いを検証した。結果、生理的敏感さと主観的敏感さは必ずしも一致していないことを確認した。この結果、「敏感さ」には自覚的敏感さと無自覚な敏感さがあると確認し、主観・生理それぞれに敏感度の高い人にインタビューを実施、とくに無自覚な敏感さと思考態度との関係を考察した。

No091 **就職活動後の社会人が描く樹木画と青年期イニシエーション体験との関連**

伊藤真平（東洋英和女学院大学大学院人間科学研究科）

イニシエーションとは、個人の段階的移行を可能にする加入儀礼のことであり（van Gennep, A., 1909）、現代では儀礼的側面が円滑化したため、内的体験の側面から再解釈が行われている。筆者は、大学生が就職活動を経て社会人へと移行する中での心理的体験過程について、社会人（入社2年目までの男女各5人）を対象にインタビュー調査をし、男性の就職活動がイニシエーション体験として機能すると考察した。調査では、樹木画を併せて実施しており、男性の描いた木に、儀礼上の体験に擬えられる特徴が認められたことから、今回は、就職活動後の社会人が描く樹木画に焦点を当て、男女間での特徴的差異や、描いた木に関する語りから、イニシエーション体験に重なる樹木画表現について分析、検討した結果を報告する。なお、本調査は、所属機関の研究倫理審査の承認、調査対象者の同意を得た上で実施している。

No092 **「ありがとう」と「すみません」は選択的な表現か**

- 会話分析の手法を用いた感謝表現の分析 -

岸本健太（関西学院大学言語コミュニケーション文化研究科）

「感謝の場面で用いられる詫び表現」。こうしたテーマのもと、日本語における感謝研究の多くが、一体どのようにして感謝表現（ありがとう）と詫び表現（すみません）を使い分けているのかを明らかにしようとしてきた。そうした研究ではアンケートや談話完成テストを用いて、相手との関係性やポライトネスのような、発話者の内面的特徴からの説明を行おうとしてきたが、その一方で実際の会話という「リアル」な場面に注目する研究は非常に少ない。そこで本研究では、新たな視点からのアプローチとして、実際の会話における感謝場面に注目し、会話分析の手法を用いた分析を試みた。分析の結果、感謝表現と謝罪表現は「同じ感謝場面」で使われうるが、感謝は「局所的なやりとりを終える」役割を、謝罪は「受益行為に先立つ緩衝材」としての役割を担っていることが分かった。これを踏まえ、本発表では今後の感謝研究における新たな視点を提示する。

No093 **五つの軸による心理学研究法空間の描出**

佐々木玲仁（九州大学大学院人間環境学研究院）

心理学研究法の分類においては、それぞれ異なった軸をもつ複数の分類法が存在する。扱うデータが数量か質的かという視点からの、質的研究法-数量的研究法-混合研究法という分類法はその一例である。これ以外にも、仮説の扱いによる分類（仮説生成-仮説検証-仮説なし）、推論形式による分類（演繹-帰納-アブダクション）、研究対象による分類（臨床-非臨床）、人称性による分類（一人称-二人称-三人称）という分類法を挙げることができる。これらの組み合わせには、仮説の取り扱いと推論形式のように強く交絡するものも、三人称研究が必ずしも質的研究ではないように、強い交絡はないものもある。本研究では、心理学の主要な学術誌に掲載された研究論文に採用されている方法を検討することで、上記の五つの軸からなる「研究法空間」を描出し、様々な研究の方法論上の位置づけを行なう。また、従来行われてこなかった型の研究法による研究の実施可能性も論じることとする。

No094 職場において援助を求めない教師に対する管理職のアプローチに関する検討

酒井麻紀子（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）、窪田由紀（九州産業大学人間科学部臨床心理学科）

本研究は、職場で自ら援助要請をしない教師に対するアプローチについて、管理職の立場から検討することを目的とする。近年の学校現場では、教師のメンタルヘルスや「チーム援助」（e.g.、石隈、1999）の観点から、教師自身が職場において適切に援助を求めること（援助要請）の重要性が指摘されている。しかし、職務上の困難を抱える教師を援助しようとしても、当該教師が問題を認知していない場合や、頑なに援助要請しない場合など、その対応に難しさを感じるケースも少なくないと予想される。そこで本研究は、自ら援助要請をしない教師に対するアプローチについて、小学校の管理職（校長・教頭）に半構造化面接を行った。学校全体のマネジメントを担う管理職が、職場において援助要請をしない教師をどのように捉え、援助を届けるかについてのプロセスをモデル化することで、教師の職場内での支え合いや「チーム援助」の実現に有効な知見を提示できると考えられる。

No095 Round Study における移動の意味とは？

黒田真由美（京都大学大学院教育学研究科）

本研究では、小学校の事後検討会で実施された Round Study での教師の語りについて検討した。Round Study は2回の席替えを伴うワークショップ型研修であり、2回目の席替えでは元の席へ戻り最初のメンバーと議論することに特徴がある。そこで、同じグループに戻ってくことで議論にどのような変化があるのかについて検討することを試みた。その結果、移動終了後には、自分の属するグループという意識が強くなる様子がみられた。最初のグループでは、それぞれのグループに対するホームとしての意識はみられない。しかし、移動に伴う異なるグループでの議論では、自分のグループでの議論を振り返る語りが多くあった。そして、戻ったときには、他のグループの意見を参考に議論する様子がみられた。Round Study では、参加者は他のグループの議論を持ち帰り共有することが重要であり、意見を尊重しあう関係性形成が進められると考える。

No096 街のことばに関わることばの教育の可能性 一言語景観を活用した日本語授業事例から

佐野香織（早稲田大学日本語教育研究センター）

本発表は、東京・私立大学の留学生対象日本語選択科目「街のことばを知る、考える創る」という授業における、学生と教師が「街のことば」を考える過程を考察するものである。本授業は、言語景観をことばの学習に活用したものである。履修学生（日本語初級）は、キャンパス近郊に住む者も多く、大学キャンパス内、キャンパス近辺、キャンパスと隣接する商店街で日々を過ごしている。授業は、学生が日常を営む街でことばを知り、街のことばがどのようなものであるかを学ぶだけでなく、自分はどのように街のことばに関わるのか、今後自分がどのようなことばの使用者になるのか、どのようにことばを学ぶのか、考える姿勢を養うことを目的としている。履修生は、この考える過程を通しての気づきと提案を学期末にビデオ作品としてまとめた。本発表では、クリティカル・リテラシーの観点から、授業実践についての考察を共有したい。

No097 **マーケティングにおけるフォーカス・グループ・インタビューの相互行為**

文野洋（文京学院大学人間学部）、ツノダフミコ（（株）ウェーブプラネット）、小野滋（（株）インサイトファクトリー）

マーケティングにおいて行われるフォーカスグループインタビュー(FGI)では、司会者であるモデレーターが、さまざまな働きかけによって参加者どうしの相互作用を促進するよう努める。その結果、個人別のインタビューでは得られなかった各参加者のより多様な回答や、グループに創発された新たな視点や価値を得ることができる。本研究では、FGIにおけるモデレーターの働きかけの特徴を、FGI 参与者間において実現される「語りの関係性」に注目することにより記述する。FGI においては、各参加者は共通の属性を持つことから、相互に同意可能な考え方や体験の共有がなされる一方で、他者とは異なる考えや行動を報告することが期待されている。こうした「私の」体験や考えの語りが、いかんとして他者の語りをとりいれたり、重ねられたり、むすびついたりするのか、またそれらの特徴はモデレーターの働きかけのあり方とどのように関連するのか（しないのか）を検討した。

No098 **質的研究の極北 / 極南：質的研究ぎりぎりアウトの研究を頑張って考える**

荒川歩（武蔵野美術大学造形学部）

質的研究の教科書が多く出版されるようになっているが、他方では、「ある方法を教科書通り使えば質的研究だ」という主張は間違いだともいわれる。しかし、とはいっても、現段階で質的研究として動かせないイメージが本当はあるのではないだろうか。たとえば、一つのインタビューデータから、ランダムに言葉を切り出して、ところどころの意味の通らないところを迫真的な想像力で補うのは質的研究としてはなぜ駄目なのか？本研究では、現在の質的研究のイメージに挑戦するため、良い研究ではなく、「これもありなの？」というぎりぎりアウトの研究を理論的に検討する。このことを通して、質的心理学が潜在的に持っている座標軸を反省的に考えることに挑戦したい。

No099 **ストレスフルな体験における意味づけのネットワーク的解釈の検討**

上條菜美子（東京成徳大学応用心理学部臨床心理学科）

本研究では、人はストレスフルな体験に遭遇したとき、どのように意味を生成していくのかを検討するため、20～60 代の男女を対象に web パネル調査を実施した。意味づけの構造を理解するためには、個人の内的要因間の関連を検討するのではなく、その体験にまつわる当事者の行動や感情、当事者を取り巻く他者や環境、状況間の関係やそれらのつながりを、包括的に捉える研究が必要であると考えられる。そこで本研究は、「ストレスフルな体験がある対象（人・モノ・こと）との間につながりを形成すること」を、「ストレスフルな体験を中心としたネットワークを構築すること」と再解釈し、当事者は体験についてどのようなネットワークを構成しているのかを、実際にネットワーク図の描写を求め検討した。その結果、描かれたネットワーク図の特徴として、ストレスフルな体験の詳細や生じた不快感情、その出来事から派生した問題、そして、将来や周囲の人間を心配する内容を示すノード（点）から構成されるものが多いことが確認された。

No100 **帰り道はなぜ短い？—往路と復路での環境探索行為の質的变化への着目—**

山本敦（早稲田大学人間科学研究科）、友野貴之（早稲田大学人間科学研究科）、古山宣洋（早稲田大学人間科学学術院）

復路が往路よりも短く感じる現象は Return Trip Effect (RTE) と呼ばれ、その要因についていくつかの実証研究が行われてきた。しかし先行研究では、往復の各旅程に対する評価の比較を指標として用いているため、より根本的な、旅程内での「もうここまで来たのか」という経験・実感としての RTE が無視されてきた。これは時間経験を「神経パルス等の時間関連情報の累積への評価」とし、それが旅程に内在する要因によって歪むというモデルを前提とするため、旅程終了後にしか往復の評価の比較が行えないためである。これに対して著者らは、時間経験の根本を「対象への行為幅の調整の失敗」とし、復路での環境探索行為の質的变化が調整の失敗を誘発することにより RTE が生じるとする仮説を提案した(山本・阿部 2015、2017)。本発表では、実環境の往復旅程での視線計測と「今何を見ているか」に関する言語報告から、往路復路での探索行為の変化を定性的に記述することで仮説を検討する。

No101 **「組織開発」を用いた社会福祉組織変革プロジェクトにおける協働者である実践主体の中間管理職の聞き取り調査**

得津慎子（関西福祉科学大学社会福祉学部）

ある社会福祉法人においてアクションリサーチによる組織開発により、現場管理者（実践主体者）と研究者が協働して組織改革プロジェクトを立ち上げた。その全体の効果測定を、実践主体者への聞き取りと報告者（共同研究者）の経験などの質的調査によって行った。調査では実践主体者の意識の変化を通して組織風土に影響があったのみならず、個人的生活や職場状況の変化について多く語られた。またプロジェクト実施前の周到な準備の必要性和、終了後の実践主体者がプロジェクトで体得した成果を咀嚼し、取り入れる自然な様にも着目された。それらから実践主体者の生活の全体への着目が、実践現場の変化を職場風土全体の変化につなぐという示唆を得、それは社会福祉学の基本である人と全体の相互作用、環境の全体を見る立場であった。本プロジェクトに役立てるためにも効果測定における質的調査の意義を考察したい。（関西学院大学倫理審査委員会承認）

No102 **「会議」における協働の検討 —調整とつながり—**

井上清美（姫路獨協大学看護学部）

近年、行政活動の様々な分野において、住民との協働を意識した「会議」が求められている。「会議」では、主催者である行政側と参加を求められた関係団体の代表者や住民が、様々に関与しあいながら互いの思いをすり合わせ、協働を探索している。報告者は、10年間継続して、関係団体代表や住民が委員として参加する行政主催の「会議」に参加してきた。しかし、「会議」のどのような側面が、住民との協働に関連したのかについて、明確になっていないと思われる現状がある。本報告では、参加したひとつの行政会議の特性を会議録から分析し、「会議」における協働を促進したと考えられる事柄について検討した。結果、調整とつながりの枠組みが得られた。会議録の分析や報告については、関係者の承諾を得た。

- No103 **写真に表現されたレジリエンスの主観性と文脈性 ——回復の統制可能性を読み取る——**
平野真理（東京家政大学人文学部）、綾城初穂（駒沢女子大学）、梅原沙衣加（JMA メンタルヘルス研究所）
- 個人のレジリエンス（精神的回復力）は、尺度によって数値として評価されることが多いが、「どのように回復するか」という回復のあり方は実際には多様で、非意識的なものである。そうした尺度に表れない特徴を理解するための方法として、描画等を用いた投影法の活用が試みられている。そこで本研究では、個人のレジリエンスを理解するツールとして写真表現を取り上げ、そこに何が投影されうるかを検討することを目的とした。女子大学生138名に「落ち込み」と「回復」を表す写真を各1枚撮影してもらい、その撮影内容と説明文章を複数の観点からカテゴリー化した結果、対象物との体験的距離から読み取れる【主観性】（客観的特性・状態～投影された心理的体験）と、対象物以外の要素から読み取れる【文脈性】（他との関係で生じる状況～対象のみ）の2軸が抽出され、本人にとってのレジリエンスの統制可能性が表現される可能性が示唆された。
- No104 **写真を媒介とした保育者のマルチボーカル・エスノグラフィーの開発**
中坪史典（広島大学大学院教育学研究科）
- 本研究の目的は、保育実践の文化的意味や社会・文化的文脈との関係を探り出すことができるような写真を用いて、保育者の多声的な語りを収集し、紡ぎ合わせることで、多様な立場の保育者がまるで相互に会話を交わしているようなエスノグラフィー（民族誌的記述）を描き出すための研究方法論を開発することである。Tobin（1989）が開発した Multi-vocal Visual Ethnography を援用し、映像ではなく写真を刺激媒体（cue）と位置付けることで、文化を反映する保育実践を描き出す試みについて、映像とは異なる特徴的な知見の導出を試みる。
- No105 **保育士は未就学児のリーダーシップをどう捉えるか**
FU TULEGEN（茨城大学人文社会科学研究科）
- 未就学児にとっての幼児教育はたくさん子どもたちと出会い人間関係を築いていく機会であり、初めてリーダーシップ行動を発揮してみる場ともなる。中国・内モンゴル出身の筆者は、日本の幼児教育現場の見学をしたときに、日本の未就学児はより問題解決力や忍耐力をつけているというところに違和感を覚えた。そこで本研究では、未就学児にとってもリーダーシップは重要なスキルであると考え、保育士が子どもたちのリーダーシップをどう捉えるかを検討する。日本のある子ども園での自由遊び場면을観察し、その結果について保育士と語り合う。またそれを内モンゴルの保育士に伝え、その反応を得て、さらにそれを日本の保育士に伝え検討を重ねる。日本と内モンゴルの保育士のリーダーシップの捉え方にはズレが生じると予想されるが、そのズレがどのような環境・教育・価値観、あるいは文化の違いによるのかを明らかにする。

No106 **自然保育への移行に伴う保育者の意識変容と葛藤：固定遊具から森へ**
境愛一郎（宮城学院女子大学教育学部）

保育において、ブランコや滑り台といった固定遊具は、「心身の発達にとって重要な役割を果たす」（文部科学省、2016）と同時に、多くの保育者が、遊びの原風景（栗原・野尻、2005）として想起する屋外の保育環境を象徴する存在である。一方で、近年では、北欧のアウトドア保育などの思想を取り入れ、人工物や既成の遊具よりも、自然環境と関わることを重視した保育へと転換を図る施設・団体も少なくない。こうした転換は、保育者の実践観や遊び観をも大きく揺るがす出来事と考えられる。A こども園では、園舎の新築に伴い、設置していた固定遊具の一切を排除し、隣接する森を軸に保育を展開するという大規模な方針転換を行った。本研究では、勤務年数などが異なる同園の保育者7名を対象にインタビュー調査を実施し、そのデータをSCAT（大谷、2011）で分析することで、自然保育への移行に伴う保育者の意識変容や葛藤を明らかにする。

No107 **英語学習における演劇創作過程の事例研究 ～学習者アイデンティティのズレに着目して～**
鐘ヶ江織代（青山学院大学大学院社会情報学研究科ヒューマンイノベーションコース）

本研究では、プロジェクト型の英語学習における演劇創作活動に注目し、その過程を明らかにすることを目的とする。対象となる英語学習者は、英語以外の専門家の指導を受けることなく、年齢(16歳以上)、性別、職業、英語レベルにかかわらず11ヶ月の時間をかけて23分の英語劇を創作するクラスに所属する。このような独自のカリキュラムを必修科目として取り入れている英語学校を参与観察した。受講生へのインタビューによる予備調査を行ったところ、英語学習者としてのアイデンティティがある中で、演劇人としてのアイデンティティが立ち上がり、独自のアイデンティティと学習過程が立ち上がる様子が垣間見れた。本発表では、2017年9月から11月まで月曜日ドラマクラスの活動に参与し、台本作成、演技練習、舞台上演などについてエスノグラフィーの手法を用いて分析し、受講生のアイデンティティの変化、学習内容について考察し、発表するものである。尚、対象者にはすでに承諾書によって、発表の承諾を受けている。

No108 **参加型デザインにおける越境的対話の可能性：アイデア高度化セッションの分析から**
南部美砂子（公立はこだて未来大学情報アーキテクチャ学科）、岡本誠（公立はこだて未来大学情報アーキテクチャ学科）、中野颯（株式会社HBA）

潜在的なユーザ（生活者、一般市民）とデザイナーなどの専門家による共創の場を設定し、「未来の暮らしをデザインする」というテーマのもと、図的表現を用いた新しい参加型デザイン手法を実践した。本研究は、その最終段階で行われたサービス完成のための専門家間のコミュニケーション場面（アイデア高度化セッション）を対象として、共創プロセスの認知的、社会文化的特性を探索的に分析し、参加型デザインにおける越境的対話の可能性について検討するものである。3時間に及ぶセッションのなかでは、専門性と性別による視点や論点の偏りがインフォーマルに指摘されたり、専門家同士の議論の内容を非専門家と共有するための仕組みや、最終的にアイデアをユーザに還して評価してもらうことまで含めた共創の場の重要性が確認されていた。これらの分析結果をふまえて、専門家の越境における困難と課題、可能性について議論する。

No109 **博物館での「出会い (encountering) 」は、日常生活の中でどのように形を変えていくか ー来館者の博物館体験を理解する試みー**

坂倉真衣 (宮崎国際大学教育学部児童教育学科)、真鍋徹 (北九州市立自然史・歴史博物館)

「博物館体験」は、「ある人の心に博物館に行こうという考えが最初に浮かんだその瞬間から、実際の博物館訪問を経て、さらに博物館訪問が記憶の中だけに残っているような時点まで続く旅」(Falk & Dierking1996)と表現されるように、来館者によって極めて多様なものである。その多様さを丁寧に捉えていくことは、従来の静的な来館者像、博物館像に収斂されない鮮やかな博物館像を示す可能性をもつものであると考える。発表者は、これまでに博物館における来館者と展示物との「出会い」を「引き出される」「ぶつかる」「つなげられる」「浮かび上がる」という4観点で捉えることで、同じ展示物でも来館者によって極めて多様に体験されることなどを説明してきた。本発表では、「出会い」によって、来館者の中に「浮かび上がった」ものに、博物館を出てから日常生活の中でどのようなものが「ぶつけられ」、形を変えていくのかについて、3組の被験者の日記をもとに考察をする。

No110 **伝えたいことを伝えるために専門家がすること**

町田佳世子 (札幌市立大学デザイン学部)、河村奈美子 (滋賀医科大学医学部看護学科)

自分で考え行動する子ども達を育てることを目的に、学校教育の枠を超えて、様々な領域でその道一筋に仕事をするプロフェッショナル(以下専門家と呼ぶ)が学校の内外で子ども達を対象にセミナーや授業、ワークショップを行う機会が増えている。その際に伝えたいことを盛り込みすぎると子ども達は消化しきれず、伝えたいことが伝わらないままになることも少なくない。専門家による授業やセミナーの成功例を調べていくと、その多くは専門家自身が何を伝えたいのかを鋭く自覚し、内容を最小限に絞っていることが伺える。伝えたいことの取捨選択はセミナーが成功する重要なカギなのである。本研究では、学校で授業を行ったことのある専門家へのインタビューとその授業で子ども達に伝わったことの調査結果を対比しながら、したいこととできることの折り合いに苦闘しながらテーマを絞り込んでいく過程を読み解き、取捨選択の決断の拠り所を探ることを試みる。

No111 **表現が生まれる一瞬間**

香曾我部琢 (宮城教育大学教育学部)

作曲家が後に名曲と呼ばれる主題を生み出したり、画家がこれまでにない描画法を創出したり、俳優が観客の心をつかむような演技をしたり、音楽や美術、演劇などの芸術表現活動では、“創造的”と呼ばれる、独創的で多くの人々の感性を揺さぶる行為やモノが生み出される瞬間がある。本研究では、その芸術的な表現活動において創造性が高いと評価される行為やモノが生み出される瞬間のプロセスを TEA を用いて微視的に分析する。

日本質的心理学会第 15 回大会 準備・実行委員会

大会準備委員長	名桜大学総合研究所	稲垣絹代
事務局長	名桜大学	鈴木啓子
準備委員	立命館大学	やまだようこ
	広島国際大学	鹿嶋達哉
	情報工房	山浦晴男
	姫路獨協大学	井上清美
	愛知医科大学	白井裕子
	名桜大学	野原 萌

大会実行委員	名桜大学	永田美和子	大城凌子
		横川裕美子	田場真由美
		玉井なおみ	松下聖子
		比嘉憲枝	佐和田重信
		鬼頭和子	伊波弘幸
		島袋尚美	長嶺絵里子
		西田涼子	大浦早智
		安仁屋優子	溝口広紀
		仲村怜	新里美智子
		九津見彩子	新城慈
		院生 鯉淵乙登女	

広告・展示

新曜社
 北大路書房
 ナカニシヤ出版
 コザすばる書房
 なんよう文庫
 沖縄愛楽園自治会
 ユニバーサル・サウンドデザイン
 沖縄伝統ブクブクー茶保存会
 羽地の駅やんばるたまご
 紀伊國屋書店

制作(HP・印刷物等)

コムラ



話者側でできる“聴こえの支援”を。

comuoon® SE
COMMUNICATION SUPPORT SYSTEM

卓上型対話支援システム

コミュニケーション

「聴こえやすい」を、
みんなのあたり前に。

聴こえにくい、ということ。目には見えないその問題を、抱えながら暮らしている人たちがたくさんいます。その悩みをなくし、誰もが聴こえやすい社会をつくることはできないか。そんな想いから、コミュニケーションサポートシステム「comuoon」は誕生しました。それは、話者側でできる全く新しい聴こえの支援。新しいみんなのあたり前が、カタチになりました。

特許取得済

特許番号5731602

※本製品は、医療機器認定を取得した補聴器ではありません



comuoon® 無料貸し出し実施中

※貸し出し期間は、7日間となります

お問い合わせ窓口 製品の仕様・使い方や修理などのご相談は、お電話、ホームページおよびEメールサポートまでお願いいたします。

弊社では、聴こえが気になる方でもお問い合わせいただけるように、お電話とは別にメールアドレスおよびWebサイトでの窓口を設置しております。

TEL:03-6427-6815 FAX:03-6745-3329

ホームページは「<http://u-s-d.co.jp>」から、
Eメールの場合は「support@u-s-d.co.jp」へお問い合わせください。

受付時間 10:00～18:00 土・日・祝、休業日を除く ※お休み明けなどの混雑時は、返答にお時間をいただく場合がございます。

universal sound design® ユニバーサル・サウンドデザイン株式会社 URL: <http://u-s-d.co.jp>

東京本社 〒105-0022 東京都港区海岸1-9-11 マリックス・タワー 2F TEL: 03-6427-1467 FAX: 03-6745-3329
西日本支社 〒810-0001 福岡県福岡市中央区天神4-8-2 天神ビルプラス5F TEL: 092-713-7474 FAX: 092-713-7473

私たちはNPO法人日本ユニバーサル・サウンドデザイン協会を通じ、聴こえの改善が求められる環境において、様々な活動を通じて支援を行っています。また、製品の売り上げの一部を寄付させていただくことで、コミュニケーションサポートシステムの寄贈を行っています。

「ユニバーサル・サウンドデザイン®」「comuoon®」は、ユニバーサル・サウンドデザイン株式会社の登録商標です。

北大路書房

〒603-8303

京都市北区紫野十二坊町12-8

☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393

http://www.kitaohji.com

グラフィック・メディスン・マニフェスト

—マンガで医療が変わる— M. K. サウウィック他著 小森康永他訳 A4変型判・約224頁・予価3600円＋税 マンガという媒体とヘルスケア言説の間の相互作用を探究する新しい試み。その中核は、健康と病いについてのストーリーテリングであり、患者の複雑な経験を描き出すことにある。矛盾する視点や経験で「複数の患者」を鮮やかに表現する事へ誘う。

SNSカウンセリング入門

—LINEによるいじめ・自殺予防相談の実例— 杉原保史・宮田智基著 四六・184頁・本体1800円＋税 SNSは、自殺やいじめ等に悩む若年層の支援で活用が期待されている。その一方で支援者は新たなツールに戸惑うことも多い。行政初のLINE相談事業の取り組みを示し、その経験知を伝える。若年層の悩みへ近づく扉を開き、SNS相談支援へと誘う。

行動変容を促すヘルス・コミュニケーション

—根拠に基づく健康情報の伝え方— C. エイブラハム・M. クールズ編 竹中晃二・上地広昭監訳 B5・208頁・本体3600円＋税 健康行動を促す情報を提供する機会は種々あるが、実際に行動を変容させることは難しい。健康づくりや生活習慣病の予防を促す伝え方の工夫や実践的で科学的な根拠に基づく資料づくりを行うためのポイントを詳細にガイドする。

心理学ベーシックなるほど！心理学観察法

第4巻 三浦麻子監修 佐藤 寛編著 A5・232頁・本体2200円＋税 現実に即したデータを収集できる研究方法であるが、心を直接見ることは難しい。心の動きや働きを知るためには、行動を観察することとなる。本書では、科学的観点からデータを収集し、整理・分析して報告するための理論と技法を解説。目指すゴールを描きながら学べるように、事例も幅広く紹介。

心理学って面白そう！
どんな仕事で活かされている？

シリーズ 心理学と仕事 (全20巻)

シリーズ 監修 太田信夫

●A5判・約160～220頁・予価2000～2600円＋税

- | | | | | |
|-------------|------------|------------|-------------|----------------|
| 1 感覚・知覚心理学 | 2 神経・生理心理学 | 3 認知心理学 | 4 学習心理学 | 5 発達心理学 |
| 6 高齢者心理学 | 7 教育・学校心理学 | 8 臨床心理学 | 9 知能・性格心理学 | 10 社会心理学 |
| 11 産業・組織心理学 | 12 健康心理学 | 13 スポーツ心理学 | 14 福祉心理学 | 15 障害者心理学 |
| 16 司法・犯罪心理学 | 17 環境心理学 | 18 交通心理学 | 19 音響・音楽心理学 | 20 ICT・情報行動心理学 |

ナカニシヤ出版

TEL 075-723-0111 〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15
FAX 075-723-0095 http://www.nakanishiya.co.jp/ (表示は税抜価格)

早わかり混合研究法

J.W. クレスウェル 著 抱井尚子 訳
定義や手順、基本的スキルなど、重要なポイントがばつと読んでつかめる最適な入門書。
2400円

基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法

高梨克也 著
会話を理論的・体系的に説明しようとする人のための入門書。
2400円

文系のためのSPSSデータ解析

山際勇一郎・服部環 著
人文系領域で必要となるデータ解析法を基本から学ぶ。
2700円

質的研究のための理論入門

P. プラサド 著 箕浦康子 監訳
◎ポスト実証主義の諸系譜
考え方、基本的概念、研究事例、そして批判点を明快に解説。
3800円

心理統計のためのSPSS操作マニュアル

金谷英俊・磯谷悠子・牧勝弘・天野成昭著
◎t検定と分散分析
操作画面から丁寧に説明。
2500円

社会調査のための計量テキスト分析

樋口耕一 著
◎内容分析の継承と発展を目指して
データ分析フリーソフトKH Coderの開発者による解説と事例。
2800円

グラウンデッド・セオリーを構築する(第2版)

キャシー・シヤーマズ著 岡部大祐監訳
初版の議論をより詳細に、より丁寧に解説。
予価7000円

リフレクティヴ

矢原隆行 著
◎会話についての会話という方法
まったく新たなコミュニケーション空間の創出方法を導く。
2000円

テーマティック・アナリシス法

土屋雅子 著 ◎インタビュデータ分析のためのコーディングの基礎
透明性・厳密性を確保する。
2200円

社会関係資本の地域分析

埴淵知哉 編
社会関係資本を個人ではなく地域の特性として考え、数値化など様々な方法論的問題について考察。
3000円

実践的メタ分析入門

岡田 涼・小野寺孝義 編
◎戦略的・包括的理解のために
メタ分析の下準備から応用研究までを解説。
2800円

最強の社会調査入門

前田拓也・秋谷直矩・朴沙羅 木下衆 編
◎これから質的調査をはじめるとの人のために
社会調査の極意を、気鋭の社会学者たちが伝授。
2600円

